

# 蒲船津江頭遺跡Ⅱ

—福岡県柳川市三橋町蒲船津所在遺跡の調査—

2010

福岡県教育委員会



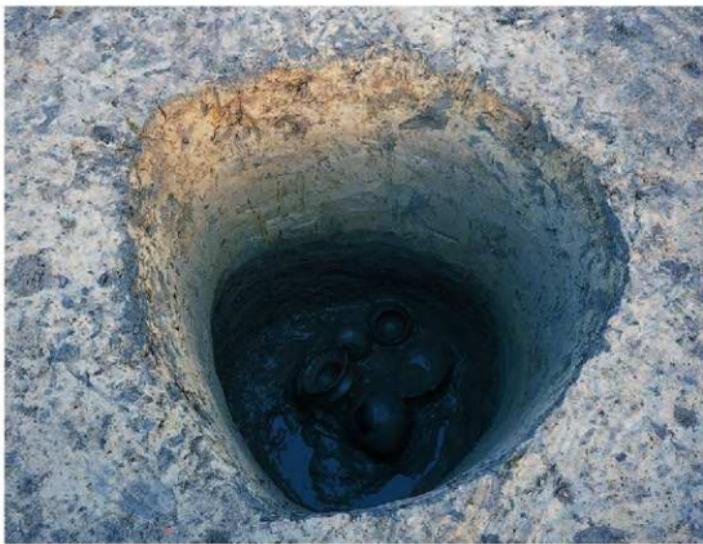
1. IIIb区遠景（北東から）



2. III区3・5号掘立柱建物跡（南から）



1. III区 14号土坑（北から）



2. III区 38号土坑（西から）

# 序

福岡県教育委員会では、平成15年度から平成19年度にわたり国土交通省九州地方整備局の委託を受けて、有明海沿岸道路大川バイパス建設に伴う埋蔵文化財の発掘調査を実施しました。本報告書は平成17年度から19年度にかけて行った、柳川市三橋町蒲船津に所在する蒲船津江頭遺跡のⅢ・Ⅳ区の調査の記録で、本遺跡の調査報告の2冊目に当たります。

本遺跡は矢部川支流の沖端川が形成した低地に立地しています。調査では、弥生時代終末期から古墳時代初頭の時期の集落跡を中心として、以降も中世まで遺構が散見される遺跡であることを確認しました。木器や掘立柱建物跡の礎盤など低湿地の集落としての特色のある調査成果が数多くあがるとともに、この地域の歴史を知る上で貴重な資料を得ることができました。

本書が教育、学術研究とともに、文化財愛護思想の一助となれば幸いです。

なお、発掘調査・報告書の作成にいたる間には関係諸機関や地元を始めとする多くの方々に御協力・御助言をいただき、厚く感謝いたします。

平成22年3月31日

福岡県教育委員会

教育長 森山良一

## 例　言

- 1 本書は有明海沿岸道路大川バイパス建設に伴って発掘調査を実施した、柳川市三橋町蒲船津に所在する蒲船津江頭遺跡のI～IV区までの内Ⅲ・Ⅳ区を中心とした記録で、有明海沿岸道路大川バイパス関係埋蔵文化財調査報告の第8集である。
- 2 発掘調査及び報告書作成は、国土交通省福岡工事事務所の委託を受けて福岡県教育庁総務部文化財保護課が実施した。
- 3 本書に掲載した遺構写真の撮影は調査担当者が、遺物写真の撮影は北岡伸一が行った。なお、墨書き土器の墨書き部分については、九州国立博物館 烏越俊行氏の協力を得て、調査担当者が行った。空中写真の撮影は九州航空株式会社に委託し、ラジコンヘリによる撮影を行った。
- 4 本書に掲載した遺構図の作成は、榎島由佳里・河口綾香・佐々木貴美・横崎後平の協力を得て調査担当者が行った。
- 5 出土遺物の整理作業は九州歴史資料館及び文化財保護課大宰府事務所において、濱田信也・大庭孝夫・新原正典の指導の下に実施した。
- 6 出土遺物及び図面・写真等の記録類は、九州歴史資料館において保管する。
- 7 本書に使用した分布図は、国土交通省国土地理院発行の 1/25,000 地形図「羽犬塚・柳川・佐賀南部・七ヶ家」を改変したものである。本書で使用する方位は、國土座標II系による座標北である。
- 8 出土土器の多くが、弥生土器か土師器か明確に区分しがたい時期のものである。そのような土器については、本文中で遺物の種類を記載せず、出土土器を整理した表5の遺物の種類では、「弥生・土師器」と表示する。また、古墳時代の土師器についても、須恵器との並行関係が見られる以前のものは、本文中では種類として記載せず、表5でのみ表示する。
- 9 本書の執筆・編集は、坂元雄紀が行った。

# 目 次

## 巻頭図版

序

例言

目次

図版目次

挿図目次

表目次

Iはじめに	1
1 調査に至る経緯	1
2 調査の経過	1
3 調査・整理の関係者	6
II位置と環境	8
III調査の内容	12
1 遺跡の概要	12
(1) 遺跡の概要	12
(2) 基本層序	14
2 III区の検出遺構と遺物	17
(1) III区の概要	17
(2) 掘立柱建物跡	18
(3) 土坑	62
(4) III区出土石器	139
3 IV区の検出遺構と遺物	148
(1) IV区の概要	148
(2) 掘立柱建物跡	148
(3) 土坑	155
(4) IV区出土石器	157
4 金属製品	157
5 木器	158
IVまとめ	168
1 遺跡の時期	168
2 旧地形の復元	169
3 掘立柱建物跡	171

## 図版目次

卷頭図版 1	1 Ⅲb区遠景（北東から）	2 Ⅲ区3・5号掘立柱建物跡（南から）
卷頭図版 2	1 Ⅲ区14号土坑（北から）	2 Ⅲ区38号土坑（西から）
図版 1	1 Ⅲa区遠景（北東から）	2 Ⅲb区遠景（南から）
図版 2	1 Ⅲa区全景（上空から）	2 Ⅲb区全景（上空から）
図版 3	1 Ⅲb区空中写真撮影状況（南西から）	2 Ⅲb区北西隅基本土層（南から）
	3 Ⅲb区南東隅基本土層（北から）	
図版 4	1 Ⅲ区2号掘立柱建物跡（北から）	2 Ⅲ区3・5号掘立柱建物跡（南から）
	3 Ⅲ区4号掘立柱建物跡（南から）	
図版 5	1 Ⅲ区6号掘立柱建物跡（北から）	2 Ⅲ区7・8号掘立柱建物跡（東から）
	3 Ⅲ区9号掘立柱建物跡（東から）	
図版 6	1 Ⅲb区中央礎盤集中部（東から）	2 Ⅲb区東側礎盤集中部（西から）
	3 Ⅲb区26～28号掘立柱建物跡周辺礎盤検出状況（西から）	
図版 7	1 Ⅲ区1号土坑（南から）	2 Ⅲ区2号土坑（北から）
	3 Ⅲ区3号土坑（北から）	
図版 8	1 Ⅲ区4号土坑（北から）	2 Ⅲ区5号土坑（北から）
	3 Ⅲ区6号土坑（北から）	
図版 9	1 Ⅲ区7号土坑（北から）	2 Ⅲ区8号土坑（北から）
	3 Ⅲ区9号土坑（西から）	
図版 10	1 Ⅲ区10号土坑（東から）	2 Ⅲ区11号土坑（東から）
	3 Ⅲ区12号土坑（東から）	
図版 11	1 Ⅲ区13号土坑（西から）	2 Ⅲ区14号土坑（北から）
	3 Ⅲ区15号土坑（南から）	
図版 12	1 Ⅲ区16号土坑（南から）	2 Ⅲ区17号土坑（北から）
	3 Ⅲ区18号土坑（南から）	
図版 13	1 Ⅲ区19号土坑（北から）	2 Ⅲ区20号土坑（北から）
	3 Ⅲ区21号土坑（北から）	
図版 14	1 Ⅲ区22号土坑（西から）	2 Ⅲ区23号土坑（北から）
	3 Ⅲ区24号土坑（南東から）	
図版 15	1 Ⅲ区25号土坑（北から）	2 Ⅲ区25号土坑北側上層土器出土状況（南から）
	3 Ⅲ区26号土坑（北から）	
図版 16	1 Ⅲ区27号土坑（南から）	2 Ⅲ区28号土坑（東から）
	3 Ⅲ区29号土坑中層土器出土状況（西から）	
図版 17	1 Ⅲ区29号土坑下層土器出土状況（東から）	2 Ⅲ区30号土坑（北から）
	3 Ⅲ区30号土坑土層および中層土器出土状況（北から）	
図版 18	1 Ⅲ区32・33号土坑（北から）	2 Ⅲ区33号土坑（南から）
	3 Ⅲ区32・33号土坑土層（西から）	

- 図版19 1 Ⅲ区 34号土坑（北から）  
3 Ⅲ区 35号土坑（北から）
- 図版20 1 Ⅲ区 37号土坑（南から）  
3 Ⅲ区 39号土坑（北から）
- 図版21 1 Ⅲ区 40号土坑（北から）  
3 Ⅲ区 42号土坑（北から）
- 図版22 1 Ⅲ区 43号土坑（西から）  
3 Ⅲ区 45号土坑（北から）
- 図版23 1 Ⅲ区 46号土坑（東から）  
3 Ⅲ区 49号土坑（東から）
- 図版24 1 Ⅲ区 50号土坑（西から）  
3 Ⅲ区 51号土坑（東から）
- 図版25 1 Ⅲ区 52号土坑（西から）  
3 Ⅲ区 53号土坑（西から）
- 図版26 1 Ⅲ区 54号土坑（東から）  
3 Ⅲ区 55号土坑（北から）
- 図版27 1 Ⅲ区 56号土坑（西から）  
3 Ⅲ区 58号土坑（南西から）
- 図版28 1 Ⅲ区 59号土坑（北から）  
3 Ⅲ区 61号土坑（西から）
- 図版29 1 Ⅲ区 62号土坑（南から）  
3 Ⅲ区 64号土坑（南から）
- 図版30 1 Ⅲ区 65号土坑（南から）  
3 Ⅲ区 66号土坑（西から）
- 図版31 1 Ⅲ区 67号土坑（西から）  
3 Ⅲ区 68号土坑木器出土状況（北東から）
- 図版32 1 Ⅲ区 69号土坑（南から）  
3 Ⅲ区 71号土坑（北西から）
- 図版33 1 Ⅲ区 72号土坑（東から）  
3 Ⅲ区 74号土坑（北から）
- 図版34 1 Ⅲ区 75号土坑（東から）  
3 Ⅲ区 76号土坑（北から）
- 図版35 1 Ⅲ区 77号土坑（南から）  
3 Ⅲ区 78号土坑（南から）
- 図版36 1 Ⅲ区 79号土坑中層土器出土状況（北から）  
3 Ⅲ区 80号土坑（西から）
- 図版37 1 Ⅲ区 81号土坑（西から）  
3 Ⅲ区 82号土坑下層（東から）
- 2 Ⅲ区 34号土坑木器出土状況（北から）
- 2 Ⅲ区 38号土坑（西から）
- 2 Ⅲ区 41号土坑（西から）
- 2 Ⅲ区 44号土坑（東から）
- 2 Ⅲ区 48号土坑（東から）
- 2 Ⅲ区 50号土坑土層（西から）
- 2 Ⅲ区 52号土坑下層（西から）
- 2 Ⅲ区 55号土坑中層土器出土状況（北から）
- 2 Ⅲ区 57号土坑（北から）
- 2 Ⅲ区 63号土坑（北から）
- 2 Ⅲ区 65号土坑土層（北から）
- 2 Ⅲ区 68号土坑（北東から）
- 2 Ⅲ区 70号土坑（東から）
- 2 Ⅲ区 73号土坑（西から）
- 2 Ⅲ区 75号土坑土層（南から）
- 2 Ⅲ区 77号土坑土層（東から）
- 2 Ⅲ区 79号土坑（南から）
- 2 Ⅲ区 82号土坑上層（南東から）

- 図版 38 1 III区 83号土坑(北から) 2 III区 83号土坑土層(東から)  
3 III区 84号土坑(北から)
- 図版 39 1 III区 85号土坑土器出土狀況(東から) 2 III区 85号土坑完掘狀況(東から)  
3 III区 86号土坑(西から)
- 図版 40 III区建物および土坑出土土器
- 図版 41 III区土坑出土土器①
- 図版 42 III区土坑出土土器②
- 図版 43 III区土坑出土土器③
- 図版 44 III区土坑出土土器④
- 図版 45 III区土坑出土土器⑤
- 図版 46 III区土坑出土土器⑥
- 図版 47 III区土坑出土土器⑦
- 図版 48 III区土坑出土土器⑧
- 図版 49 III区土坑出土土器⑨
- 図版 50 III区土坑出土土器⑩
- 図版 51 III区土坑出土土器⑪
- 図版 52 III区土坑出土土器⑫
- 図版 53 III区土坑出土土器⑬
- 図版 54 III区土坑出土土器⑭
- 図版 55 III区土坑出土土器⑮
- 図版 56 III区土坑出土土器⑯
- 図版 57 III区土坑出土土器⑰
- 図版 58 III区土坑出土土器⑱
- 図版 59 III区土坑出土土器⑲
- 図版 60 1 III区出土石器① 2 III区出土石器②  
3 III区出土石器③ 4 III区出土石器④
- 図版 61 1 III区出土石器⑤ 2 III区出土石器⑥ 3 III区出土石器⑦  
4 III区出土石器⑧ 5 III区出土石器⑨
- 図版 62 1 IV区基本土層①(北から) 2 IV区基本土層②(南から)  
3 IV区 1号土坑(西から)
- 図版 63 1 IV区 2号土坑(南から) 2 IV区 3号土坑(南から)  
3 IV区 4号土坑(西から)
- 図版 64 IV区出土土器、石器およびI・III区出土金属製品
- 図版 65 木器①
- 図版 66 木器②
- 図版 67 木器③
- 図版 68 木器④

## 挿図目次

第1図	柳川市の位置	1
第2図	有明海沿岸道路調査地点位置図(1/50,000)	2
第3図	周辺遺跡分布図(1/40,000)	9
第4図	周辺地形および各調査区位置図(1/2,500)	13
第5図	III・IV区基本土層実測図(1/60)	14
第6図	III区造構配置図(1/200)	15・16
第7図	III区1・2号掘立柱建物跡実測図(1/60)	19
第8図	III区3・4号掘立柱建物跡実測図(1/60)	20
第9図	III区5号掘立柱建物跡実測図(1/60)	21
第10図	III区6号掘立柱建物跡実測図(1/60)	22
第11図	III区7・8号掘立柱建物跡実測図(1/60)	24
第12図	III区9号掘立柱建物跡実測図(1/60)	25
第13図	III区10号掘立柱建物跡実測図(1/60)	26
第14図	III区11号掘立柱建物跡実測図(1/60)	27
第15図	III区12号掘立柱建物跡実測図(1/60)	28
第16図	III区13・14号掘立柱建物跡実測図(1/60)	29
第17図	III区15号掘立柱建物跡実測図(1/60)	30
第18図	III区16号掘立柱建物跡実測図(1/60)	30
第19図	III区17・18号掘立柱建物跡実測図(1/60)	32
第20図	III区1～6・9・16・19・29・35・41・44号掘立柱建物跡出土土器実測図(1/4)	33
第21図	III区19・20号掘立柱建物跡実測図(1/60)	34
第22図	III区21号掘立柱建物跡実測図(1/60)	35
第23図	III区22・23号掘立柱建物跡実測図(1/60)	36
第24図	III区24・25号掘立柱建物跡実測図(1/60)	37
第25図	III区26号掘立柱建物跡実測図(1/60)	38
第26図	III区27・28号掘立柱建物跡実測図(1/60)	39
第27図	III区29・30号掘立柱建物跡実測図(1/60)	41
第28図	III区31・32号掘立柱建物跡実測図(1/60)	43
第29図	III区33・34号掘立柱建物跡実測図(1/60)	44
第30図	III区35号掘立柱建物跡実測図(1/60)	45
第31図	III区36・37号掘立柱建物跡実測図(1/60)	46
第32図	III区38号掘立柱建物跡実測図(1/60)	47
第33図	III区39号掘立柱建物跡実測図(1/60)	48
第34図	III区40号掘立柱建物跡実測図(1/60)	48
第35図	III区41号掘立柱建物跡実測図(1/60)	49
第36図	III区42号掘立柱建物跡実測図(1/60)	50

第37図	Ⅲ区 43・44号掘立柱建物跡実測図 (1/60) .....	51
第38図	Ⅲ区 45・46号掘立柱建物跡実測図 (1/60) .....	52
第39図	Ⅲ区 47～49号掘立柱建物跡実測図 (1/60) .....	54
第40図	Ⅲ区 50号掘立柱建物跡実測図 (1/60) .....	55
第41図	Ⅲ区 51号掘立柱建物跡実測図 (1/60) .....	55
第42図	Ⅲ区 52号掘立柱建物跡実測図 (1/60) .....	56
第43図	Ⅲ区 53号掘立柱建物跡実測図 (1/60) .....	56
第44図	Ⅲ区 45・46・48・49・52・56・57号掘立柱建物跡およびその他の礎盤出土土器実測図 (1/4).....	58
第45図	Ⅲ区 54号掘立柱建物跡実測図 (1/60) .....	59
第46図	Ⅲ区 55号掘立柱建物跡実測図 (1/60) .....	60
第47図	Ⅲ区 56号掘立柱建物跡実測図 (1/60) .....	60
第48図	Ⅲ区 57号掘立柱建物跡実測図 (1/60) .....	60
第49図	Ⅲ区 1～4号土坑実測図 (1/30) .....	63
第50図	Ⅲ区 2～4・7・11号土坑出土土器実測図 (1/4) .....	64
第51図	Ⅲ区 5～10号土坑実測図 (1/30) .....	65
第52図	Ⅲ区 11～14号土坑実測図 (1/30) .....	67
第53図	Ⅲ区 12号土坑出土土器実測図 (1/4) .....	68
第54図	Ⅲ区 15～19号土坑実測図 (19のみ1/40、他は1/30) .....	70
第55図	Ⅲ区 13・14・19・20号土坑出土土器実測図 (1/4) .....	72
第56図	Ⅲ区 20～22号土坑実測図 (1/30) .....	73
第57図	Ⅲ区 21号土坑出土土器実測図 (1/4) .....	74
第58図	Ⅲ区 23・24号土坑実測図 (1/40) .....	75
第59図	Ⅲ区 22～24号土坑出土土器実測図 (1/4) .....	77
第60図	Ⅲ区 24号土坑出土土器実測図 (1/4) .....	78
第61図	Ⅲ区 25～28号土坑実測図 (25・28は1/40、他は1/30) .....	80
第62図	Ⅲ区 25・26号土坑出土土器実測図 (1/4) .....	82
第63図	Ⅲ区 28・29号土坑出土土器実測図 (1/4) .....	83
第64図	Ⅲ区 29号土坑出土土器実測図 (1/4) .....	84
第65図	Ⅲ区 29・30号土坑実測図 (1/40) .....	85
第66図	Ⅲ区 30号土坑出土土器実測図① (1のみ 1/8、他は 1/4) .....	87
第67図	Ⅲ区 30号土坑出土土器実測図② (1/4) .....	88
第68図	Ⅲ区 30号土坑出土土器実測図③ (1/4) .....	89
第69図	Ⅲ区 32・33号土坑実測図 (1/40) .....	90
第70図	Ⅲ区 32～34号土坑出土土器実測図 (1/4) .....	92
第71図	Ⅲ区 34・35号土坑実測図 (1/40) .....	93
第72図	Ⅲ区 35号土坑出土土器実測図 (1/4) .....	94
第73図	Ⅲ区 37～41号土坑実測図 (1/30) .....	96

第74図	III区 37～39号土坑出土土器実測図(1/4) .....	98
第75図	III区 40・41号土坑出土土器実測図(1/4) .....	99
第76図	III区 42～45号土坑実測図(1/30) .....	100
第77図	III区 43・44・46・48・49号土坑出土土器実測図(1/4) .....	102
第78図	III区 46～50号土坑実測図(46のみ1/40、他は1/30) .....	104
第79図	III区 50・51号土坑出土土器実測図(1/4) .....	105
第80図	III区 51～55号土坑実測図(1/30) .....	106
第81図	III区 52・53号土坑出土土器実測図(1/4) .....	108
第82図	III区 55号土坑出土土器実測図(1/4) .....	110
第83図	III区 56～60号土坑実測図(1/30) .....	112
第84図	III区 57～59号土坑出土土器実測図(1/4) .....	113
第85図	III区 60～62号土坑出土土器実測図(1/4) .....	114
第86図	III区 61～65号土坑実測図(61・64は1/40、他は1/30) .....	116
第87図	III区 64・66号土坑出土土器実測図(1/4) .....	118
第88図	III区 66～70号土坑実測図(69のみ1/40、他は1/30) .....	119
第89図	III区 68号土坑出土土器実測図(1/4) .....	120
第90図	III区 69・70号土坑出土土器実測図(1/4) .....	121
第91図	III区 71～75号土坑実測図(1/30) .....	123
第92図	III区 71号土坑出土土器実測図(1/4) .....	124
第93図	III区 72号土坑出土土器実測図(1/4) .....	125
第94図	III区 73～75号土坑出土土器実測図(1/4) .....	127
第95図	III区 76～79号土坑実測図(79のみ1/30、他は1/40) .....	129
第96図	III区 76号土坑出土土器実測図(1/4) .....	130
第97図	III区 77号土坑出土土器実測図(1/4) .....	131
第98図	III区 78・79号土坑出土土器実測図(1/4) .....	132
第99図	III区 80～84号土坑実測図(83のみ1/40、他は1/30) .....	134
第100図	III区 80～82号土坑出土土器実測図(1/4) .....	136
第101図	III区 85・86号土坑実測図(85は1/40、86は1/30) .....	137
第102図	III区 83～86号土坑出土土器実測図(6のみ1/6、他は1/4) .....	138
第103図	III区出土石器実測図①(1/3) .....	140
第104図	III区出土石器実測図②(1/3) .....	141
第105図	III区出土石器実測図③(1/3) .....	142
第106図	III区出土石器実測図④(1/3) .....	143
第107図	III区出土石器実測図⑤(1/3) .....	144
第108図	III区出土石器実測図⑥(1/3) .....	145
第109図	III区出土石器実測図⑦(1/4) .....	146
第110図	IV区造構配置図(1/200) .....	149
第111図	IV区1・2号掘立柱建物跡実測図(1/60) .....	150

第112図	IV区3・4号掘立柱建物跡実測図(1/60) .....	151
第113図	IV区5・6号掘立柱建物跡実測図(1/60) .....	152
第114図	IV区7号掘立柱建物跡実測図(1/60) .....	153
第115図	IV区4・5・7号掘立柱建物跡およびその他の礎盤出土土器実測図(1/4) .....	154
第116図	IV区1～4号土坑実測図(1/30) .....	156
第117図	IV区1・4号土坑出土土器実測図(1/4) .....	156
第118図	IV区出土石器実測図(1/3) .....	157
第119図	金属製品実測図(1/1) .....	158
第120図	木器実測図①(1、5、7、8は1/4、他は1/3) .....	159
第121図	木器実測図②(11～15、17は1/4、他は1/3) .....	160
第122図	木器実測図③(21、27、28は1/4、他は1/3) .....	162
第123図	III・IV区遺構配置図及び地形復元想定図(1/600、土層は1/80) .....	170
第124図	III・IV区建物変遷図 .....	172

## 表 目 次

表1	国道208号有明海沿岸道路埋蔵文化財概要 .....	3
表2	III区掘立柱建物跡一覧表 .....	61
表3	IV区掘立柱建物跡一覧表 .....	155
表4	III・IV区出土石器一覧表 .....	164
表5	III・IV区出土土器一覧表 .....	165

# I はじめに

## 1 調査に至る経緯

蒲船津江頭遺跡は、有明海沿岸道路大川バイパス建設に伴い発掘調査した遺跡である。有明海沿岸道路は、大牟田三池港、佐賀空港などの広域交通拠点及び福岡県大牟田市、柳川市、大川市、佐賀県佐賀市、鹿島市など有明海沿岸の都市群を連携することで、地域間連携、交流を図るとともに一般国道 208 号等の渋滞緩和と交通安全確保を目的として計画された延長約 55km の地域高規格道路である。このうち、福岡県内は大牟田高田道路、高田大和バイパス、大川バイパスの 3 事業に区分される。大川バイパスは柳川市三橋町徳益から大川市大野島までの延長約 10km 区間であり、平成 10 (1998) 年 12 月 18 日に柳川市三橋町徳増から柳川市西蒲池までが整備区間指定された。2008 年 3 月 29 日には大牟田 IC から大川西 IC (21.8km) 間のうち高田 IC から大和南 IC を除く 21.8km が暫定供用され、初開通となった。

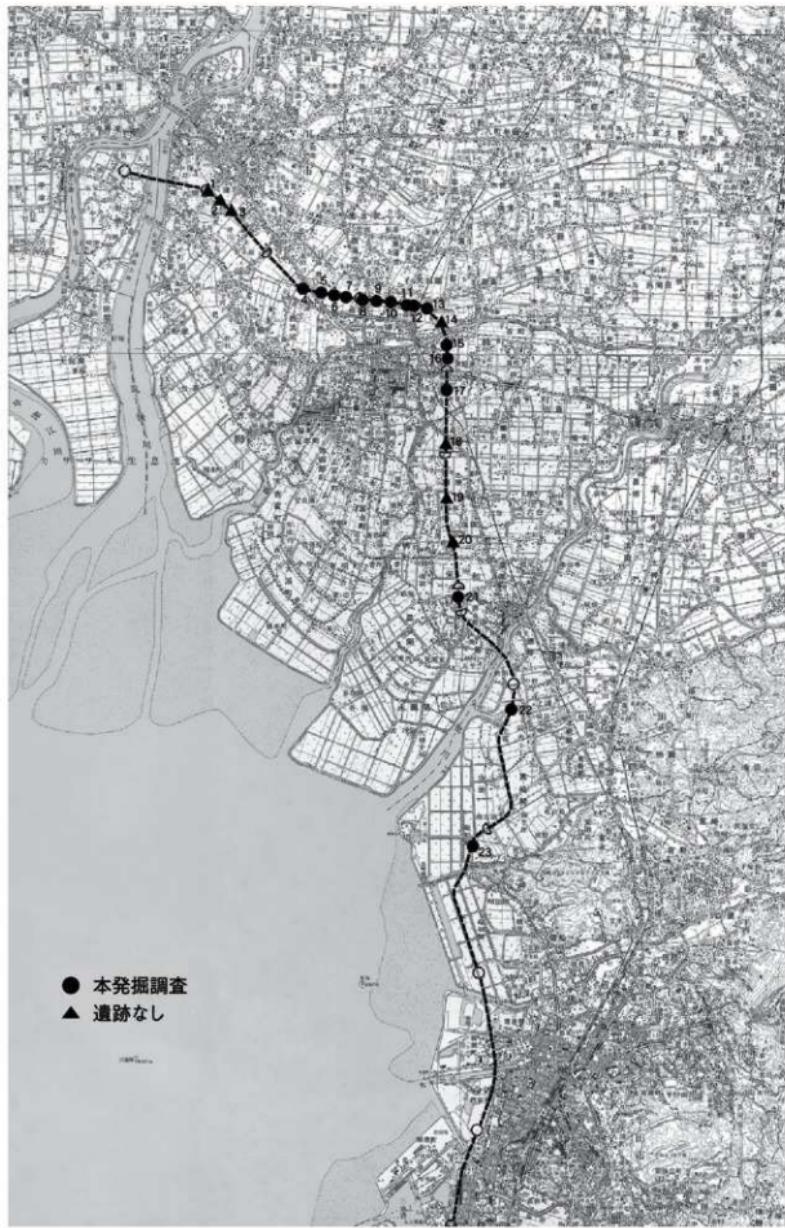
有明海沿岸道路建設に先立って、国土交通省九州地方整備局福岡国道事務所（以下「福岡国道事務所」という。）から平成 12 (2000) 年 11 月 16 日付け「一般国道 208 号有明海沿岸道路建設に伴う埋蔵文化財について」で文化財の有無についての照会があった。これに対し福岡県教育長総務部文化財保護課では平成 13 (2001) 年 2 月に 17 地点において文化財が所在し、それ以外の地点に関しても試掘確認調査等別途協議が必要である旨を回答した。そこで、福岡国道事務所及び有明海沿岸道路出張所と文化財保護課で隨時協議を行い、用地を取得できた地点から試掘確認調査を実施した。その結果、新たな埋蔵文化財包蔵地が確認される一方で、從来埋蔵文化財包蔵地とされていた範囲でも、客土に遺物が混入するのみで遺構が確認できないことが明らかになり、結果として本調査を要する 15 遺跡を確認した。（表 1）なお、蒲船津江頭遺跡については平成 16 年 9 月 14 日から 17 日にわたって山門郡三橋町大字蒲船津（現在柳川市三橋町蒲船津）周辺の試掘調査を実施した際に文化財の存在を確認し、本調査を行うこととした。

## 2 調査の経過

蒲船津江頭遺跡の調査は、平成 17 年度の第 1 次調査、平成 18 年度の第 2 次調査、平成 19 年度の第 3 次調査の三ヵ年にわたって行った。既存の排水溝で調査中も使用するため掘削できないものを境として、北から順に I ~ IV 区と区分した。また、道路建設の施工工程や用地の解決状況の都合から、各区でまとめて調査できなかったために、各区を必要に応じて調査の着手順に a ~ c と細分した。なお、全体の調整窓口は基本的に国土交通省福岡国道事務所有明海沿岸道路出張所



第 1 図 柳川市の位置



第2図 有明海沿岸道路調査地点位置図 (1/50,000)

表1 国道208号有明海沿岸道路埋蔵文化財概要

地番	市町名	大字名 (区画)	道路名	H19.4.1現在 対象面積 (m <sup>2</sup> )	試験発掘調査		発掘調査		報告書作成		退跡の概要	
					試験年度	体験的実績 (m <sup>2</sup> )	調査年度	面積(m <sup>2</sup> )	作成年度	面積(m <sup>2</sup> )	主な時代	特記事項
1 大川市	西浦池 ・高崎 ・高崎 ・高崎			12,900	H18	0						試掘済み、追跡なし
2 大川市	西浦池 ・高崎 ・高崎 ・高崎			25,700	H14-15-16	0						試掘済み、追跡なし
3 大川市	椿保			15,400	H15-16	0						試掘済み、追跡なし
4 大川市	坂井	坂井長永		3,820	H17-18	0	H17 H18	1,820 1,200	H19	3,020	鎌倉時代 ・桑原の区画溝	
5 柳川市	西蒲池	西蒲池古塚		14,200	H16	0	H17 H18	4,390 9,460 350	H19	14,200	平安時代 ・桑原の区画溝 鎌倉時代 ・磨呂土器 室町時代	
6 柳川市	西蒲池	西蒲池符塚坊		4,400	H16	0	H17	3,400	H19	3,400	古墳時代 ・桑原の区画溝 奈良時代	
7 柳川市	西蒲池	西蒲池古溝		4,530	H16	0	H17	4,530	H19	4,530	平安時代 ・桑原の区画溝と畠跡	
8 柳川市	西蒲池	西蒲池下里		2,800	H16	0	H17	2,800	H19	2,800	平安時代 ・桑原の区画溝	
9 柳川市	東蒲池	東蒲池櫻町		5,700	H14	0	H15	5,700	H16	5,700	弥生時代 古墳時代 平安時代 鎌倉時代	・中世の集落遺跡
10 柳川市	東蒲池	東蒲池大内久		1,200	H16	0	H17	1,200	H18	1,200	古墳時代 平安時代 鎌倉時代	・中世の集落遺跡
11 柳川市	矢加部	矢加部町星敷		4,855	H15-16	0	H16 H17 H18 H19	2,040 430 1,820 565(860)(H22~23)	H17整備	1,500 880 21 1,150 1,325	江戸時代 ・江戸時代の町並み 水田機の転入土器 築造後の轟とるつぼ ・街頭側溝らしい大渠	
12 柳川市	矢加部	矢加部五反田		4,000	H17	0	H18	4,000	H20	4,000	戰国時代	・戰国時代の集落遺跡
13 柳川市	矢加部	矢加部南星敷		10,470	H16	0	H17 H18	6,000 4,470	H20	10,470	戰国時代	・戰国時代の集落遺跡
14 柳川市	三橋町 ・高崎			4,700	H18	0						試掘済み、追跡なし
15 柳川市	三橋町 ・高崎	瀬船津江頭		9,700	H16	0	H17 H18 H19	4,700 3,300 1,700	H20 H21 (H22)	4,800 3,200 (1,600)	弥生～中世の複合集落遺跡 古墳時代 ・弥生時代終末から古墳時代初期の 築堤(遺立柱遺跡の土基)多数	
16 柳川市	三橋町 ・高崎	瀬船津水町		4,500	H17	0	H19	(1,400)	(H22)	4,500	弥生時代 ・弥生～中世の複合集落遺跡	
17 柳川市	三橋町 ・高崎	瀬船津西／内		2,290	H16～18	0	H18	2,280	(H22)	2,280	戰国時代	・戰国時代の集落遺跡
18 柳川市	大和町 ・高崎			4,500	H17-18	0						試掘済み、追跡なし
19 柳川市	大和町 ・高崎			25,000	H17-18	0						試掘済み、追跡なし
20 柳川市	大和町 ・高崎	這樣地底面		22,740	H17～19	0					江戸時代	一部本調査必要(這樣地底面遺跡) 一部試掘済み、追跡なし
21 柳川市	大和町 ・高崎	慶長本土星敷		64,500	H16～18	0			H20		江戸時代	柳川市指定史跡慶長本土星敷 一部試掘済み、追跡なし
22 高田町	高崎町	新開村田堀記碑		—		0	H14 H19		H20 —		江戸時代	福岡県指定史跡田代河千干通跡
23 高田町	高崎町	高崎城防		300		0	H16	移設作業	H20 300		江戸時代	福岡県指定史跡高崎城防

であったが、I 区については直接の施工管理が柳川土木事務所有明海沿岸道路対策室であったため、I 区の現地での直接的な調整等は柳川土木事務所と行うこともあった。

平成17年度の第1次調査は、I a 区、Ⅲa 区、I b 区、Ⅱa 区の順に発掘調査を実施した。年度当初の柳川土木事務所有明海沿岸道路対策室を含め有明海沿岸道路出張所での協議において、調査範囲の最も北側部分で沖端川をまたぐ橋梁の橋脚施工を早急に行いたいとの要望があり、そのわずか220m程度の範囲を I a 区として調査を開始した。

平成17年5月16日にバックホーを搬入し表土の掘削を開始した。17日には発掘機材を搬入し、19日に作業員による人力掘削を開始した。I a 区の次に調査を行うⅢa 区のバックホーによる表土掘削を6月15日に開始し、6月17日には I a 区の調査を終了し、埋め戻しを開始した。

Ⅲa 区の人力による掘削は6月20日より開始した。この頃から梅雨の降雨が本格化し、度々調査区が水没しては水のポンプアップを繰り返すこととなり、作業がなかなか進捗しにくい状況となった。特に7月6日には完全に水没する状態で、7月8日には、北側の既存の溝へ自然排水できるように周囲に側溝を廻らしたため、それ以降は大幅に雨水がたまることは解消された。その後梅雨も明け、7月19日からは作業をまとめて進捗していくことが可能となった。9月2日には台風が接近していたので、現場事務所及びその周辺の暴風雨対策に追われることとなった。9月28日には、次の調査地点となる I b 区の表土掘削のために、バックホーを搬入した。Ⅲb 区は10月4日にラジコンヘリによる空中撮影を行い、10月7日に作業を終了させ、I b 区の調査へと移った。

I b 区においては、11月5日は「ふくおか歴史彩発見事業」の一環で親子体験発掘を実施した。12月9日には次の調査地点となるⅡa 区の表土掘削のためにバックホーを搬入した。12月22日からは I b 区の図面を作成させる一方で、Ⅱa 区の人力による遺構検出も開始した。12月28日に平成17年内の作業を終了した。平成18年1月5日より作業を再開し、1月31日にラジコンヘリにより I b 区の空中撮影を行った。2月2日に調査区西側包含層をバックホーで掘り下げている際に、掘立柱建物跡の礎盤を検出した。掘形がほとんど認識できないものの、多数の礎盤が存在し、ピンボールを下層に差し込んで礎盤の横木の存在を探りながら検出していく作業を22日まで行った。急遽行うこととなった上、想定していなかった礎盤の検出作業であったため、段取りが不十分で取りこぼしも少なからずあるものと思われる。内容的に非常に残念となった点が悔やまれるが、I b 区の調査を終了した。

I b 区の礎盤検出で中断していたⅡa 区の調査を2月23日から再開した。外部から調査区壁を通して滲みだしてくる水に対応するため、調査区の側溝を掘削した。また、遺構検出作業をほぼ終了していたが、検出された遺構はほとんどなかったため、下層を確認するため数箇所にトレチを掘削した。木片がまとまって出土したトレチもあり、特に木質が密集していた部分を、「木質集中部」として3月7日よりその範囲を確認するために掘削範囲を広げていった。木質集中部の範囲確認の掘削を続けたが、年度内に調査の区切りをつけることが困難となったため、15日に遺構の保護のため土壟により埋め戻しを行い、年度内の作業員による掘削作業を終了した。また、Ⅱa 区に隣接する I b 区において用地交渉が解決したため、次年度の調査に向けてバックホーによる表土掘削を一部行い、28日には平成17年度の全ての作業を終了した。

平成18年度は4月17日より作業を開始した。年度当初に作業が中断している間に調査区内にたまつた多量の水をポンプアップし、18日には引き続き I b 区の表土掘削を行うためバックホーを

搬入した。梅雨の時期を迎えるとともに、周辺の水田に水が入るため、IIb区についても外部からの浸水と排水の対策を講じる必要があった。そのため、水溜め用と調査区表面の乾燥も兼ねて側溝およびトレーニングを掘削した。特にIIb区の東側は水田と隣接し、北側は既存の水路があるため、排水路と大型の側溝を二重に巡らせた。24日よりIIa区の木質集中部の掘削を再開し、他に補足するトレーニングも掘削した。6月6日には佐賀大学低平地センターの林 重徳教授に現地指導のため来訪いただき、木質集中部の性格を把握するための助言を頂いた。6月9日からはIIa区の木質集中部の調査と同時にIIb区の遺構掘削も開始した。また、IIa区の南西端や谷底にトレーニングを掘削した際に礎盤が検出されたために、この段階でII区においてもある程度の礎盤の広がりを把握することができた。その後6月後半にかけて木質集中部の下部を掘削してその構造を調査した。また、IIb区では初めて柱穴の掘形の認識が可能な掘立柱建物跡を検出した。7月19日から25日にかけて梅雨の大雨で作業が停滞した。9月15日には台風の接近ため現場事務所及びその周辺の対策を行った。9月29日にはラジコンヘリによるII区の空中撮影を行った。10月3日からは、バックホーによる掘形の不明な柱穴の礎盤検出する作業を開始した。Ib区では突然の礎盤の検出作業で十分な対応ができなかつたが、II区ではバックホーにより少しずつ掘り下げては検出を繰り返していく方法をとることとし、作業は11月15日まで行った。

II区の調査終了後は11月15日よりIIIb区の調査に着手した。なお、IIIb区中央に地元住民が利用している里道が横切っていたが、有明海沿岸道路出張所および地元区長と協議の上、調査開始前に迂回路を設置した。また、当初試掘調査の結果、IIIa区から北側が本調査対象地でIIIb区は未試掘地点、IIIb区より南は調査対象地外としていたため、IIIb区は遺構が希薄であることが想定された。しかし、表土掘削の開始とともに最も遺構の濃密な地点と判明した。大小多数の土坑や調査区を縦断する溝等があり、掘形の確認できる柱穴も多数検出した。12月28日に平成18年内の作業を終了し、年が明けて平成19年には1月9日より作業を再開した。また、IIIb区の遺構の分布状況から本調査対象外としていたさらに南にも遺構が続くことがほぼ確実であるため、有明海沿岸道路出張所と協議の上IIIb区を更に南側に一筆分拡張した。2月26日にはラジコンヘリによる空中撮影を実施した。その後バックホーにより下層の礎盤の検出を行い、調査区南側では遺構面で確認できていたものが多く、新たな検出数は少なかったが、北のIIIa区の近くではまとまって検出された。なお、さらに南側に遺構の広がりが続くと予想され、その状況を把握するためにバックホーによるトレーニングを掘削したが、遺構面より上層に盛土されたバラス状の堆積土に含まれた多量の水がトレーニング内に流入した。そのため、礎盤の存在は確認したが、詳細な状況の確認を断念せざるを得なかった。3月30日に、バックホーによるIIIb区の埋め戻しも含め平成18年度の作業を終了した。

平成19年度は、納骨堂が所在していたが、その移転が終了したIc区の調査から開始した。事前の柳川土木事務所有明海沿岸道路対策室との協議で東半部の調査を早急に終了して欲しいとの要望があるので、Ic区を東西に分けて東半部より調査を行うこととした。平成19年4月23日よりバックホーを搬入して表土の掘削を開始し、4月25日から作業員による人力掘削を開始した。土坑や一部で掘形の認識できる柱穴・礎盤も検出した。しかし、全体的に元々遺構の識別しにくい土壤である上に、Ic区では生い茂っていた草が遺構面以下にも残存し、また納骨堂の下部の盛土の影響で遺構面がグライ化で変色している上、地盤強化のために大きな木杭が複数打ち

込まれていたため、遺構検出が非常に困難な部分があった。5月28日にローリングタワーよりⅠc区東半の全景撮影を行った。その後5月30日までバックホーで掘り下げながら下部の礎盤の検出を行った。6月4日よりⅠc区西半の表土の掘削を開始し、7日より作業員の人力による掘削を開始した。検出可能な遺構がほとんどなかったため、検出面で土器の集中する部分等にトレーナーを掘削し、下部の遺構の有無や礎盤の広がりを確認した。12日にローリングタワーより全景撮影を行った。その後21日までバックホーで掘り下げながら下部の礎盤の検出を行い、Ⅰc区の調査を終了した。

Ⅲb区より南側は当初本調査対象外であったが、改めて遺構の広がりが認められたため、有明海沿岸道路出張所と協議の上、Ⅳ区として調査を実施することとした。昨年度末でトレーナーを掘削した際のように大量の水が流入する上、遺構面が上層堆積土の影響でグライ化し、宅地として地盤強化のための木杭も複数打ち込まれており、悪条件が重なっていた。そのため、通常の遺構面での検出作業を諦め、当初から水をポンプアップしながらバックホーで掘り下げていき遺構・礎盤を確認していくこととした。6月26日からⅣ区の掘削作業を開始し、また併せてⅢa区調査時には礎盤の存在を把握していなかったため、Ⅲa区内の礎盤の確認作業も行った。Ⅳ区は礎盤の検出される範囲を追いかけていく形で徐々に調査範囲を広げていき、9月13日まで調査区内での掘削作業を行った。14日には機材を搬出し、18日には調査区埋め戻し等を含めバックホーによる作業を終了、搬出を行った。19日にハウス等の建機の搬出を行い、蒲船津江頭遺跡における全ての発掘調査の工程を終了した。

なお、各調査地点の調査期間をまとめると以下のようになる。

I a区	：第1次調査 平成17年5月16日～平成17年6月17日
I b区	：第1次調査 平成17年10月7日～平成18年2月22日
I c区	：第3次調査 平成19年4月23日～平成19年6月21日
II区	：第1次調査 平成17年12月22日～平成18年3月28日 第2次調査 平成18年4月17日～平成18年11月15日
III a区	：第1次調査 平成17年6月20日～平成17年10月7日
III b区	：第2次調査 平成18年11月15日～平成19年3月30日
IV区	：第3次調査 平成19年6月26日～平成19年9月19日

### 3 調査・整理の関係者

平成17（2005）年度から21（2009）年度の調査・報告に関わる関係者は次のとおりである。

#### 国土交通省九州地方整備局福岡国道事務所

	平成17年度	平成18年度	平成19年度	平成20年度	平成21年度
所長	増田 博行（～H17&1）	小口 浩	小口 浩	小口 浩（H20.7.10～）	森山 誠二
	小口 浩（H17&2～）			森山 誠二（H20.7.10～）	
副所長	後田 徹	後田 徹	春田 義信	白川 逸喜	白川 逸喜
	佐々木 秀明	春田 義信	佐々木 秀明（～H19.6）	栗原 正	柳田 誠二
			栗原 正		

建設監督官	松尾 淳一郎	今村 隆浩	今村 隆浩	山北 賢二	山北 賢二
	今村 隆浩	鶴林 保彦	鶴林 保彦	鶴林 保彦	鶴林 保彦
調査第二課長	鈴木 昭人				
調査課長		鈴木 昭人	鈴木 昭人	今里 英美	今里 英美
調査係長	松木 厚廣	松木 厚廣 (~H18.9)	川原 一哲	矢野 幸樹	矢野 幸樹
		川原 一哲 (H18.10~)			
専門員	相島 伸行	伊藤 良二	伊藤 良二	伊藤 良二	田中 博明
国土交通技官	柳瀬 純矢	谷川 勝	谷川 勝	猿澤 宗一郎	猿澤 宗一郎
工務課長	堀 泰雄	堀 泰雄	堀 泰雄 (~H19.6)	清時 義雄	今田 一典
			清時 義雄 (H19.7~)		

福岡県教育委員会（教育庁総務部文化財保護課）

	平成 17 年度	平成 18 年度	平成 19 年度	平成 20 年度	平成 21 年度
総括					
教育長	森山 良一				
教育次長	清水 圭輔	清水 圭輔	植崎 洋二郎	植崎 洋二郎	亀岡 靖
総務部長	中原 一憲	中原 一憲	大島 和寛	荒巻 俊彦	荒巻 俊彦
文化財保護課長	久芳 昭文	磯村 幸男	磯村 幸男	磯村 幸男	平川 昌弘
同副課長	川述 昭人	佐々木 隆彦	佐々木 隆彦	池邊 元明	池邊 元明
同参事兼課長技術補佐	木下 修	小池 史哲	小池 史哲	小池 史哲	小池 史哲
同課長補佐	安川 正郷	安川 正郷	中薗 宏	前原 俊史	前原 俊史
同参事補佐（調査二係長）飛野 博文	飛野 博文	飛野 博文	飛野 博文	飛野 博文	飛野 博文
庶務					
文化財保護係長	稲尾 茂	井出 優二	井出 優二	富永 育夫	富永 育夫
同事務主査	石橋 信二	野中 顯			藤木 豊
同主任主事	末竹 元	潤上 大輔	潤上 大輔	藤木 豊	近藤 一崇
	潤上 大輔	柏村 正央	柏村 正央	近藤 一崇	野田 雅
		小宮辰之	小宮辰之	小宮辰之	
同主事			野田 雅	野田 雅	仲野 洋輔
調査・報告書作成					
主任技師	坂元 雄紀				
整理担当					(アジア文化交流 センター研究員)
参考補佐			濱田 信也	濱田 信也	新原 正典
主任技師	大庭 孝夫	大庭 孝夫			
	岡寺 未幾				

なお、発掘調査・報告書作成にあたっては、地元の方々、発掘調査に参加された方々、福岡国道事務所、有明海沿岸道路出張所、柳川市教育委員会の関係者の皆様よりご協力を賜った。記して感謝いたします。

## II 位置と環境



柳川市内を流れるクリーク

本遺跡の所在する柳川市は福岡県南西部の有明海沿岸部に位置しており、平成17年2月5日付けで旧柳川市・三橋町・大和町で合併し、現柳川市となった。北は矢部川水系花宗川、太田川およびクリーク等を境に大川市・三瀬郡大木町・筑後市に接する。東は矢部川を境にみやま市、西は筑後川を境として佐賀県と接し、南は有明海に面する。

筑紫平野は筑後川・矢部川その他の諸河川が運搬してきた土砂で埋められ、一部人工の干拓も加わってできた福岡・佐賀両県にまた

がる九州最大の平野であり、福岡県側を一般に筑後平野と称し、また矢部川流域の南部平野部分を南筑平野とも呼称する。有明海沿岸部については、大小の干拓地が鱗状に展開していて、日本の代表的海面干拓地帯である。また、それぞれの河口部には干潟が発達する。

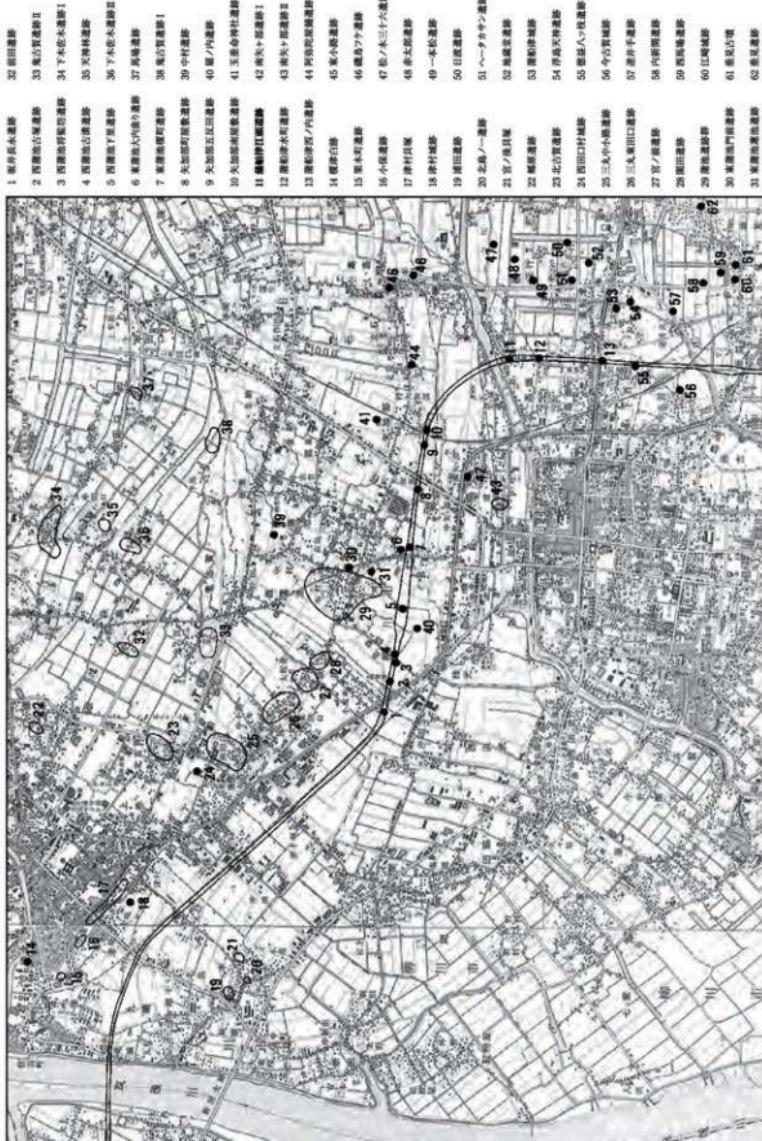
矢部川は大分県・熊本県との県境山地である奥耳納山地・筑肥山地の水を集めて西流する全長61kmに及ぶ、筑後川に次ぐ一級河川であり、八女市・筑後市・柳川市との境をなし、海岸近くで飯江川と合流し有明海に注ぐ。その水源地は狭小にもかかわらず、5市をはじめ複数の地域にまたがり、流域面積は620km<sup>2</sup>、灌漑面積は11,000haにもわたる農地を潤す。本遺跡の北側を流れる沖端川は、矢部川より分岐する一級河川であり、みやま市瀬高町船小屋付近より柳川市を西流して有明海に注いでいる。また、調査地点のすぐ西側に隣接するニッ川は、本遺跡より4.5km程度東方で沖端川よりニッ川堰とニッ川水門により水が引き込まれており、城堀水門を経て柳川城内の掘割に繋がっている。

柳川市域についても、矢部川およびその支流である沖端川・塩塚川による大量の土砂の堆積に有明海の潮汐による大きな干満差が加わって形成された冲積地と、非常に広大な範囲が近世初頭以降干拓によって造成された土地からなる。完新統の沖積低地を構成するのは、非海成層の蓮池層と海成層の有明粘土層である。有明粘土層は極めて軟弱な地層で、海棲貝類の貝殻片を混入するのが特徴である。その形成時期は完新世、高海面期である繩文海進のピーク時期の前後と考えられ、有明海干潟や海底部分では現在もその形成が続いている。蓮池層は、筑紫平野の汽水域から淡水域で形成された非海成の沖積層の総称で、低地の表層に広く分布し、層序関係は有明粘土層と同時異相関係にある。市域の標高は1~6m程度と低平な平地で、水田地帯が広がっており、水田の用排水路の機能を果たすクリークが網の目のようにはじめぐらされる部分もあり、当地方の景観を特徴づけている。

本遺跡の所在する柳川市三橋町蒲船津は、旧三橋町域の西側で旧柳川市域との境に近くの標高4m前後の低平な水田地帯に位置している。

本調査地点の所在する有明海沿岸周辺地域において集落が進出するのは弥生時代からで、筑後川左岸に形成された自然堤防上に立地する大川市下林西田遺跡で、前期の遺構と遺物が確認され

第3図 周辺遺跡分布図 (1/40,000)





干満の差が激しい沖端川河口付近

ており、同市酒見貝塚でも前期の土器片が採集されている。しかし、前期の痕跡を窺わせる遺跡は非常に限られており、低地の微高地上の集落の展開はこの段階では限定的なものかもしれない。その中で、旧大和町域の徳益八枝遺跡は、弥生時代前期から中期初頭にかけての集落の貴重な調査例である。柱が軟弱な地盤に沈み込まないように工夫された掘立柱建物や井戸が検出された。弥生時代中期に

は、柳川市域でより遺跡が確認されるよう

なり、遺跡の分布が拡大する。特に柳川北部に位置する蒲池地区の三島神社貝塚を含む蒲池遺跡群は市北部の拠点的な集落と見られ、広域に散布地や貝塚が確認されている。近接する西門前遺跡の調査で、現地表より2.5m程度下位で、中期中頃から終末期にかけての貝層が確認された。西蒲池地区の扇ノ内遺跡では支石墓の上石と見られる巨石と甕棺墓群の存在が確認されている。また三島神社門前の石橋に使用されている一枚岩もこの巨石の一つと言われている。西蒲池地区のクリークにかかる橋のたもともに巨石を見るができるものの、有明海沿岸道路の路線内に入る範囲では遺構を確認できなかった。また、市西部では磯鳥フケ遺跡、江鶴遺跡が挙げられる。市域で散布地等が多く詳細な実態不明な弥生遺跡が多い中で、磯鳥フケ遺跡では本格的な調査によって弥生中期後半段階での掘立柱建物跡を伴う低地の集落の様相が明らかとなり、徳益八枝遺跡と同様に掘立柱建物や井戸が検出された。先述の大川市下林西田遺跡でも中期初頭～前半を最盛期としている。後期になると一本松遺跡、礎盤の出土した正行西の頭遺跡、松の木塚遺跡、日渡遺跡など遺跡が増加する。なお、本調査地点の所在する蒲船津の二ッ川左岸では弥生後期から古墳時代の土器が出土することで知られていた。

古墳時代では、後期に西蒲池古塚遺跡、西蒲池下里遺跡で遺物が出土しており、ヘータカサン遺跡や地蔵堂遺跡などの集落遺跡がさらに増加する。海岸線の後退に伴う微高地・可耕地の増加が原因であろう。

律令制下では北部が三瀬郡、南・東部が山門郡に属していたと思われるが、郡界は不詳である。条里が敷かれ、土地改良事業が行われる以前はその跡をうかがわせるクリークも見られた。平安時代末期には三瀬郡域を中心に三瀬庄、山門郡域を中心に瀬高庄が成立する。旧三橋町域は瀬高下庄に属したが、一部は瀬高横手庄であった可能性もある。奈良時代では西蒲池将監坊遺跡、西蒲池下里遺跡で遺物が認められる。平安時代では東蒲池樫町遺跡で10世紀の遺構が多く見られ、西蒲池下里遺跡でも溝が検出された。中世初頭では西蒲池古塚遺跡、東蒲池大内曲り遺跡、坂井長水遺跡、西蒲池下里遺跡で遺物が出土している。中世後期には矢加部南屋敷遺跡で中国製陶磁器が多く見られ、有力豪族の蒲池氏との関連も想起させるものである。蒲池氏は柳川市西蒲池付近の蒲池城を本拠地とし、戦国時代の柳川市周辺は大和町鷹ノ尾付近の鷹尾城を本拠地とする田尻氏とともに、戦国時代の柳川市周辺を統治した。蒲池氏は戦国時代の半ば頃に二家に分かれ、下蒲池の系統となった鑑盛は柳川城を居城とし、先述の城下町を開拓した。その際に柳川城の水の防壁として開拓されたものである。

戦国時代末期に蒲池氏は滅亡し、天正15（1587）年立花宗茂が立花城から柳川城に移り、三瀧・下妻・山門の三郡を支配した。なお、蒲船津地内の南部に所在した蒲船津城は蒲池氏の支城の一つで、鍋島勢の攻撃の前に落城するが、その後も鍋島輩下の城として大友勢の柳川侵攻の際にも歴史上に登場する。関ヶ原の戦いで西軍に与した立花氏は改易され、田中吉政が筑後国主となり、慶長6（1601）年に入国した。



柳川城水門

田中吉政は慶長本土居の建設、掘削の掘削や街道整備など多くの土木事業を行った。柳川城と久留米城を結ぶ幹線道路としての久留米柳川往還の整備もその一つである。また、慶長本土居は現在道路として使用されており、掘削は「水郷柳川」の景観を形成し、観光資源となっている。田中氏改易後、筑後国は柳川藩と久留米藩に分断され、柳川藩は立花氏が再び領有し、久留米藩は有馬氏が領有するに至った。

### 参考文献

- 鏡山 猛1956『九州考古学論叢』吉川弘文館  
筑後考古学研究会1997『筑後考古』第9巻  
福岡県教育委員会1998『下林西田遺跡』福岡県文化財調査報告書第132集  
大和町史編纂実務委員会編2001『大和町史 通史編 上巻』大和町  
柳川市2002『新柳川明証団会』柳川市史特別編  
平凡社2004『福岡県の地名』日本歴史地名大系第41巻  
福岡県教育委員会2005『東蒲池櫻町遺跡』有明海沿岸道路大川バイパス関係埋蔵文化財調査報告第1集  
福岡県教育委員会2006『山門前田遺跡』九州新幹線関係埋蔵文化財調査報告第3集  
柳川市教育委員会2006『磯鳥フケ遺跡』柳川市文化財調査報告書第1集  
福岡県教育委員会2007『東蒲池大内曲り遺跡』有明海沿岸道路大川バイパス関係埋蔵文化財調査報告第2集  
福岡県教育委員会2008『坂井長永遺跡（1・2次） 西蒲池古塚遺跡（1~4次） 西蒲池将監坊遺跡（1・2次） 西蒲池古溝遺跡 西蒲池下里遺跡』有明海沿岸道路大川バイパス関係埋蔵文化財調査報告第4集

### III 調査の内容

#### 1 遺跡の概要

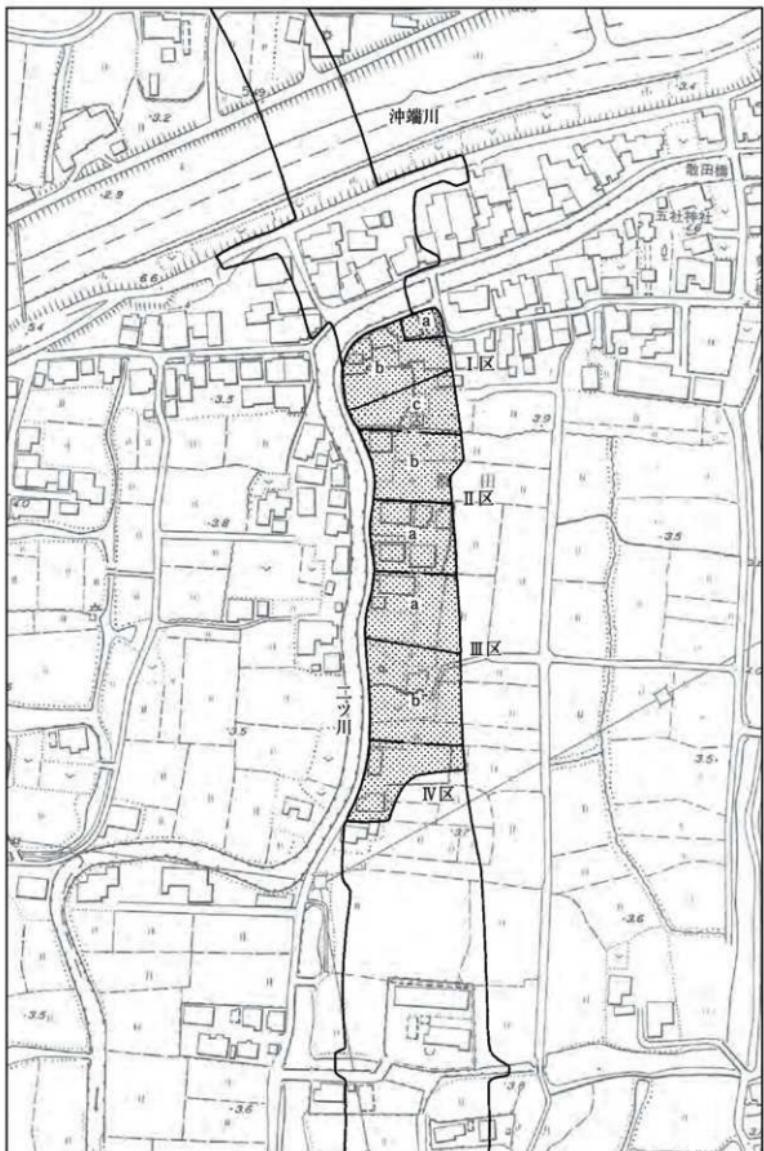
##### (1) 遺跡の概要

本調査地点は柳川市内の旧三橋町域の西端に所在し、西鉄柳川駅の約800m北東に所在する。沖縄川南岸の標高4m前後の低平な水田地帯の中に位置する調査区周辺の旧地形は把握し難く、低地内に微高地が散在する様相を呈していたと想定される。遺跡は、そのような限られた微高地上の立地と考えられる。この調査区内の堆積土は、地山となる基盤層、包含層ともに低湿地特有の粘質土で、遺構の埋土もほぼ同様である。この土質は、調査の円滑な進行の妨げとなる。水捌けが著しく不良で、降雨等で調査区内に溜まった水は全てポンプアップしなければならない。何よりも、遺構検出をはじめとして土質の相違の判別が非常に困難を伴う。また、一度表土を除去した後の遺構面は、滯水もしくは乾燥すると再度同一面での遺構検出はほぼ不可能な状態となる。

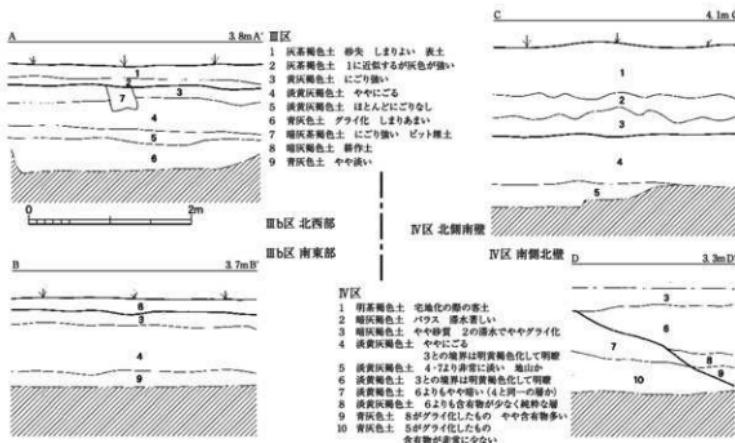
ほとんどの遺構と遺物が弥生時代終末から古墳時代前期にあたるもので、一部古代・中世のものも見られる。主な遺構に井戸を含む土坑、溝、落ち込み等があり、特筆すべきは掘立柱建物跡の柱穴の基底部にあたる礎盤を多数検出したことである。この礎盤は、柱穴の底に沈み込み防止用と思われる樹皮を敷いて、その上に乗せた横木と組み合わせることにより柱を固定したものである。柱の下端と横木中央の連結部には欠き込みを施して、連結を強固にしている。柱穴の埋土の認識・掘形の検出は困難な場合が多い。これは、特に礎盤自体が複雑に切り合う場合、柱穴自体の掘形と柱を抜く際に掘削した痕跡が錯綜してより複雑な切り合いとなっていることや低湿地の堆積土の特性が影響していると想定される。また、掘削したトレンチ下部から検出された礎盤に伴う柱穴の掘形について、トレンチ壁面での確認を試みたが、ほとんどが認識できる状況ではなかった。そのため、柱穴を十分な形で記録することを断念し、同一建物の礎盤の組み合わせや全体的な建物の配置等の情報を優先して抽出するため、各礎盤の位置を把握することとした。そのため、検出面で確認できた遺構の調査後に、礎盤が確認できるところまで上部の土をバックホーで掘削しながら、最後は人力で掘削した。また更にその下部の礎盤を探し、出土しなければバックホーでの掘削地点を横に移して作業を繰り返していく。そのため、ほとんどの建物の礎盤の組み合わせは、図面整理の段階において相対的な位置関係を中心に判断した。出土遺物は、弥生土器・土師器を中心とした土器がパンケース600箱以上に及び、低湿地内の立地ということもあり木器も多数出土した。

また、基本土層等でも分層の困難な場合が多く、好条件が伴わないと地山と包含層の境界も厳密には判別し難い。そのため、遺構面の認識が困難な点とも併せて、調査区内の地形の変化を把握し、旧地形を判断するのは難しい。この地形の把握については、特徴の表れたトレンチの土層とトレンチ下部の遺物や木質の出土状況や各礎盤間の高低差等の複数の要素をもとに判断した。本書では、III・IV区の状況を「IVまとめ」(169頁)で整理した。

調査区はI～IV区に区分され、既存の排水溝で調査中も使用するため掘削できないものを境としている。また、道路建設の施工工程や用地の解決状況の都合から、各区でまとめて調査できなかつたために、各区内を必要に応じて調査の着手順に細分した。本報告では主にIII・IV区を対象とする。



第4図 周辺地形および各調査区位置図 (1/2,500)



第5図 III・IV区基本土層実測図(1/60)

## (2) 基本層序(図版3・62 第5図)

当遺跡は基本的に水田地帯の中に位置するが、調査区内では広い範囲が宅地として利用されていた他、納骨堂が立地していた。周辺の田面標高3.3~3.5mで、宅地等で利用されていた部分は標高4.0m前後である。

III・IV区の基本層序を第5図で示している。III区では、IIIb区の北西部および南東部で層序を記録した。IV区では電柱とその固定用ワイヤーのアンカーが所在するため、一部掘削できずに調査区が南北に分かれ、その掘り残された部分の南北両側の壁面で層序を記録した。上層の盛土、客土や耕作土以外の堆積土はいずれも低湿地に特徴的な非常に粘性の強い土質である。

IIIb区では、畠地として利用されていた部分が多く、上層に耕作土(1・2層)が堆積する。その直下で造構面となり、標高は3.2m前後である。以下は基盤層と見られ、上位から黄灰褐色土(3層)、淡黄灰褐色土(4・5層)と堆積し、更に下位ではグライ化した青灰色土(6・9層)となる。なお、北側のIIIa区では色調・土質では基盤層とほとんど差がないが多量の土器が出土する包含層が厚く堆積する。ただ、周辺調査区中で最も先行したIIIa区自体の調査段階では、その包含層の堆積状況を把握できず、隣接するII区やIIIb区の調査を経て、地形が北側へ徐々に低くなる中で堆積したものと判断することができた。そのため、土層を記録した部分があるものの、包含層と基盤層との関係性を有意に示せるものがないため、図示していない。

IV区は宅地化された部分が多く、最上層にはその際の客土(1層)が最上層に分厚く堆積する。その次に、暗灰褐色のバラス状の客土(2層)が堆積し、この層には多量の滲水があり、調査時の大きな妨げとなった。また、その直下の層(3層)では上層の滲水の影響でややグライ化する。その更に下位層との境界が造構面であり、標高2.7m前後とIIIb区より低いことが確認できる。造構面より下位は、淡黄褐色や淡黄灰褐色の粘質土層(4~8層)からなり、下層ではグライ化して



第6図 III区遺構配置図 (1/200)

青灰色となる。また、南側の土層からは、極めて類似したものながら、基盤層と包含層との境界が確認でき、地形が東側へ落ち込んでいく様相が見られた。

なお、土層を表示するにあたり、グライ化は土壤の堆積後に地下水位の影響により変色したもので、堆積土の有意な単位を反映するものではないと判断された。

## 2 III区の検出遺構と遺物

### (1) III区の概要（第6図）

III区はa・bに細分され、II区の南側かつIV区の北側に位置し、3300m<sup>2</sup>と最大の調査区である。IIIa区は第1次調査で平成17年度の、IIIb区は第2次調査で平成18年度の調査実施地点であり、用地の解決状況から調査期間は連続していない。なお、外部からの浸水と排水の対策のために水溜めと調査区表面の乾燥を兼ねて、a・b各区内で側溝およびトレーンチを掘削している。

北側のIIIa区では当初検出された遺構は非常に少ない上に東側に偏っており、土坑のうち時期の明瞭な遺物の出土状況の伴うものは4基のみで北東部隅に集中している。トレーンチから大量の土器が出土したが、その後の北側のIIa区と南側のIIIb区の調査結果の状況より、相対的に高位のIIIb区側から低位のIIa区側へ地形の落ちていく途上の位置に当たるため土坑等が希薄であり、包含層が広く堆積していることが把握できた。なお、調査時点にこの範囲で2条の溝として検出したものは、幅広で壁が緩やかに傾斜して浅い底面に至る点等もあり、本報告では落ち込み（2・3号落ち込み）として取り扱うが、包含層の一部である可能性もある。しかし、そのような遺構の空閑地にも、当初の検出段階で柱穴が認められず存在に気付かなかった掘立柱建物跡の礎盤が広がることが判明したため、バックホーによる礎盤の検出作業を行った。その過程でも柱穴の掘形はほとんど認識することができなかつたが、中央部から西側にかけて多数の礎盤が激しく切り合って分布し、東側では希薄であることが認められた。この掘り下げの過程で新たな土坑が検出されることはなかつたが、南西端付近でIIIb区から連続すると見られる溝が検出され、北西端付近では別の溝が検出された。

南側のIIIb区は主に標高3.3m前後であり、最も高位の調査区で遺構の密度も最も高い。また、包含層の堆積範囲が限られるためか、非常に多くの掘立柱建物跡の柱穴の掘形を検出することができた。土坑は大小多様なものがあり、2条検出された溝の内の1条は調査区を南北に縦断している。落ち込んで低くなるIIIa区側へ広域に堆積する包含層について、その南側境界が北端部で認められる。南東端付近では谷状に落ち込む地形となっており、最深部で標高2.4m程度となる。北西部ではクリーク跡により大きく擾乱を受けており、細長く東側に延びる部分もある。検出面より下部の状況の確認や排水等のために、複数の側溝やトレーンチを掘削した。なお、調査段階で撤去できなかつた電柱とそれを支えるアンカーの周辺は掘削できなかつたため、部分的に調査区外とせざるを得なかつた範囲もある。

検出した遺構はIII区全体で、約350基程度の礎盤から57棟の掘立柱建物跡の組み合わせを抽出し、土坑は86基であるが、内3基は後に掘立柱建物跡の柱穴と判明したため欠番とした。また、3条の溝や落ち込みからなる。出土遺物については、土器がパンケース250箱分にも及び、土坑出土資料には多数の完形に近いものが含まれる。その他にも木器や、IIIa区の包含層からは本遺跡出土の唯一の金属製品である耳環が1点出土した。

## (2) 挖立柱建物跡

Ⅲ区の掘立柱建物跡は、検出した約350基程度という多数の礎盤の中から相対的な位置関係で57棟分の組み合わせを把握した。Ⅲa区では包含層が広く堆積しているためか柱穴の検出は困難で、ほとんどの礎盤をバックホーでの下部確認の際に検出しておらず、徐々に下層へ掘り下げる中でも遺構面の把握は困難であった。Ⅲb区では包含層の堆積範囲が限られており、最も柱穴の掘形を調査面で検出できたものが多く、バックホーでの下層確認の段階で検出した礎盤は少ない。建物の規模は1×1間もしくは2×1間である。

北側のⅢa区では、西半で著しく礎盤が密集する範囲があり、建物跡の複雑に切り合う様相である。その東側の隣接範囲は礎盤の検出されなかった空閑地で、東端部付近では希薄ながら分布が見られる。そのⅢa区内のような密集範囲はないが、南側のⅢb区でも全般的には西半部より東半部で礎盤の分布が希薄で、建物跡自体の切り合いも少ない様相であるが、南東端の地形の落ち込む周辺では礎盤の分布がやや多くなる。また、2箇所で特に小型の柱穴・礎盤の集中する部分があり、中央礎盤集中部と東側礎盤集中部と呼称する。そこで建物跡には、桁・梁間の長さの差が大きい特異なものが目立つ。

なお、以下で表示する梁行・桁行の数値は、それぞれの建物ごとの確認可能な柱間の平均値とする。

### 1号掘立柱建物跡（第7図）

Ⅲ区中央部付近の西端に位置し、1×1間の建物である。ピット119・129他からなり、礎盤の横木の大きさ・形状等の類似性や埋置軸の共通性からこれら柱穴の組み合わせによるこの建物の確実性は非常に高いと考えられる。梁行3.2m、桁行4.0mを測り、床面積は12.8m<sup>2</sup>程度となる。4基の柱穴は、全て平面形を検出したものの、必ずしも明瞭に把握できたわけではない。その形状はやや不整形なものが主体だが、隅丸方形に近いものも含まれる。礎盤間で一定の方向性のある高低差は認められない。

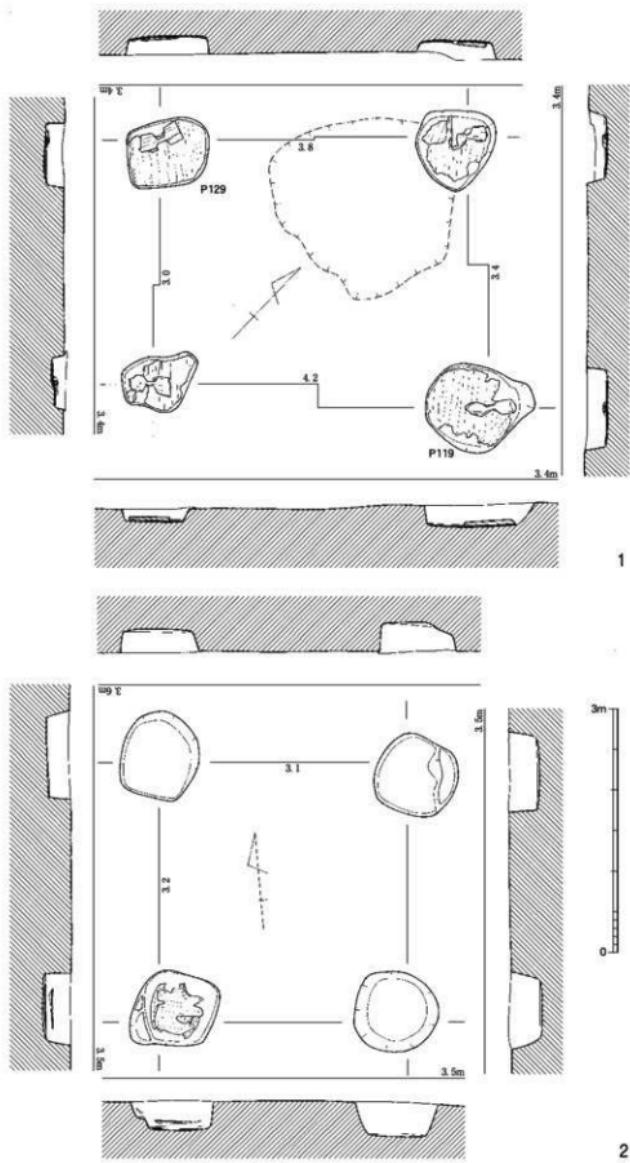
### 出土土器（図版4、第20図1・2）

1は甕の口頸部で、口縁部はやや外反気味に開く。わずかに残存する頸部下位の内面にはケズリが見られる。2は畿内系と見られる高杯の杯上半部である。口縁部はわずかに外反気味で、下端部には屈曲部が残存する。

### 2号掘立柱建物跡（図版4、第7図）

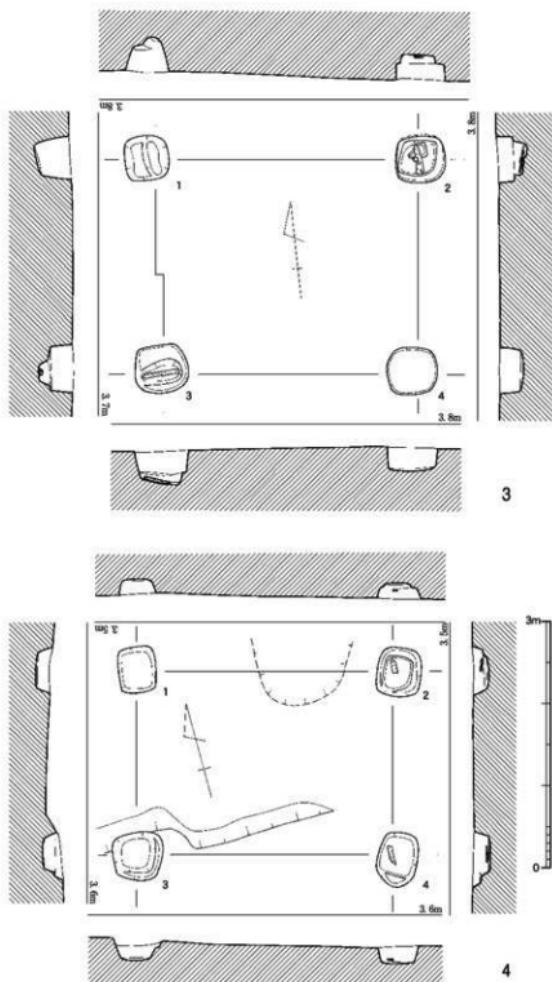
Ⅲ区南東部付近の東端に位置し、1×1間の建物である。建物2-1~4からなり、これら4基の検出された柱穴からは横木は出土しておらず、礎盤として樹皮が敷設されるのは1基のみである。しかし、全体的に遺構の希薄な範囲に所在し、他の関連する可能性のある礎盤等も存在しないため、柱穴の相対的な位置関係からこの建物の確実性は非常に高いと考えられる。横木が検出されていないため概算であるが、梁行約3.1m、桁行約3.2mを測り、床面積は約9.9m<sup>2</sup>程度と想定される。検出した柱穴の平面は、ほぼ隅丸方形に近いものである。底面で一定の方向性のある高低差は認められない。

### 出土土器（第20図3~5）



第7図 III区1・2号据立柱建物跡実測図(1/60)

3は、口縁部が外反しながら開く広口壺の口頭部で、口唇部にはキザミを施す。4は、非常に短い口縁部が屈曲して外側へ延びる短頸壺である。外面には、一部ケズリの痕跡が見られる。5は、頸部が直立気味で、短い口縁部が屈曲して外側へ延びる短頸壺である。



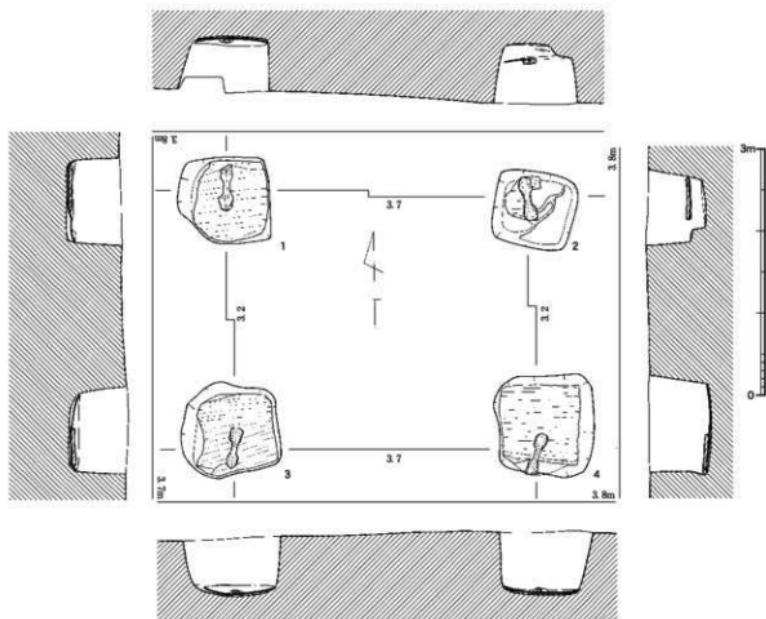
第8図 III区 3・4号掘立柱建物跡実測図(1/60)

### 3号掘立柱建物跡 (図版4、第8図)

III区中央部のやや南側に位置し、1×1間の建物である。建物3-1~4の柱穴から構成され、これら4基の検出された柱穴には樹皮等は敷設されておらず、そのうち2基から小型の横木が検出された。他の関連する可能性のある礎盤等も存在しないため、柱穴の相対的な位置関係からこの建物の確実性は非常に高いと考えられる。5号建物の柱穴と非常に近接しており、建物自体は重複しているが先後関係は不明である。横木の検出が限られているため概算であるが、梁行約2.6m、桁行約3.1mを測り、床面積は約8.1m<sup>2</sup>程度と想定される。柱穴は平面隅丸方形に近く、底面に至るまでテラス部を伴うものが多い。底面で一定の方向性のある高低差は認められない。

### 出土土器 (第20図6)

6は在地系壺の口頭部で、口唇部にはキザミを施す。



第9図 III区5号掘立柱建物跡実測図(1/60)

#### 4号掘立柱建物跡（図版4、第8図）

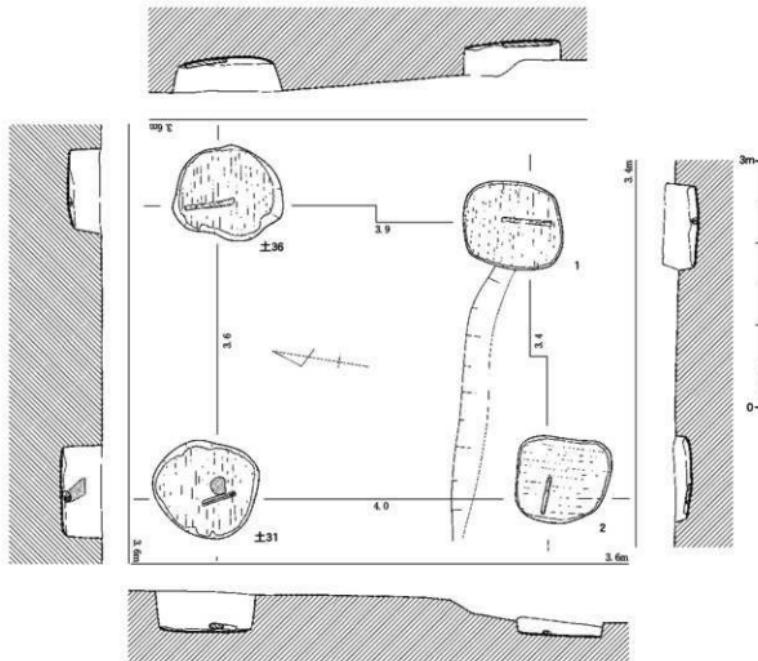
III区南側の中央部付近に位置し、 $1 \times 1$ 間の建物である。建物 3-1~4 からなり、これら4基の検出された柱穴には樹皮等は敷設されておらず、そのうち2基から小型の横木が検出された。他の関連する可能性のある礎盤等も存在しないため、柱穴の相対的な位置関係からこの建物の確実性は非常に高い。梁行 2.3 mを測り、横木の欠失より概算で桁行約 3.2 m、床面積は約 7.4 m<sup>2</sup>程度と想定される。柱穴は平面隅丸方形に近く、底面に至るまでにテラス部を伴うものもある。底面で一定の方向性のある高低差はない。

#### 出土土器（第20図7）

7は、口縁部がやや外側の上方へ直線的に延びる壺である。

#### 5号掘立柱建物跡（図版4、第9図）

III区中央部のやや南側に位置し、 $1 \times 1$ 間の建物である。建物 5-1~4 からなり、礎盤の横木の大きさ・形状等の類似性や埋置軸の共通性からこれら柱穴の組み合わせによるこの建物の確実性は非常に高い。また、周辺で他に組み合う可能性のある礎盤等は検出されていない。梁行 3.2 m、桁行 3.7 mを測り、床面積は 11.8 m<sup>2</sup>程度となる。3号建物の柱穴と非常に近接しており、建物自体は重複しているが先後関係は不明である。柱穴は全て調査面で検出され、平面隅丸方形に



第10図 III区 6号掘立柱建物跡実測図 (1/60)

近く樹皮が敷設される。その内の1基の掘形は底面に至るまでテラス部がり、樹皮の敷設範囲はわずかで横木とともに底面よりある程度上位で検出された。底面で一定の方向性のある高低差は認められない。

#### 出土土器 (図版40、第20図8・9)

8は高杯の脚部で、外面にはミガキを施し、下端部に孔の一部が残存する。9は長胴で尖底の器形である鉢で、素口縁である。

#### 6号掘立柱建物跡 (図版5、第10図)

III区南端近くの中央部付近に位置し、1×1間の建物である。当初のIIIb区の調査区南端が南北の柱穴の間にあり、北側の柱穴のみを個別の31・36号土坑として検出していた。これらを掘削した段階で礎盤を検出したため、建物跡の一部であり南側へ連続することが想定され、調査区拡張とともに南側の柱穴を検出した。周辺で他に組み合う可能性のある礎盤等は検出されず、横木の細長い形状の共通性や埋置軸が桁・梁方向と概ね共通するため、これらの組み合わせによるこの建物の確実性は非常に高い。梁行3.5m、桁行3.95mを測り、床面積は13.8m<sup>2</sup>程度となる。

31号土坑では、柱の抜き痕が検出された。柱穴の平面形は、やや不整な部分もあるが隅丸方形に近い。礎盤間でわずかに南方向へ低くなる傾向が見られる。

#### 出土土器（第20図10～19）

10は広口壺の口縁部で、口唇部にはキザミを施す。11は小型の壺の胴部で、外面に櫛描状の円弧文および平行文が施る。12は、頸基部があまり締まらず、短い口縁部が外反する短頸壺である。13は、短い口縁部がやや強く屈曲して外側へ延びる短頸壺である。14は壺の口縁部と考えたが、高杯や器台等の可能性もある。口唇部には波状文が見られる。15は、短い口縁部が外側へのびる在地系の壺の口縁部から胴部にかけてである。16・17是在地系の壺の口頸部で、ともに口唇部にキザミを施す。17は胴部外面にタタキが残存する。18は素口縁の鉢の口縁部である。19は、短い口縁部がわずかに屈曲し、やや外側の上方へ延びる鉢である。

#### 7号掘立柱建物跡（図版5、第11図）

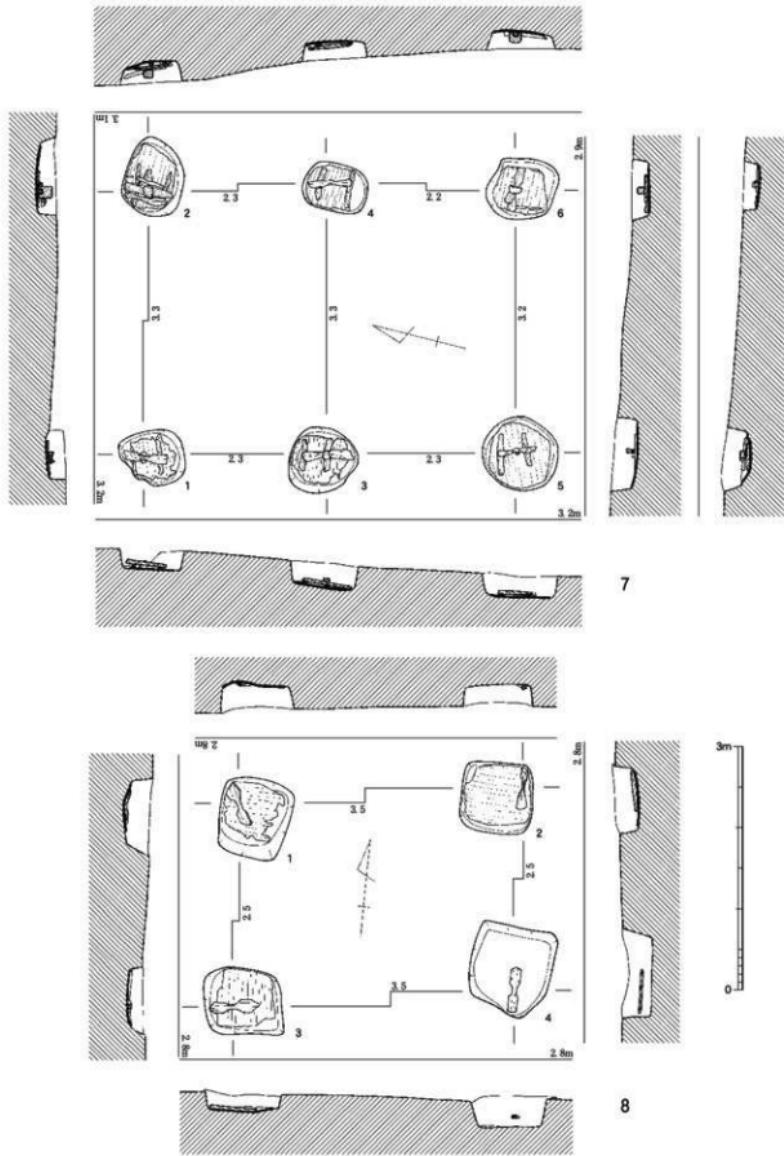
Ⅲ区南東隅付近に位置し、 $2 \times 1$ 間の建物である。建物7-1～6からなり、礎盤の横木の大きさ・形状等の類似性や埋置軸が桁・梁方向と概ね共通するため、これらの組み合わせによるこの建物の確実性は非常に高い。また、いずれの礎盤にも枕木が伴う点が特徴的である。8号建物跡と重複する位置関係にあるが先後関係は不明である。梁行3.3m、桁行4.55mを測り、床面積は15.0 m<sup>2</sup>程度となる。柱穴の平面形はやや不整形や円形に近い部分もあるが、主に隅丸方形である。礎盤間で南東方向へ低くなる傾向が見られる。図示できる土器は、出土していない。

#### 8号掘立柱建物跡（図版5、第11図）

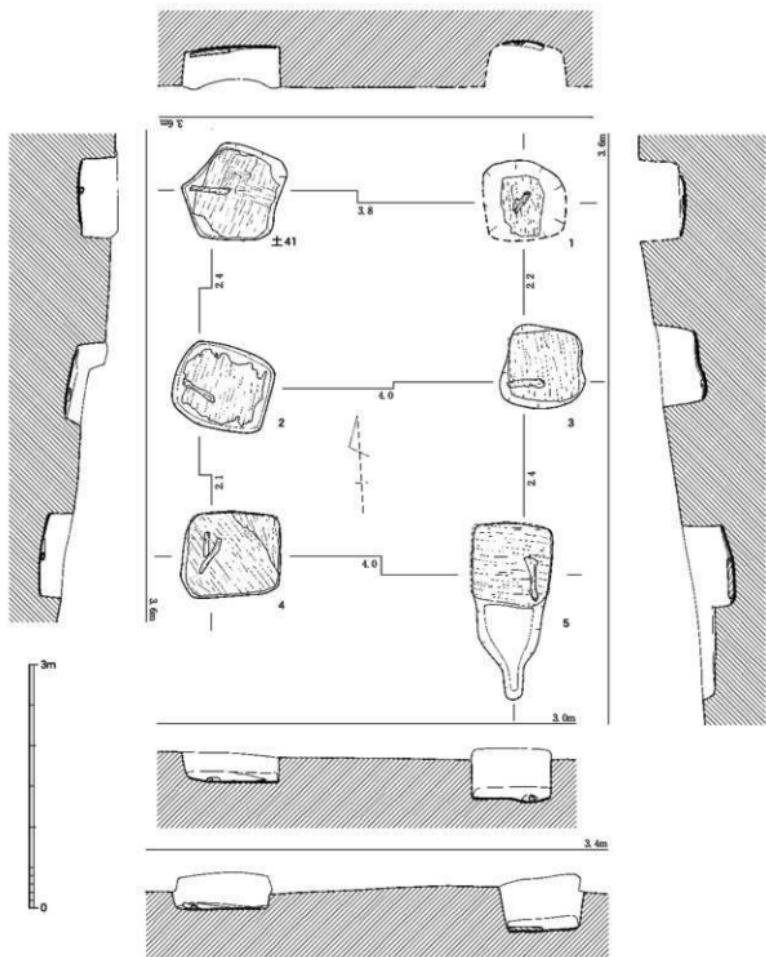
Ⅲ区南東隅付近に位置し、 $1 \times 1$ 間の建物である。建物8-1～4からなり、礎盤の横木の大きさ・形状等の類似性や埋置軸が桁・梁方向と概ね共通するため、これらの組み合わせによるこの建物の確実性は非常に高いと考えられる。ただ、本建物の南側では、礎盤やピットが集中するにもかかわらず調査区端部のため状況が不明瞭な部分があり、この部分の遺構と組み合って規模が拡大する可能性も捨てきれない。7号建物跡と重複する位置関係にあるが先後関係は不明である。梁行2.5m、桁行3.5mを測り、床面積は8.8 m<sup>2</sup>程度となる。柱穴の平面形は、一部不整形な部分があるが隅丸方形を為す。礎盤間で一定の方向性のある高低差は認められない。図示できる土器は、出土していない。

#### 9号掘立柱建物跡（図版5、第12図）

Ⅲ区南東隅付近に位置し、 $2 \times 1$ 間の建物である。41号土坑、建物9-1～4からなり、横木の形状や敷設する樹皮の大きさの類似性からこれらの組み合わせによるこの建物の確実性は非常に高い。Ⅲb区の南側への拡張前は、本建物に切られる28号土坑は北半のみ調査区内にあり、それを切るはずである北東端の柱穴を区分して検出できていなかった。そのため、掘形を把握することはできなかったが28号土坑北半の掘削時に礎盤を検出した。また、北西端の柱穴はⅢb区拡張前に単独の遺構で41号土坑として捉えていた。梁行3.9m、桁行4.55mを測り、床面積は17.7 m<sup>2</sup>程度となる。28・46・77・79号土坑を切り、南西隅の柱穴は上層で横木を伴う小型の柱穴に切られる。検出された柱穴の平面形は隅丸方形に近いが、南東隅の柱穴は南側へ大きく広がるテラ



第11図 III区7・8号据立柱建物跡実測図 (1/60)

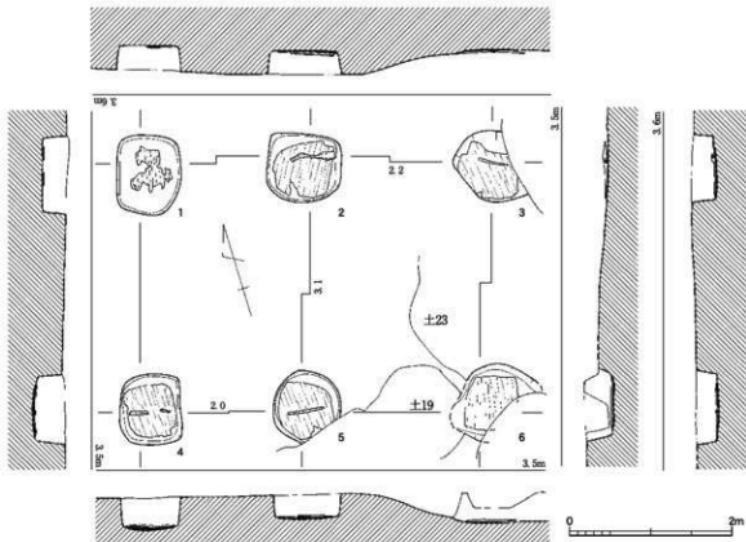


第12図 III区9号掘立柱建物跡実測図(1/60)

ス部が認められ、柱を抜く際の掘削痕等の可能性が考えられる。礎盤間で南東方向へ低くなる傾向が見られる。

#### 出土土器（図版40、第20図20～22）

20は小型丸底壺で、短い口縁部がやや外側の上方へ延び、胴部が半球形に近い。21は手づくねによる小型の鉢形の土器である。22は径2.2cm程度の土玉である。



第13図 III区10号掘立柱建物跡実測図(1/60)

#### 10号掘立柱建物跡（第13図）

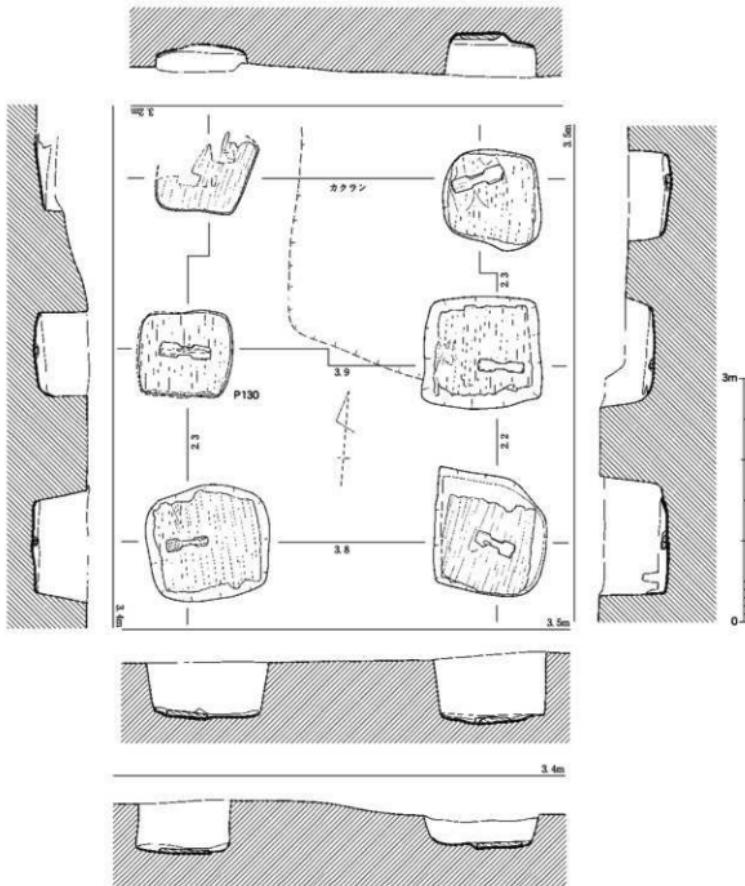
III区南西部に位置し、 $2 \times 1$ 間の建物である。建物 10-1～6 からなり、残存する横木の細長い形状の類似性や埋置軸の共通性から、これらの組み合わせによるこの建物の確実性は高い。19・23・24・30号土坑に切られる。15号建物と重複する位置関係であるが、先後関係は不明である。梁行 3.1 m、桁行 4.2 m を測り、床面積は 13.0 m<sup>2</sup> 程度となる。検出された柱穴の平面形は隅丸方形に近い。礎盤間でわずかに南東方向へ低くなる傾向が見られる。図示できる土器は、出土していない。

#### 11号掘立柱建物跡（第14図）

III区中央部より南側の西寄りに位置し、 $2 \times 1$ 間の建物である。ピット130やその他の礎盤からなり、北西隅の礎盤は、検出段階で確認できなかった搅乱により欠損して横木が失われているが、他の横木の大きさ・形状の類似性や埋置軸の共通性から、これらの組み合わせによるこの建物の確実性は非常に高い。梁行 3.85m、桁行 4.5 m を測り、床面積は 17.3 m<sup>2</sup> 程度となる。柱穴はやや不整な部分もあるが、隅丸方形に近い平面形で検出された。礎盤間で一定の方向性のある高低差はない。図示できる土器は出土していない。

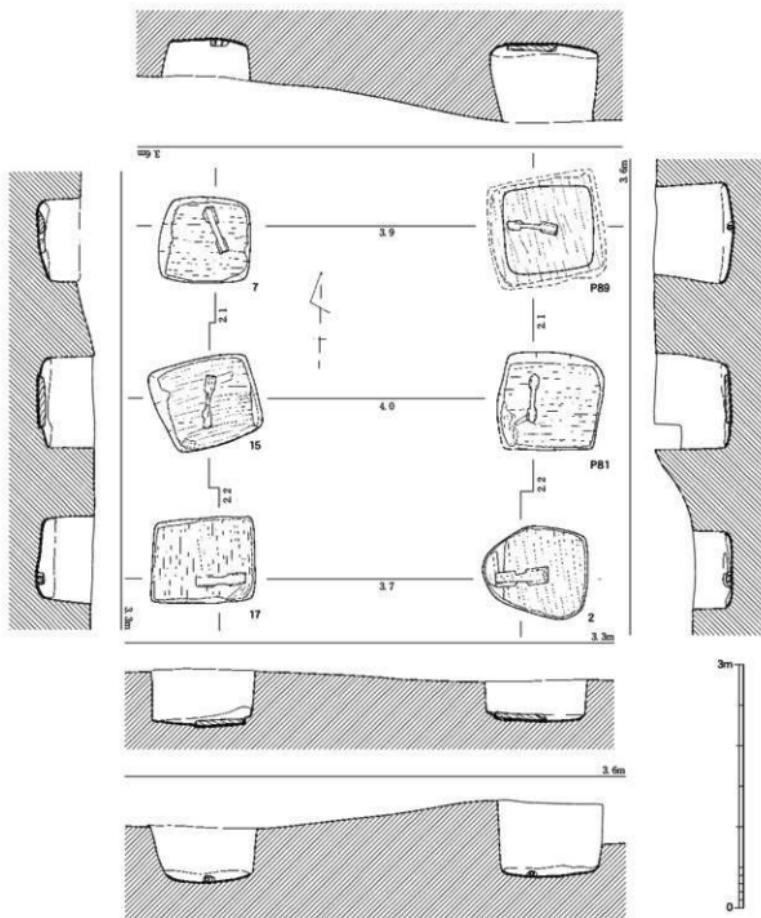
#### 12号掘立柱建物跡（第15図）

III区南側の西寄りに位置しており、 $2 \times 1$ 間の規模の建物である。礎盤 7・15・17、ピット 81・



第14図 III区11号掘立柱建物跡実測図(1/60)

89他からなり、横木の大きさ・形状の類似性や埋置軸が桁・梁方向の軸と共通することから、これらの組み合わせによるこの建物の確実性は非常に高いと判断できる。13・14号建物に切られる先後関係が認められる。梁行3.87m、桁行4.3mを測り、床面積は16.6m<sup>2</sup>程度となる。柱穴はやや不整な部分もあるが、隅丸方形に近い平面形で検出された。そのうち北東側のピット89の掘形では、壁はオーバーハンプする。礎盤間で一定の指向性のある高低差は認められない。図示できる土器は出土していない。



第15図 III区12号掘立柱建物跡(1/60)

### 13号掘立柱建物跡(第16図)

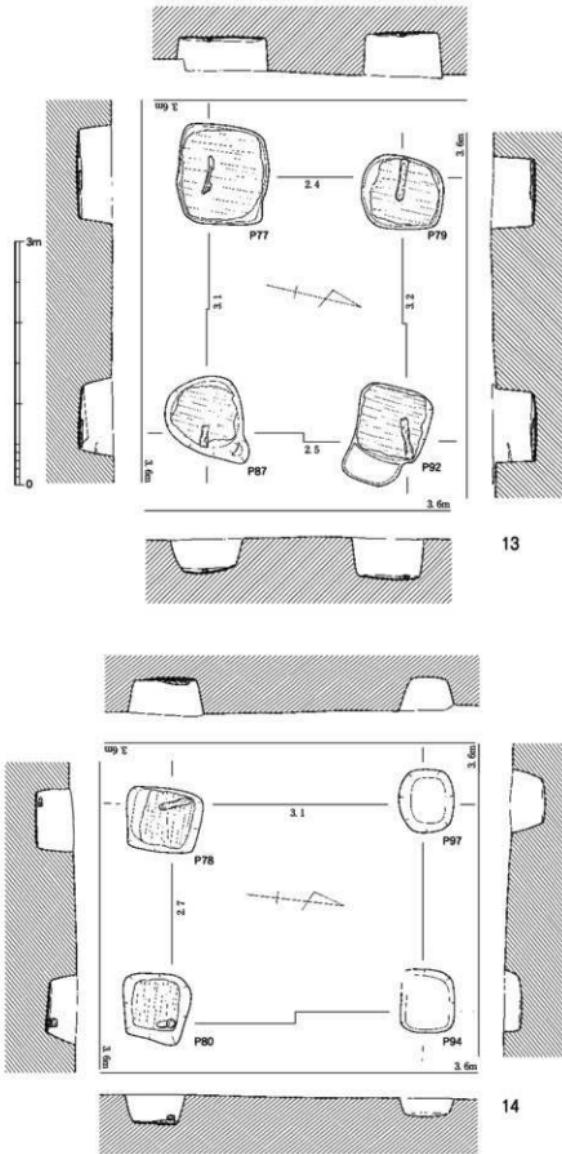
III区南側の西寄りに位置し、 $1 \times 1$ 間の建物である。ピット77・79・87・92からなり、横木の大きさ・形状は概ね類似し、埋置軸の共通性からもこれらの組み合わせによるこの建物の確実性は高い。12号建物を切り、14号建物と重複するが、先後関係は不明。梁行2.45m、桁行3.15mを測り、床面積は7.7m<sup>2</sup>程度。柱穴はやや不整な部分もあるが、隅丸方形に近い平面形で検出された。礎盤間でわずかに南西方向へ低くなる傾向がある。図示できる土器は出土していない。

14号掘立柱建物跡（第16図）

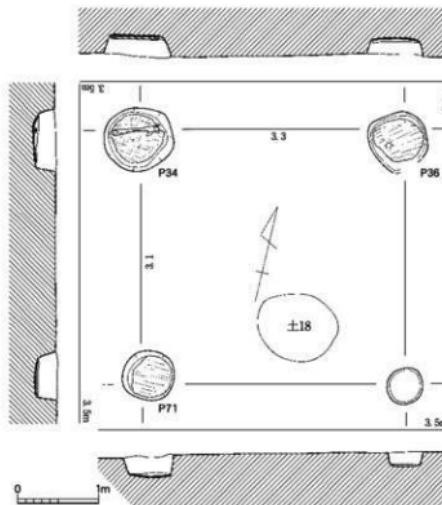
III区南側の西寄りに位置し、 $1 \times 1$ 間の建物である。ピット78・80・94・97からなり、南側の2基は、礎盤が伴うとともに横木の大きさ・形状も類似するが、北側の2基は、礎盤が検出されず相対的な位置関係から組み合うものと判断したため、この建物の確実性にはやや不安がある。12号建物を切り、13号建物とは重複する位置関係にあるが、先後関係は不明である。横木の検出が限られているため桁行は概算で約3.1mで、梁行約2.7mを測り、床面積は約8.4m<sup>2</sup>程度と想定される。検出された柱穴の平面形は隅丸方形に近い。礎盤や柱穴の底面の間で一定の方向性のある高低差は認められない。図示できる土器は出土していない。

15号掘立柱建物跡（第17図）

III区南西部に位置し、 $1 \times 1$ 間の建物である。ピット34・36・71他からなり、柱穴の1

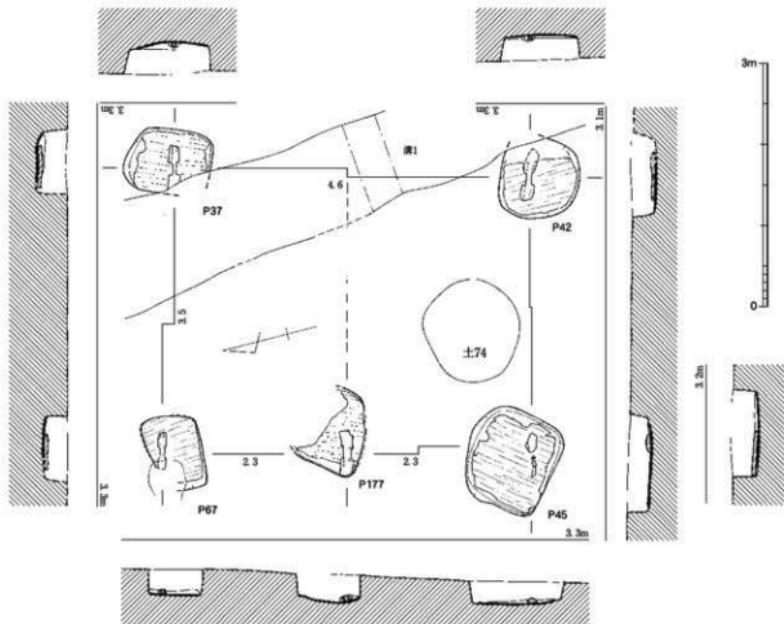


第16図 III区13・14号掘立柱建物跡実測図(1/60)



第17図 III区 15号掘立柱建物跡実測図 (1/60)

基では基礎が検出されず、横木を検出したのは1基のみで、相対的な位置関係から組み合うものと判断したため、この建物の確実性にはやや不安がある。19号土坑に切られる先後関係である。横木の検出が限られているため概算であるが、梁行約3.1mを測り、桁行約3.3mで、床面積は約10.2m<sup>2</sup>程度と想定される。検出された柱穴は隅丸方形から円形に近い平面形である。礎盤や柱穴の底面の間で一定の方向性のある高低差は認められない。図示できる土器は出土していない。



第18図 III区 16号掘立柱建物跡実測図 (1/60)

#### 16号掘立柱建物跡（第18図）

Ⅲ区南端の中央部付近に位置し、 $2 \times 1$ 間の建物である。ピット37・42・45・67・177-1からなり、残存する横木の大きさ・形状の類似性や埋置軸の共通性から、これらの組み合わせによるこの建物の確実性は高い。東側中央の柱穴は1号溝に切られて失われたと考えられる。17号建物の柱穴に切られ、18号建物と重複する位置関係にあるが先後関係は不明である。梁行3.5m、桁行4.6mを測り、床面積は16.1m<sup>2</sup>程度となる。検出された柱穴は隅丸方形に近い平面形である。礎盤間でわずかに南方向へ低くなる傾向が見られる。

#### 出土土器（第20図23・24）

23は短い口縁部がやや外側へ伸び、胴部がやや張る鉢である。24は非常に短い口縁が強く外側へ屈曲する壺で、胴部外面にはタタキが残存する。

#### 17号掘立柱建物跡（第19図）

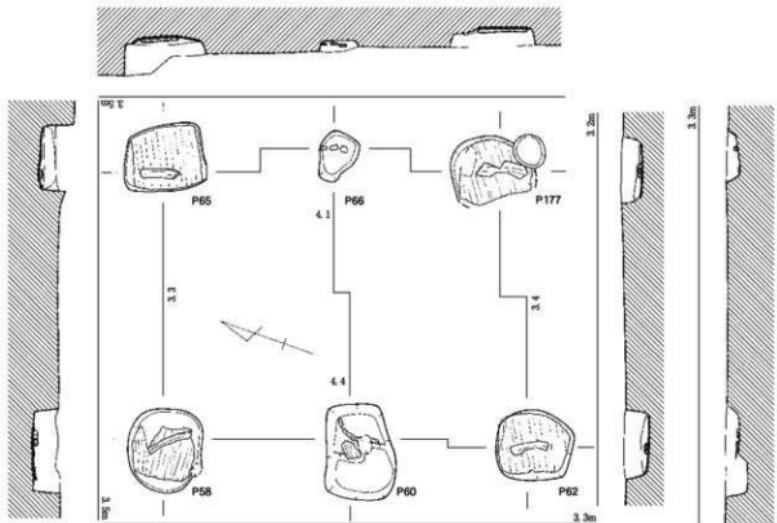
Ⅲ区南端の中央部付近に位置し、 $2 \times 1$ 間の建物である。ピット58・60・62・65・66・177-2からなり、礎盤の横木は残存状態が良好でないものや一部形状に相違があるが、埋置軸の共通性からこれらの組み合わせによるこの建物の確実性は高い。ピット60で検出した樹皮はわずかで底面の深さは一定ではなく、柱を抜く際に掘削した影響である可能性がある。また、ピット66は小型の円形で明瞭な礎盤が検出されず、柱の抜き痕のみを検出したものである可能性がある。梁行3.35m、桁行4.25mを測り、床面積は14.2m<sup>2</sup>程度となる。16号建物に切られ、18号建物と重複する位置関係にあるが先後関係は不明である。検出された柱穴は隅丸方形に近い平面形である。礎盤間でわずかに南方向へ低くなる傾向が見られる。図示できる土器は出土していない。

#### 18号掘立柱建物跡（第19図）

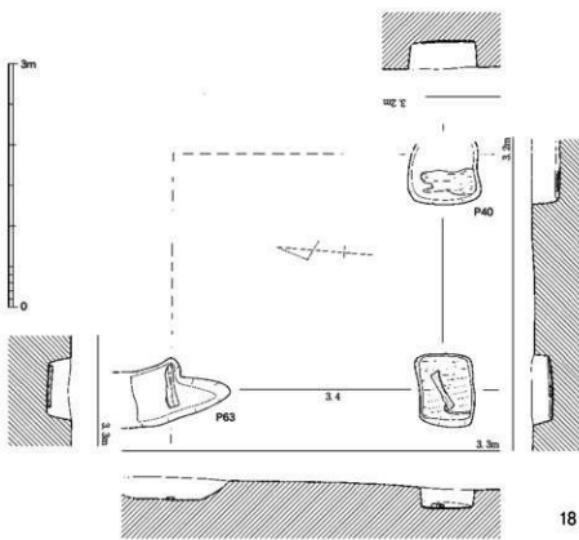
Ⅲ区南端の中央部付近に位置し、 $1 \times 1$ 間の建物である。ピット40・63他からなり、東側は1号溝に切られており、1基は消失したと考えられ、もう1基も部分的に消失し、横木は検出されなかった。西側の2基は横木が検出され埋置軸が概ね共通するが、1基は樹皮の敷設が認められなかつた。このように、柱穴は1基が消失している上、共通要素に乏しいが、周辺で他に組み合う可能性のあるものもなく、この建物の確実性はある程度高い。桁行3.4mで、梁行は横木の検出が限られるため概算で約2.9mを測り、床面積は約9.9m<sup>2</sup>程度と想定される。検出された柱穴の平面形は、不整形のものもあるが、隅丸方形に近いものが見られる。礎盤間で一定の方向性のある高低差はない。図示できる土器は出土していない。

#### 19号掘立柱建物跡（図版6、第21図）

Ⅲ区中央部のやや東寄りに位置し、 $1 \times 1$ 間の建物である。Ⅲ区中央礎盤集中部内の礎盤2・3・9・10からなり、横木の大きさ・形状の類似性や埋置軸の桁・梁方向との共通性から、これらの組み合わせによるこの建物の確実性は高い。梁行1.85m、桁行3.85mを測り、床面積は7.1m<sup>2</sup>程度となる。桁長・梁長間の差が大きいため、梁の軸上に規模が拡大して桁となる建物である可能性もあるため、その場合に追加の柱穴が想定される位置で下層を確認したが礎盤は検出されなかつた。20・21号建物と重複する位置関係にあるが、先後関係は不明である。検出された柱穴の平面

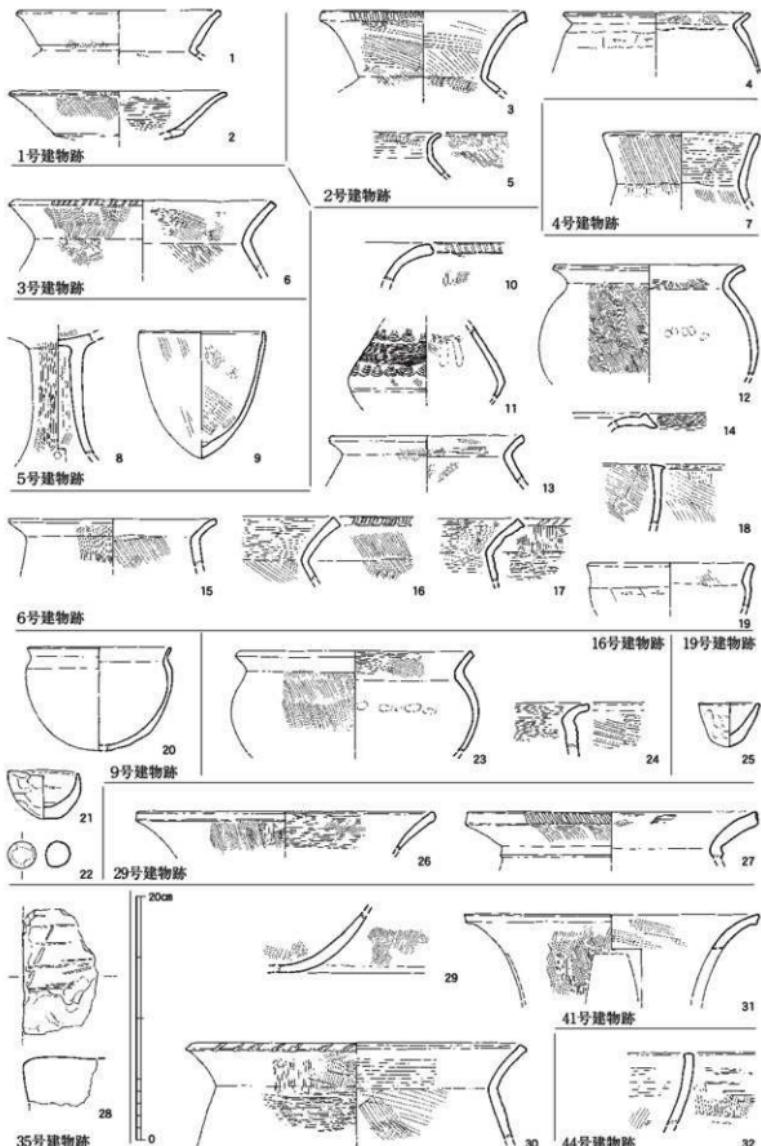


17

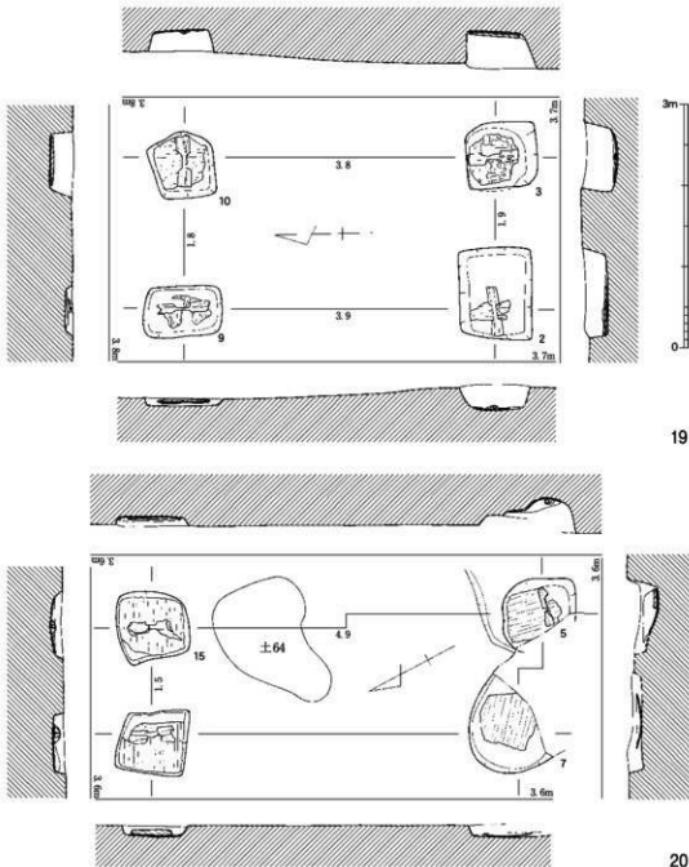


18

第19図 III区 17・18号掘立柱建物跡実測図 (1/60)



第20図 III区 1~6・9・16・19・29・35・41・44号  
掘立柱建物跡出土土器実測図 (1/4)



第21図 III区19・20号掘立柱建物跡実測図(1/60)

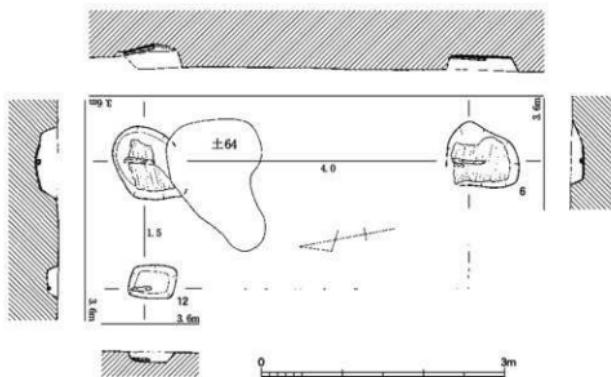
形は隅丸方形に近い。礎盤間で一定の方向性のある高低差はない。

**出土土器**(図版40、第20図25)

25は鉢形の手づくねによる土器である。

#### 20号掘立柱建物跡(図版6、第21図)

III区中央部のやや東寄りに位置し、1×1間の建物である。III区中央礎盤集中部内の礎盤5・7・15他からなり、北側の柱穴は横木の大きさ・形状の類似性や埋置軸の共通性が認められる。南側の柱穴は、電柱の保護のため調査区外となつた範囲により検出できなかつた部分があり、1基では



第22図 III区21号掘立柱建物跡実測図(1/60)

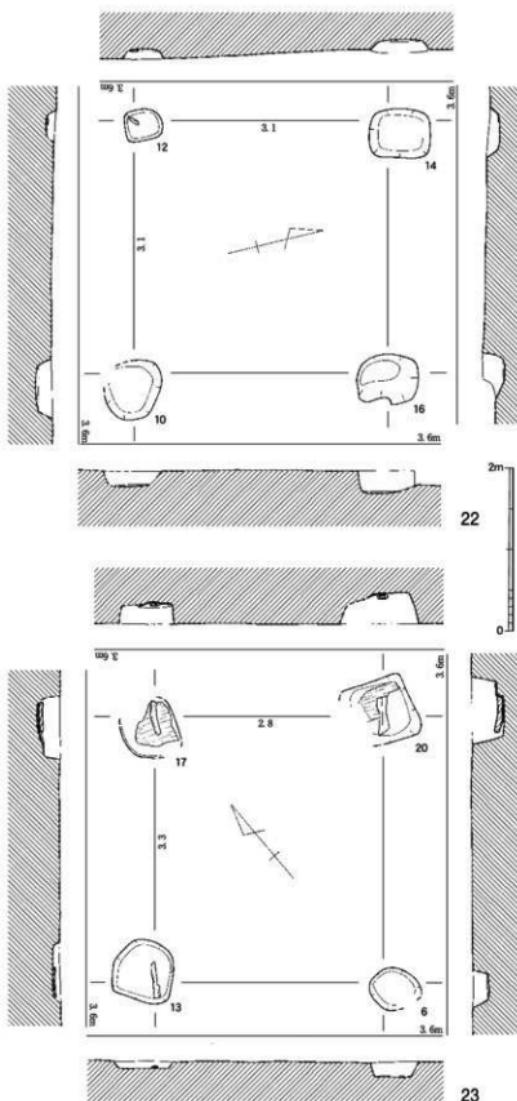
横木が検出されず、もう1基の横木も北側とは類似しない。このような点からこれらの組み合わせによるこの建物の確実性には不安がある。梁行1.5m、桁行4.9mを測り、両者の差が著しい点が特徴的で、床面積は7.4m<sup>2</sup>程度となる。21号建物を切り、19号建物と重複する位置関係にあるが、先後関係は不明である。検出された柱穴の平面形は隅丸方形に近い。礎盤間で一定の方向性のある高低差はない。図示できる土器は出土していない。

#### 21号掘立柱建物跡（図版6、第22図）

III区中央部のやや東寄りに位置し、1×1間の建物である。III区中央礎盤集中部内の礎盤6・12他からなり、1基は他との位置関係から電柱の保護のため調査区外となった範囲にあたり検出できなかったと考えられる。検出された3基の柱穴に関して、横木の大きさ・形状は類似し、埋置軸は共通するが、1基については、小型の平面形で、樹皮の敷設は認められなかった。よって、共通性からはこれらの組み合わせによるこの建物の確実性はある程度高いと考えられるが、不安要素もやや残る。梁行1.5m、桁行4.0mを測り、両者の差が著しい点が特徴的で、床面積は6.0m<sup>2</sup>程度となる。20号建物に切られ、19号建物と重複する位置関係にあるが、先後関係は不明である。検出された柱穴の平面形は不整な部分もあるが隅丸方形に近い。礎盤間で一定の方向性のある高低差はない。図示できる土器は出土していない。

#### 22号掘立柱建物跡（図版6、第23図）

III区中央の東端部に位置し、1×1間の建物である。III区東礎盤集中部内の礎盤10・12・14・16からなり、全て樹皮の敷設は認められず、横木は非常に小さなもののが1基のみで検出された。相対的な位置関係の組み合わせから建物と判断したが、やや不安要素も残る。横木がほとんど検出されていないため概算であるが、梁行・桁行ともに約3.1m程度で、床面積は約9.6m<sup>2</sup>程度となる。23・24号建物と重複する位置関係にあるが、先後関係は不明。検出した柱穴の平面形は隅丸方形に近い。礎盤間で一定の方向性のある高低差はない。図示できる土器は出土していない。



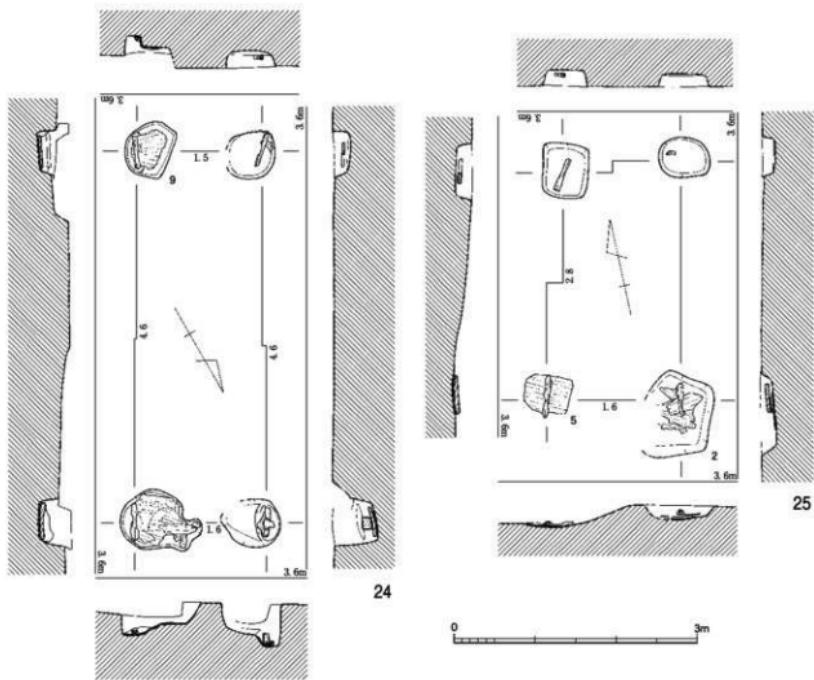
第23図 III区22・23号掘立柱建物跡実測号図(1/60)

23号掘立柱建物跡(図版6、  
第23図)

III区中央の東端部に位置し、1×1間の建物である。III区東礎盤集中部内の礎盤6・13・17・20からなり、1基で礎盤は検出されなかったが、樹皮の敷設は2基で認められ、3基で検出された横木の大きさ・埋置軸は近似する。よってこの建物の確実性はある程度高いと考えられる。24号建物に切られ、22・25号建物と重複する位置関係にあるが、先後関係は不明である。梁行2.8m、桁行3.3mを測り、床面積は約9.2m<sup>2</sup>程度となる。検出された柱穴の平面形は隅丸方形に近い。礎盤間や柱穴の底面でわずかに北東方向へ低くなる傾向が見られる。図示できる土器は出土していない。

24号掘立柱建物跡(図版6、  
第24図)

III区中央の東端部に位置し、1×1間の建物である。III区東礎盤集中部内の礎盤9他からなり、樹皮の敷設が認められるのは2基であるが、横木の形状・大きさの類似性や埋置軸の共通性から、これらの組み合わせによるこの建物の確実性はある程度高いと考えられる。23号建物を切り、22号建物

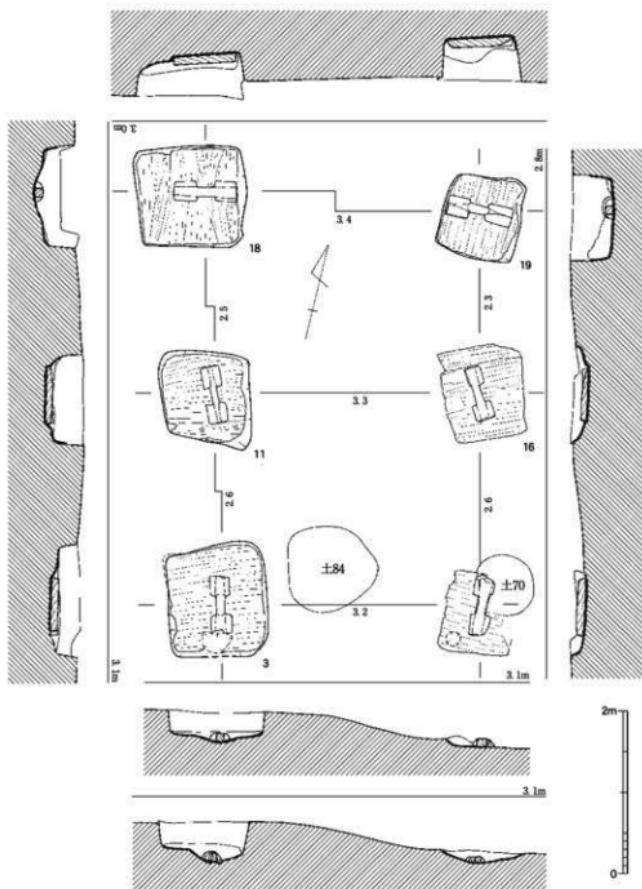


第24図 III区24・25号掘立柱建物跡実測図(1/60)

と重複する位置関係にあるが、相互の先後関係は不明である。梁行 1.55m、桁行 4.6m を測り、両者の差が著しい点が特徴的で、床面積は 7.1 m<sup>2</sup> 程度となる。北西側の柱穴ではわずかに柱根が残存する。検出された柱穴の平面形は、切り合いにより判然としない点や不整な部分もあるが、円形に近い。礎盤間や柱穴の底面で一定の方向性のある高低差は認められない。図示できる土器は出土していない。

#### 25号掘立柱建物跡(図版6、第24図)

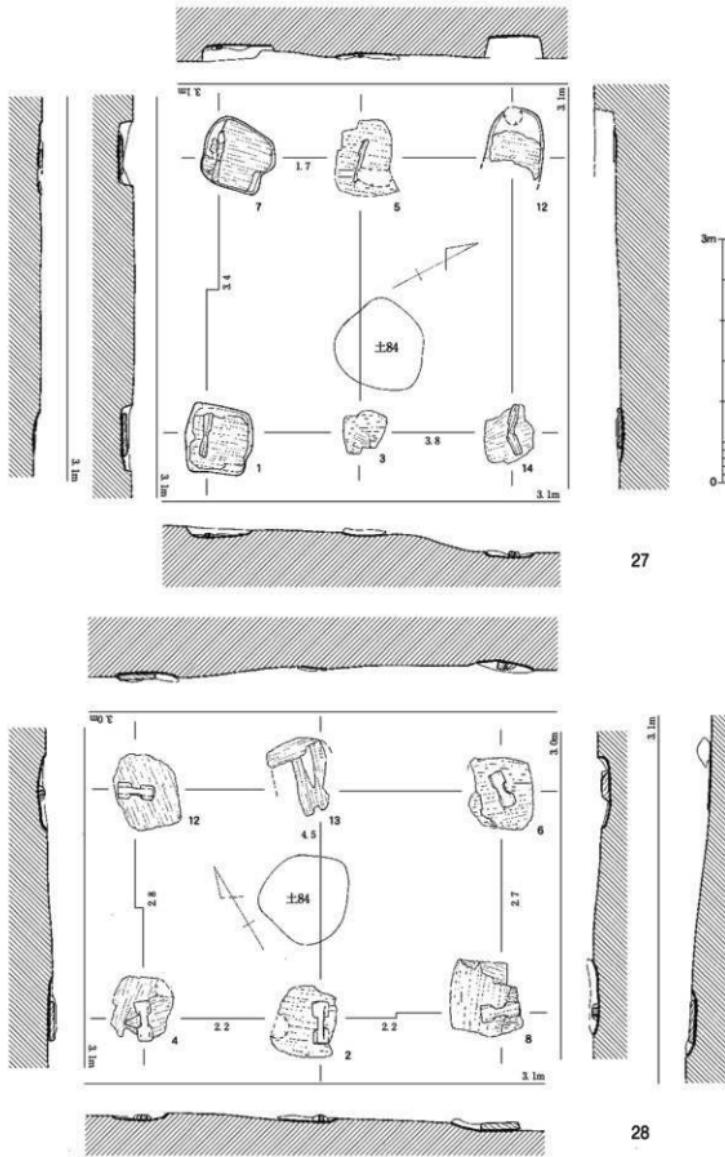
III区中央付近の東端部に位置し、1×1間の建物である。III区東礎盤集中部内の礎盤2・5他からなり、その内の1基では礎盤が検出されていない。残り3基の内1基では樹皮は敷設されていないが、横木の形状・大きさの類似性や埋置軸の共通性は概ね認められるため、これらの組み合わせによるこの建物の確実性はやや不安があるものの、ある程度認められる。23号建物と重複する位置関係にあるが、先後関係は不明である。梁行 1.6m、桁行 2.8m を測り、梁長が非常に短い点が特徴的で、床面積は 4.5 m<sup>2</sup> 程度となる。検出された柱穴の平面形は、隅丸方形から円形に近い。礎盤間で一定の方向性のある高低差はない。図示できる土器は出土していない。



第25図 III区 26号掘立柱建物跡実測図 (1/60)

#### 26号掘立柱建物跡（第25図）

III区中央部よりやや北西寄りに位置し、 $2 \times 1$ 間の建物である。礎盤3・11・16・18・19他からなり、横木の大きさ・形状の類似性や埋置軸の桁・梁方向との共通性から、これらの組み合わせによるこの建物の確実性は非常に高いと考えられる。27・28号建物に切られ、1号溝と70号土坑に切られる先後関係が認められる。梁行3.3m、桁行5.0mを測り、床面積は16.5m<sup>2</sup>程度となる。検出された柱穴の平面形は、隅丸方形である。礎盤間で北東方向へ低くなる傾向が見られる。図示できる土器は出土していない。



第26図 III区27・28号掘立柱建物跡実測図(1/60)

### 27号掘立柱建物跡（第26図）

Ⅲ区中央部よりやや北西寄りに位置し、 $2 \times 1$ 間の建物である。礎盤5・7・12-1・14他からなり、その中には横木の検出ができなかったものもあるが、残存する横木の大きさ・形状の類似性や埋置軸の共通性から、これらの組み合わせによるこの建物の確実性は高いと考えられる。26号建物を切り、28号建物に切られる先後関係が認められる。1号溝と切り合う位置関係にあるが、相互の先後関係は確認できなかった。梁行3.4m、桁行3.8mを測り、床面積は12.9m<sup>2</sup>程度となる。柱穴の平面形は、検出面で確認できたものや残存する礎盤の形状から、隅丸方形に近いと考えられる。礎盤間で北東方向へ低くなる傾向が見られる。図示できる土器は出土していない。

### 28号掘立柱建物跡（第26図）

Ⅲ区中央部よりやや北西寄りに位置し、 $2 \times 1$ 間の建物である。礎盤2・4・6・8・12-2・13からなり、横木の検出できなかったものもあるが、残存する横木の大きさ・形状の類似性や埋置軸の桁・梁方向との共通性から、これらの組み合わせによるこの建物の確実性は高い。26・27号建物を切り、70号土坑に切られる。1号溝と切り合う位置関係にあるが、先後関係は確認できなかった。梁行2.75m、桁行4.45mを測り、床面積は12.2m<sup>2</sup>程度となる。柱穴の掘形は検出されなかつたが、礎盤の形状から平面形は隅丸方形に近いと考えられる。礎盤間で北東方向へ低くなる傾向が見られる。図示できる土器は出土していない。

### 29号掘立柱建物跡（第27図）

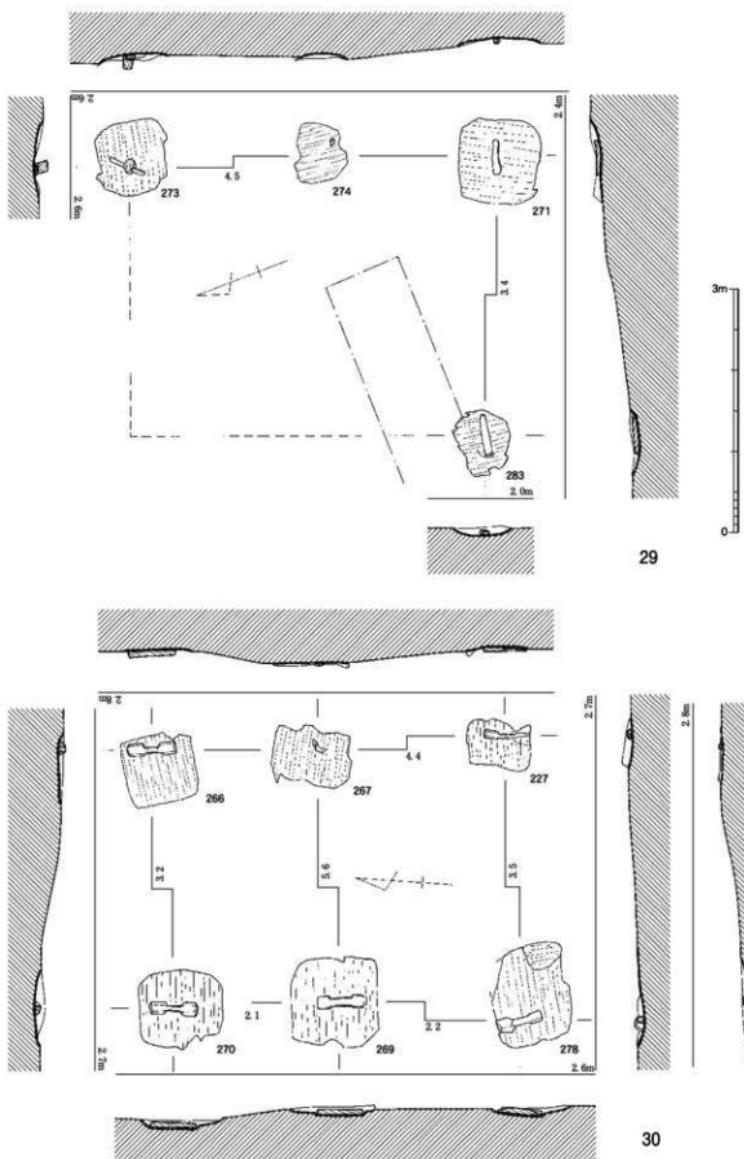
Ⅲ区北東部の東端に位置し、 $2 \times 1$ 間の建物である。礎盤271・273・274・283からなり、そのうち1基で横木を検出できず、残りの2基は礎盤自体を検出できなかった。ただ、検出した横木の大きさ・形状の類似性や埋置軸の桁・梁方向との共通性から、これらの組み合わせによるこの建物の確実性はある程度高いと考える。30号建物に切られる先後関係である。梁行3.4m、桁行4.5mを測り、床面積は15.3m<sup>2</sup>程度となる。礎盤273ではわずかに柱根が残存し、径10～15cmである。柱穴の掘形は検出されなかつたが、礎盤の形状から平面形は隅丸方形に近いと考えられる。礎盤間で南西方向へ低くなる傾向が見られる。

### 出土土器（第20図26・27）

26は在地系の甕の口縁部である。27は在地系の甕の口頭部で、口唇部にキザミが施され、頭基部外側で低い突帯状に隆起する。

### 30号掘立柱建物跡（第27図）

Ⅲ区北東部の東端に位置し、 $2 \times 1$ 間の建物である。礎盤227・266・267・269・270・278からなり、1基で横木を検出できなかつたが、残りの礎盤の横木の大きさ・形状の類似性や埋置軸の共通性から、これらの組み合わせによるこの建物の確実性は高い。29号建物を切る先後関係である。梁行3.35m、桁行4.35mを測り、床面積は14.6m<sup>2</sup>程度となる。柱穴の掘形は検出されなかつたが、礎盤の形状から平面形は隅丸方形に近いと考えられる。礎盤間で北西方向へ低くなる傾向が見られる。図示できる土器は出土していない。



第27図 III区 29・30号据立柱建物跡実測図 (1/60)

### 31号掘立柱建物跡（第28図）

Ⅲ区北側中央部に位置し、 $1 \times 1$ 間の建物である。礎盤184・185・189・216からなり、礎盤の横木の大きさ・形状の類似性や概ね共通する埋置軸から、これらの組み合わせによるこの建物の確実性は高いと考えられる。33・35号建物を切り、37号建物に切られる先後関係である。梁行3.6m、桁行3.9mを測り、床面積は14.0m<sup>2</sup>程度となる。柱穴は検出されたものや礎盤の形状から、平面形は隅丸方形に近いと考えられる。礎盤間で南方向へ低くなる傾向が見られる。図示できる土器は出土していない。

### 32号掘立柱建物跡（第28図）

Ⅲ区北側中央部に位置し、 $1 \times 1$ 間の建物である。礎盤165・170・180・183-1からなり、部分的に欠損したものが多く、内1基では横木は検出されなかった。しかし、残りの横木の大きさ・形状の類似性や概ね桁・梁方向と共通する埋置軸から、これらの組み合わせによるこの建物の確実性はある程度高いと考える。33号建物を切り、35号建物に切られる先後関係である。梁行3.0m、桁行3.5mを測り、床面積は10.5m<sup>2</sup>程度となる。柱穴の掘形は検出されなかったが、礎盤の形状から平面形は隅丸方形に近いと考えられる。礎盤間で南方向へ低くなる傾向が見られる。図示できる土器は出土していない。

### 33号掘立柱建物跡（第29図）

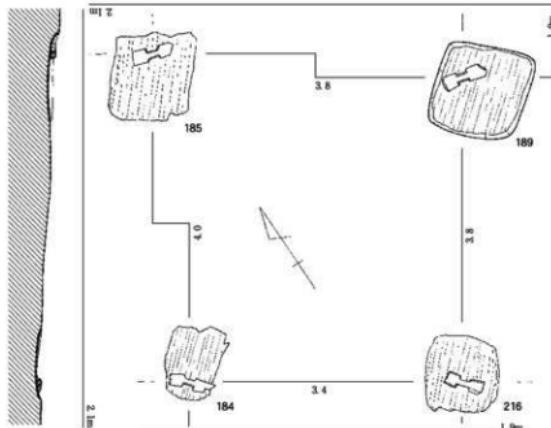
Ⅲ区北側中央部に位置し、 $1 \times 1$ 間の建物である。礎盤167・183-2・190・199からなり、横木の大きさ・形状の類似性や埋置軸の共通性から、これらの組み合わせによるこの建物の確実性は高いと考えられる。ただ、梁長・桁長間の差がやや大きい点が不自然であり、実際にはより規模が拡大する可能性も捨てきれない。38号建物を切り、31・32・34・37号建物に切られる先後関係である。梁行2.05m、桁行3.35mを測り、床面積は6.9m<sup>2</sup>程度となる。柱穴は一部検出されたものや礎盤の形状から平面形は隅丸方形に近いと考えられる。礎盤間で南方向へ低くなる傾向が見られる。図示できる土器は出土していない。

### 34号掘立柱建物跡（第29図）

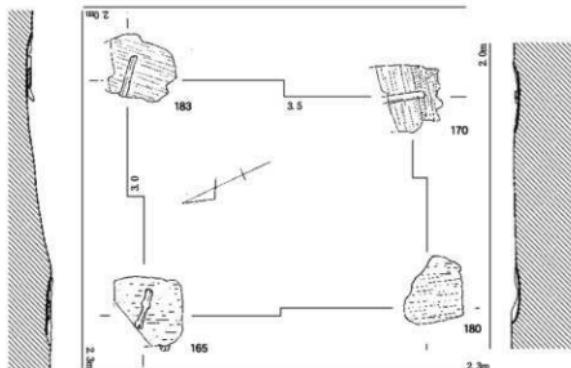
Ⅲ区北側中央部に位置し、 $1 \times 1$ 間の建物である。礎盤166・178・(188・191)・210からなり、部分的に欠損したものがあり、1基で横木は検出されなかった。また、横木の形状の類似性も乏しく、これらの組み合わせによるこの建物の確実性にはやや不安がある。礎盤188・191は重複した位置で検出されており、同一の柱穴に伴うと考えられる。33・35・38号建物を切る先後関係である。梁行3.2m、桁行3.9mを測り、床面積は12.5m<sup>2</sup>程度となる。柱穴の掘形は検出されなかったが、礎盤の形状から平面形は隅丸方形に近いと見られる。礎盤間で南方向へ低くなる傾向がある。図示できる土器は出土していない。

### 35号掘立柱建物跡（第30図）

Ⅲ区北側中央部に位置する $2 \times 1$ 間の建物。礎盤169・174・194・215・220・223からなり、横木の大きさ・形状の類似性や、概ね共通する部分の多い埋置軸から、これらの組み合わせによるこ

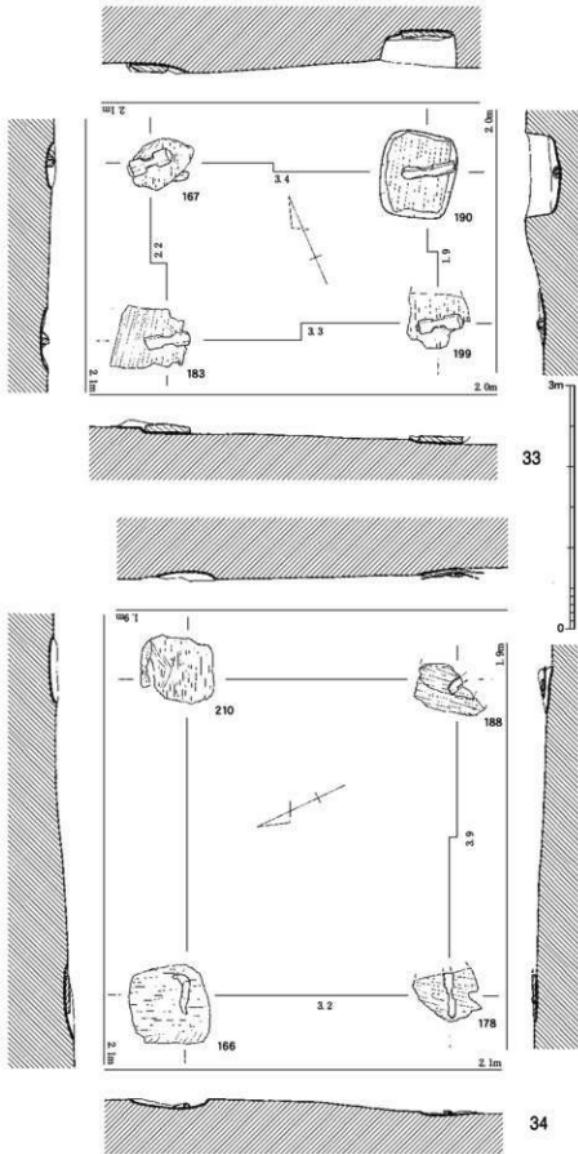


31



32

第28図 III区31・32号掘立柱建物跡実測図(1/60)



第29図 III区 33・34号掘立柱建物跡実測図 (1/60)

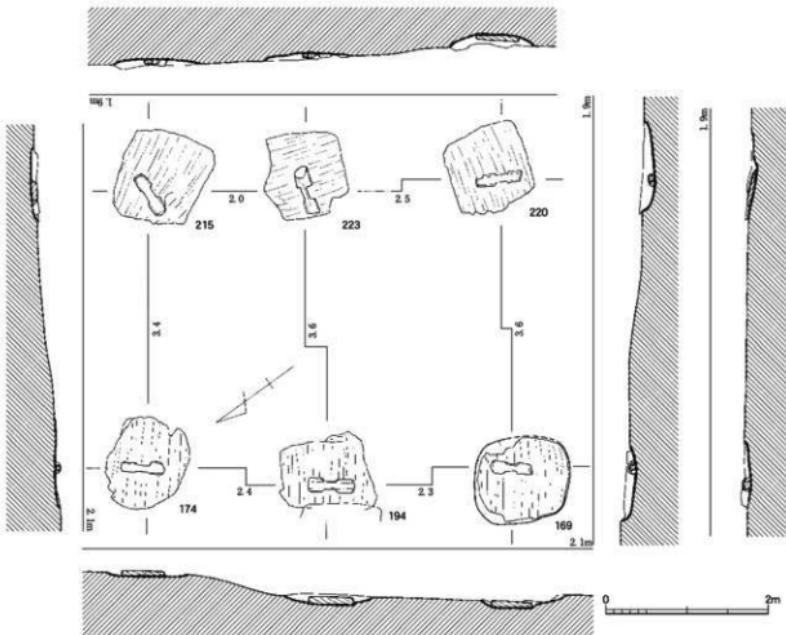
の建物の確実性は高い。36・39号建物を切り、31・34・37号建物に切られる。梁行3.53m、桁行4.6mを測り、床面積は16.2m<sup>2</sup>程度。柱穴の掘形は検出されなかったが、礎盤の形状から平面形は隅丸方形に近いと考えられる。礎盤間で南方に向へ低くなる傾向が見られる。

#### 出土土器(第20図28)

28は焼粘土塊で、大きく欠損するが、残存面が2面見られる。支脚の可能性がある。

#### 36号掘立柱建物跡 (第31図)

III区北側中央部に位置し、1×1間の建物である。礎盤172・221・229からなり、北西側に対応する礎盤を検出することはできなかったが、検出した横木の大きさ・形状の類似性や、概ね梁・桁方向と共通する埋置軸から、これらの組み合わせによるこの建物の確実性は高い。35・39号建物に切られる。梁



第30図 III区35号掘立柱建物跡実測図(1/60)

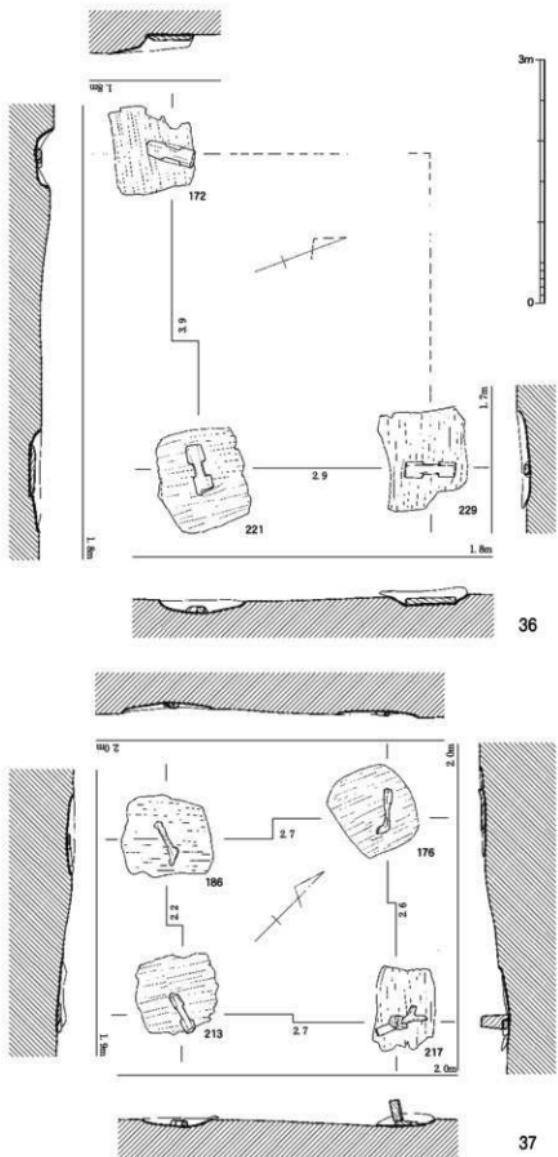
行2.9m、桁行3.9mを測り、床面積は11.3m<sup>2</sup>程度となる。柱穴の掘形は検出されなかつたが、礎盤の形状から平面形は隅丸方形に近いと考えられる。礎盤間でわずかに南東方向へ低くなる傾向が見られる。図示できる土器は出土していない。

### 37号掘立柱建物跡（第31図）

III区北側中央部に位置し、1×1間の建物である。礎盤176・186・213・217からなり、横木の大きさや不整な部分の残る形状の類似性が見られる点から、これらの組み合わせによるこの建物の確実性はある程度高いと考えられる。31・33・35・38・39号建物を切る。梁行2.4m、桁行2.7mを測り、床面積は6.5m<sup>2</sup>程度となる。礎盤217では、径15cm前後の柱根が残存する。柱穴の掘形は検出されなかつたが、礎盤の形状から平面形は隅丸方形に近いと考えられる。礎盤間で南東方向へ低くなる傾向が見られる。図示できる土器は出土していない。

### 38号掘立柱建物跡（第32図）

III区北側中央部に位置し、2×1間の建物である。礎盤192・193・201・226・235・238からなり、2基で横木が検出できなかつたが、残りの横木や樹皮の敷設範囲の大型である特徴や形状の類似

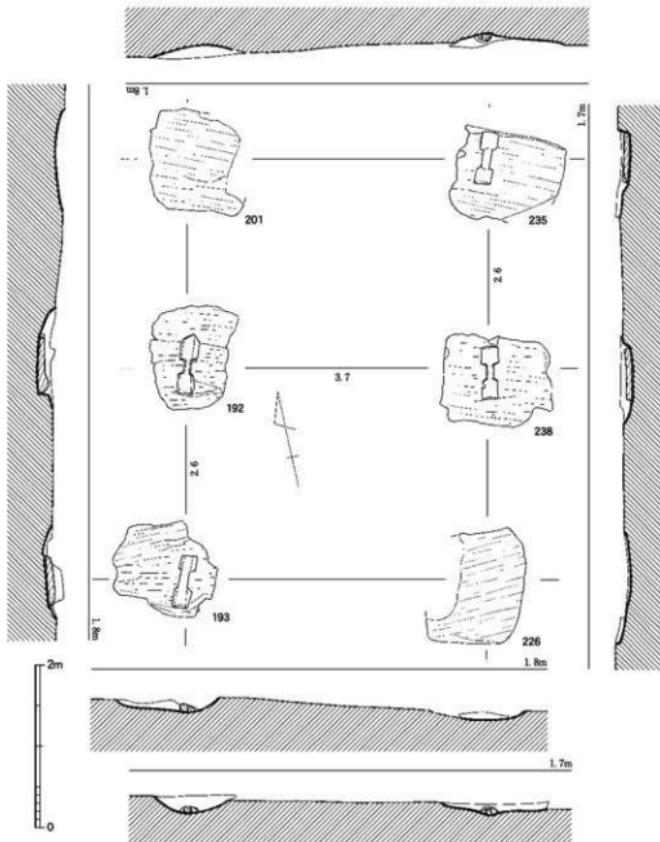


性、更に埋置軸の共通性からこれらの組み合わせによるこの建物の確実性は非常に高い。33・34・37・42・46号建物に切られる。梁行3.7m、桁行5.2mを測り、床面積は19.2m<sup>2</sup>程度となる。柱穴の掘形は検出されなかったが、礎盤の形状から平面形は隅丸方形に近いと考えられる。礎盤間でわずかに東方向へ低くなる傾向が見られる。図示できる土器は出土していない。

### 39号掘立柱建物跡（第33図）

III区北側中央部に位置し、1×1間の建物である。礎盤209・225・242・243からなり、北側の2基は小型の横木の形状が類似するが、南側では横木がそれよりも大きいものと欠失したものからなり、これらの組み合わせによるこの建物の確実性には不安がある。36号建物を切り、35・37号建物に切られる。梁行2.0m、桁行2.8mを測り、床面積は5.6m<sup>2</sup>程度となる。柱穴の掘形は検出されなかったが、礎盤の形状

第31図 III区 36・37号掘立柱建物跡実測図(1/60)

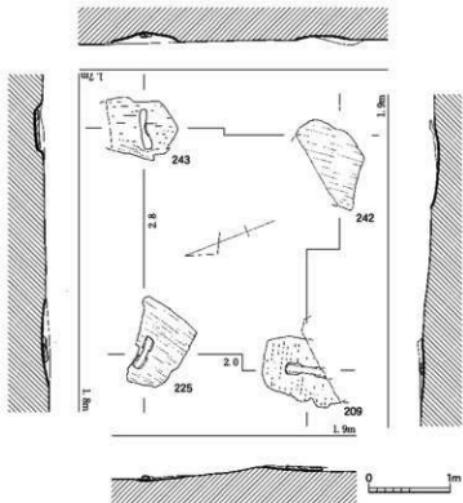


第32図 III区 38号掘立柱建物跡実測図 (1/60)

から平面形は隅丸方形に近いと考えられる。礎盤間でわずかに北東方向へ低くなる傾向が見られる。図示できる土器は出土していない。

#### 40号掘立柱建物跡（第34図）

III区北側中央部に位置し、 $2 \times 1$ 間の建物である。礎盤245・250・252・257・259・261からなり、横木や礎盤自体が大幅に欠失したものがあるが、残りの横木の大きさ・形状の類似性や、梁・桁方向と共に通する埋置軸から、これらの組み合わせによるこの建物の確実性は非常に高い。41号建物に切られる。梁行2.8m、桁行4.8mを測り、床面積は13.4m<sup>2</sup>程度となる。柱穴の掘形は検出

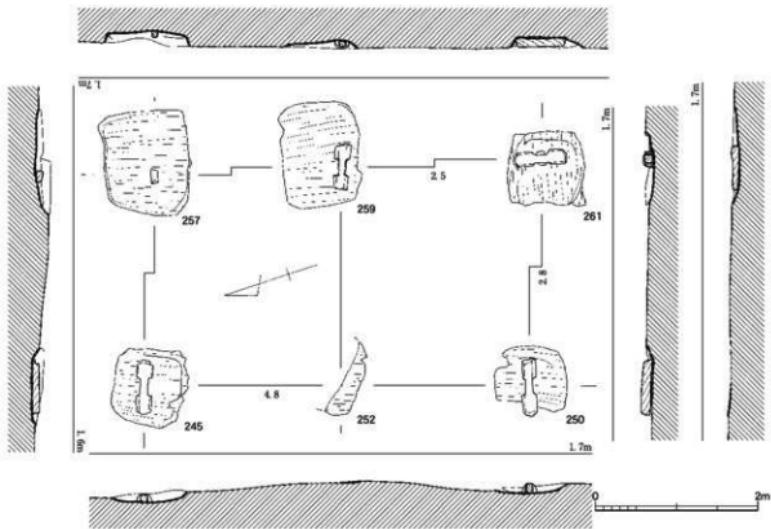


第33図 III区 39号掘立柱建物跡実測図 (1/60)

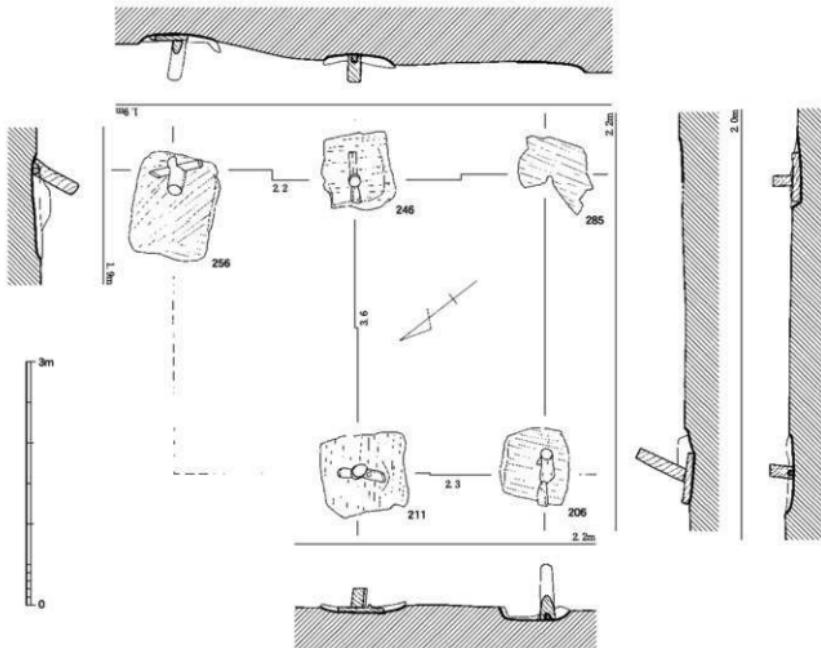
されなかつたが、礎盤の形状から平面形は隅丸方形に近いと考えられる。礎盤間で一定の方向性のある高低差はない。図示できる土器は出土していない。

#### 41号掘立柱建物跡（第35図）

III区北側中央部に位置し、 $2 \times 1$ 間の建物である。礎盤206・211・246・252・256・285からなり、対応する位置で礎盤自体が検出できなかった点や横木が消失するものがあるが、残存する横木の大きさ・形状の類似性や、梁・桁方向と共に埋置軸が認められ、またそれらにはいずれも柱根が残存することから、これらの組み合わせによるこの建物の確実性は非常に高い。38・40・42・43号建物を切る先後関係である。梁行



第34図 III区 40号掘立柱建物跡実測図 (1/60)



第35図 III区41号掘立柱建物跡実測図(1/60)

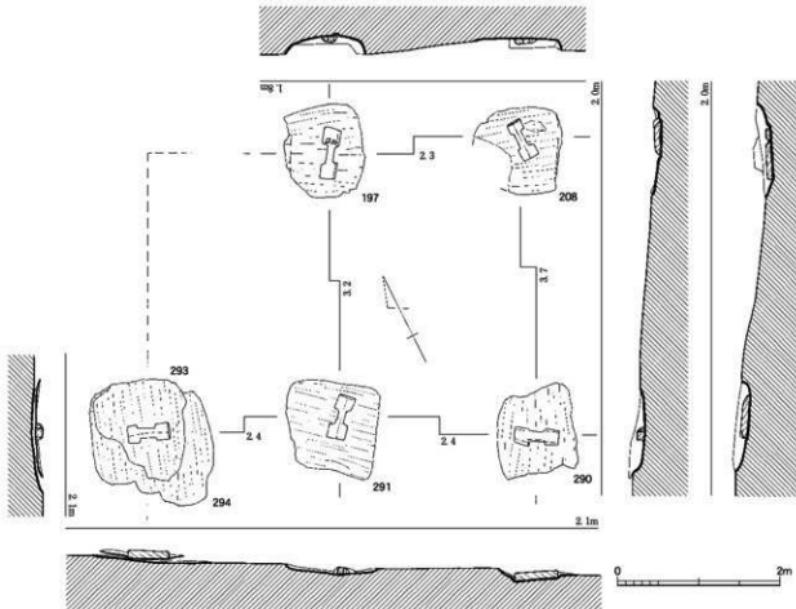
3.6m、桁行4.5mを測り、床面積は16.2m<sup>2</sup>程度となる。柱根の径は15~20cm程度である。柱穴の掘形は検出されなかったが、礎盤の形状から平面形は隅丸方形に近いと見られる。礎盤間で一定の指向性のある高低差はない。

#### 出土土器（第20図29~31）

29は壺の底部で、わずかに稜がありレンズ状に近いが、丸底の範疇に入ると考えられる。30は在地系甕の口縁部から胴部にかけてで、口唇部にはキザミが施される。31は器台の上半部で、透孔が一部残存する。

#### 42号掘立柱建物跡（第36図）

III区北側中央部に位置し、2×1間の建物である。礎盤197・208・290・291・(293・294)からなり、北西隅の礎盤を検出することはできなかったが、検出した横木の大きさ・形状の類似性や、概ね桁・梁方向と共に通する埋置軸から、これらの組み合わせによるこの建物の確実性は非常に高い。42・44号建物を切り、41号建物に切られる。礎盤293・294は重複した位置で検出されており、同一の柱穴に伴うものと考えられる。桁行3.45m、桁行4.8mを測り、床面積は16.6m<sup>2</sup>程度となる。礎盤197の横木は上面に穿孔を施し、本遺跡内では他に例のない稀有なものである。柱穴の



第36図 III区 42号掘立柱建物跡実測図 (1/60)

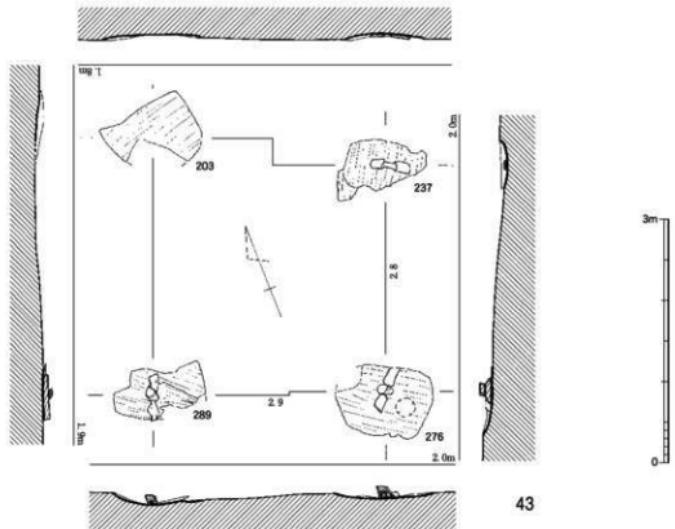
掘形は検出されなかったが、礎盤の形状から平面形は隅丸方形に近いと考えられる。礎盤間で北東方向へ低くなる傾向が見られる。図示できる土器は出土していない。

#### 43号掘立柱建物跡（第37図）

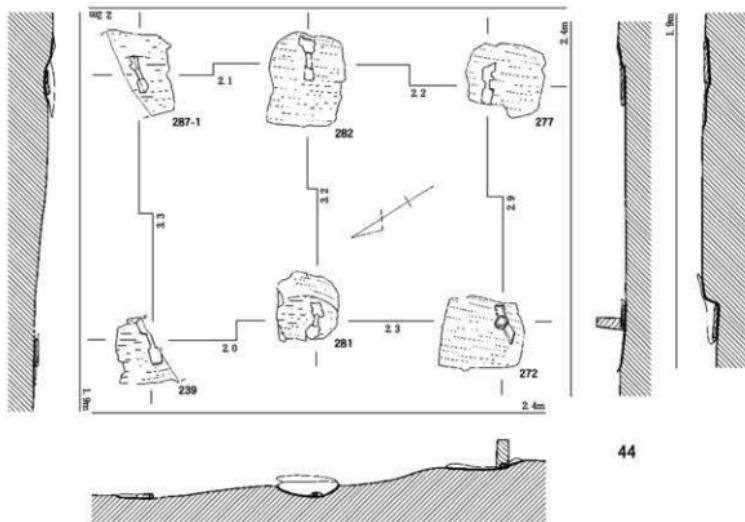
III区北側中央部に位置し、1×1間の建物である。礎盤203・237・276・289からなり、礎盤203では他の礎盤に切られるため横木が検出されなかったが、検出された横木の大きさ・形状の類似性や、概ね梁・桁方向と共通する埋置軸から、これらの組み合わせによるこの建物の確実性は高いと考えられる。また、南側の柱盤276・289では径10~15cmの柱根が残存する。42・44号建物を切り、41号建物に切られる先後関係が認められる。梁行2.8m、桁行2.9mを測り、床面積は8.1m<sup>2</sup>程度となる。柱穴の掘形は検出されなかったが、礎盤の形状から平面形は隅丸方形に近いと考えられる。礎盤間でわずかに北方向へ低くなる傾向が見られる。図示できる土器は出土していない。

#### 44号掘立柱建物跡（第37図）

III区北側中央部に位置し、2×1間の建物である。礎盤239・272・277・281・282・287-1からなり、礎盤239・287は一部欠損した形で検出したが、他の礎盤も含め横木の大きさ・形状は概ね

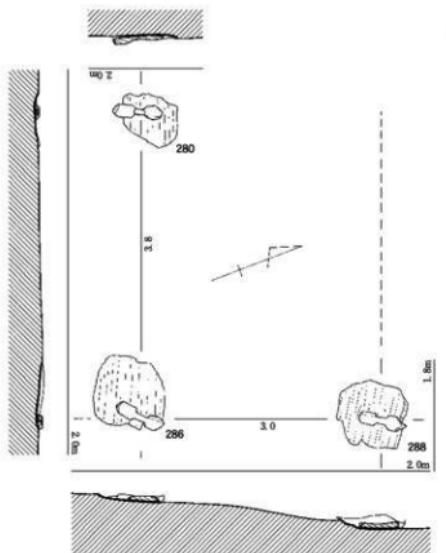


43



44

第37図 III区 43・44号掘立柱建物跡実測図 (1/60)

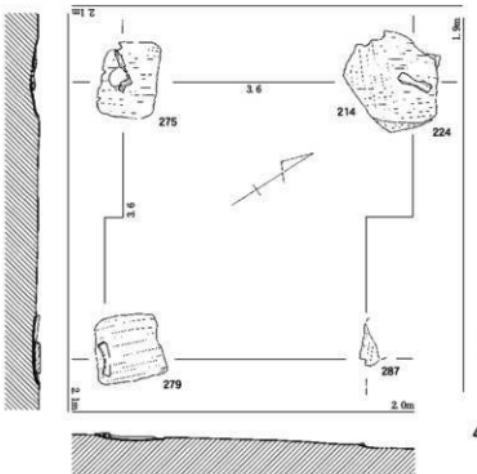


45

類似し、埋置軸も概ね共通することから、これらの組み合わせによるこの建物の確実性は高い。ただ、西側の桁方向の列で基礎盤239はやや外側へ離れた位置にある点は不安を感じる要素である。基礎盤272では径15cm程度の柱根が残存する。43号建物に切られる。梁行3.13m、桁行4.3mを測り、床面積は13.3m<sup>2</sup>程度となる。柱穴の掘形は検出されなかったが、基礎盤の形状から平面形は隅丸方形に近いと考えられる。基礎盤間でわずかに北方向へ低くなる傾向が見られる。

#### 出土土器（第20図32）

32は鉢の口縁部付近で、素口縁である。



46

#### 45号掘立柱建物跡（第38図）

Ⅲ区北側中央部に位置し、1×1間の建物である。基礎盤280・286・288からなり、北西側の基礎盤を検出することはできなかったが、検出した横木の大きさ、形状の類似性や埋置軸の共通性から、これらの組み合わせによるこの建物の確実性は高い。46号建物に切られる。梁行3.0m、桁行3.8mを測り、床面積は11.4m<sup>2</sup>程度となる。柱穴の掘形は検出されなかったが、基礎盤の形状から平面形は隅丸方形に近

第38図 Ⅲ区45・46号掘立柱建物跡実測図(1/60)

いと考えられる。礎盤間でわずかに北方向へ低くなる傾向が見られる。

#### 出土土器（第44図1）

1は在地系壺の口縁部で、口唇部にはキザミを施す。

#### 46号掘立柱建物跡（第38図）

Ⅲ区北側中央部に位置し、 $1 \times 1$ 間の建物である。礎盤(214・224)・275・279・287-2からなり、北東側の礎盤287はほとんど消失した状態でしか検出できず、礎盤275も一部欠損するが、検出した横木の大きさ・形状の類似性からこれらの組み合わせによるこの建物の確実性は高い。礎盤214・224は重複した位置で検出されており、同一の柱穴に伴うものと考えられる。38・42・44・45号建物を切る。梁行・桁行ともに3.6mを測り、床面積は13.0m<sup>2</sup>程度となる。柱穴の掘形は検出されなかつたが、礎盤の形状から平面形は隅丸方形に近いと考えられる。礎盤間でわずかに北方向へ低くなる傾向が見られる。

#### 出土土器（第44図2）

2は鉢の口縁部で、素口縁で端部を上方へつまみ上げたような形状である。

#### 47号掘立柱建物跡（第39図）

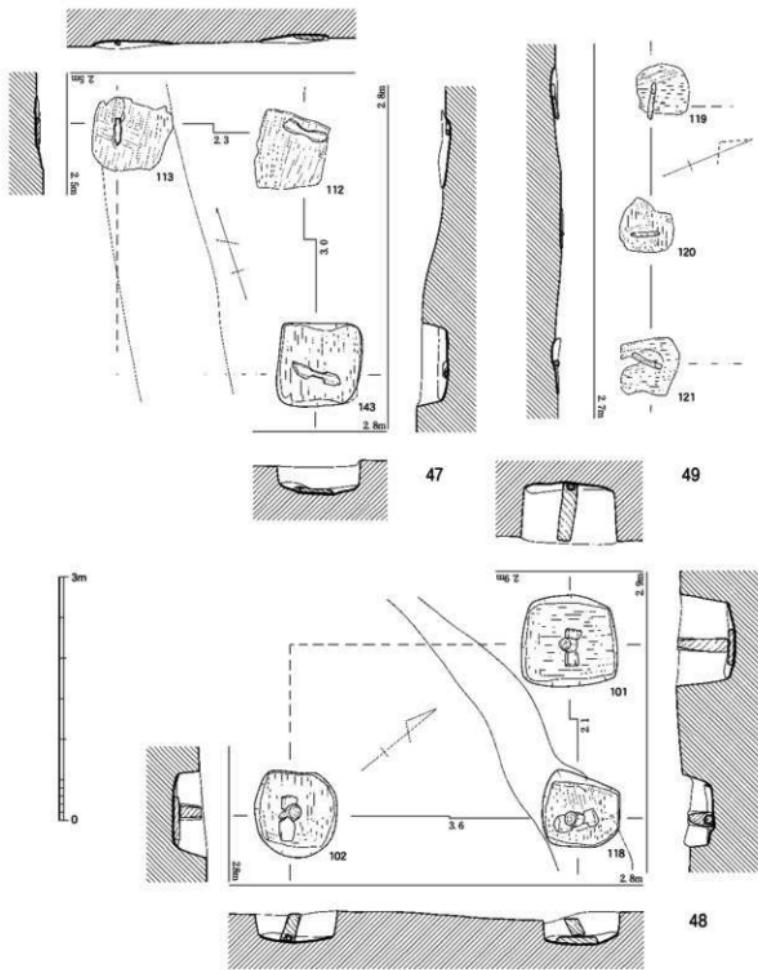
Ⅲ区中央よりやや北側の西端に位置し、 $1 \times 1$ 間の建物である。礎盤112・113・143からなり、南西側の礎盤は調査区外にあたるため検出できなかった。検出した横木の大きさ・形状の類似性や埋置軸の共通性から、これらの組み合わせによるこの建物の確実性は高い。ただ、調査区外の方向へ建物の規模が拡大する可能性もある。1号溝に切られる。梁行2.3m、桁行3.0mを測り、床面積は6.9m<sup>2</sup>程度となる。検出した柱穴の平面形は隅丸方形で、礎盤のみ検出したものでもその形状から同様に考えられる。礎盤間で一定の方向性のある高低差はない。図示できる土器は出土していない。

#### 48号掘立柱建物跡（第39図）

Ⅲ区北西隅に位置し、礎盤101・102・118からなり、南西側の礎盤は調査区外にあたるため検出できなかった。横木の大きさ・形状の類似性や埋置軸の桁・梁方向との共通性が認められ、またいずれの柱穴からも径15cm程度の柱根が検出された点もあり、これらの組み合わせによるこの建物の確実性は非常に高いと考えられる。ただ、現状では $1 \times 1$ 間であるが、桁長・梁長の差が大きく、調査区外の方向へ建物の規模が拡大して、実際には $2 \times 1$ 間となる可能性が高いと考えられる。3号溝に切られる。検出した範囲内の規模では、梁行2.1m、桁行3.6mを測り、床面積は7.6m<sup>2</sup>程度となる。検出した柱穴の平面形は隅丸方形である。礎盤間で一定の方向性のある高低差は確認できない。

#### 出土土器（第44図3～11）

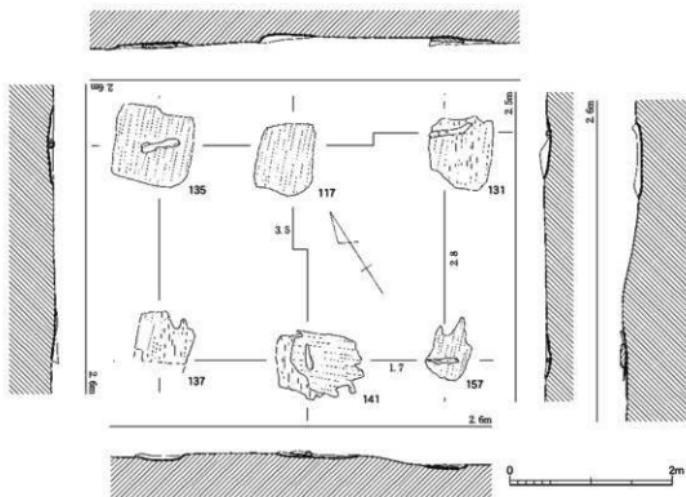
3は、口縁部が外反して強く開く広口壺の口縁部で、口唇部にはキザミが施される。4は、短い口縁部がやや外側の上方へ延びる短頸壺である。5・6はやや小型の在地系壺で、短い口縁部がやや外側の上方へ延びる。7・8は在地系壺の口縁部で、7の口唇部にはキザミが施される。9は素口縁の鉢である。10は鉢の脚部と考えられる。11は鉢状のミニチュア土器である。



第39図 III区 47～49号掘立柱建物跡実測図 (1/60)

#### 49号掘立柱建物跡 (第39図)

III区北西隅に位置し、礎盤119・120・121からなり、これらは南側の桁の列に当たると考えられ、北側の列の範囲までは掘削して確認することができなかったが、対応する礎盤が所在すると想定され、 $2 \times 1$ 間の建物となると考えられる。横木の大きさ・形状の類似性や埋置軸桁・梁方向との共通性から、この建物の確実性は高いと考えられる。桁行3.2mを測る。検出した柱穴の平



第40図 III区50号掘立柱建物跡実測図(1/60)

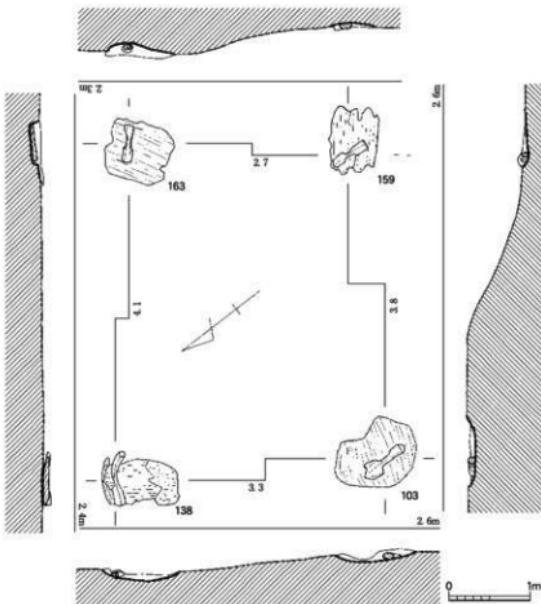
面形は隅丸方形で、礎盤のみ検出した場合でも、その残存する形状から同様に考えられる。柱穴の掘形は検出されなかったが、礎盤の形状から平面形は隅丸方形に近いと考えられる。礎盤間で一定の方向性のある高低差は確認できない。

#### 出土土器（第44図12）

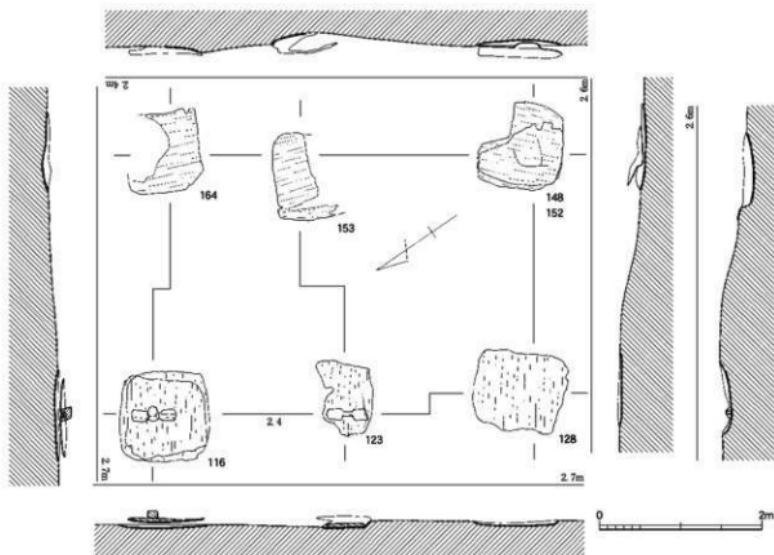
12は欠損した焼粘土塊で、全体形は不明。

#### 50号掘立柱建物跡（第40図）

III区北西隅に位置し、 $2 \times 1$ 間の建物である。礎盤131・135・137・141・157・177からなるが、欠

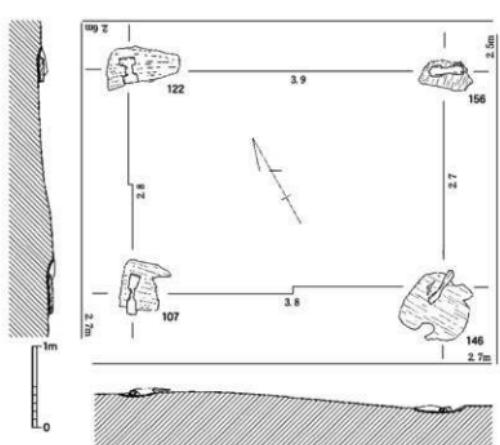


第41図 III区51号掘立柱建物跡実測図(1/60)



第42図 III区52号掘立柱建物跡実測図(1/60)

損して検出したり、横木が検出できなかったりと残存状態が良好でない礎盤が含まれるため、これらの組み合わせによるこの建物の確実性には不安がある。梁行2.8m、桁行3.5mを測り、床面積は9.8m<sup>2</sup>程度となる。柱穴の掘形は検出されなかつたが、礎盤の形状から平面形は隅丸方形に近いと考えられる。礎盤間でわずかに東方向へ低くなる傾向が見られる。図示できる土器は出土していない。



第43図 III区53号掘立柱建物跡実測図(1/60)

#### 51号掘立柱建物跡（第41図）

Ⅲ区北西隅に位置し、 $1 \times 1$ 間の建物である。礎盤103・138・159・163からなり、横木の形状の類似性や埋置軸の共通性が乏しく、これらの組み合わせによるこの建物の確実性には不安がある。52号建物を切る。梁行3.0m、桁行3.95mを測り、床面積は11.9m<sup>2</sup>程度となる。柱穴の掘形は検出されなかったが、礎盤の形状から平面形は隅丸方形に近いと考えられる。礎盤間で南方へ低くなる傾向が見られる。図示できる土器は出土していない。

#### 52号掘立柱建物跡（第42図）

Ⅲ区北側西端部に位置し、 $2 \times 1$ 間の建物である。礎盤(116、136)・123・128・(148・152)・153・164からなり、ほとんどが他の建物の礎盤に切られ欠損する上、礎盤が残存するのは2基のみであるため、これらの組み合わせによるこの建物の確実性には不安がある。礎盤116・136および礎盤148・152は重複した位置で検出されており、それぞれ同一の柱穴に伴うものと考えられる。礎盤116では径15cm程度の柱根がわずかに残存する。51・54号建物に切られる。横木がほとんど残存しないため概算であるが、梁行約3.2m程度、桁行約4.7m程度で床面積は約15.0m<sup>2</sup>程度となる。柱穴の掘形は検出されなかったが、礎盤の形状から平面形は隅丸方形に近いと考えられる。礎盤間でわずかに東方向へ低くなる傾向が見られる。

#### 出土土器（第44図13～15）

13は焼粘土塊で、角錐状の形態で高さ3.2cmである。14・15は壺の底部である。14はほぼ平底、15はレンズ状で、ともに56号掘立柱建物跡出土の可能性もある。

#### 53号掘立柱建物跡（第43図）

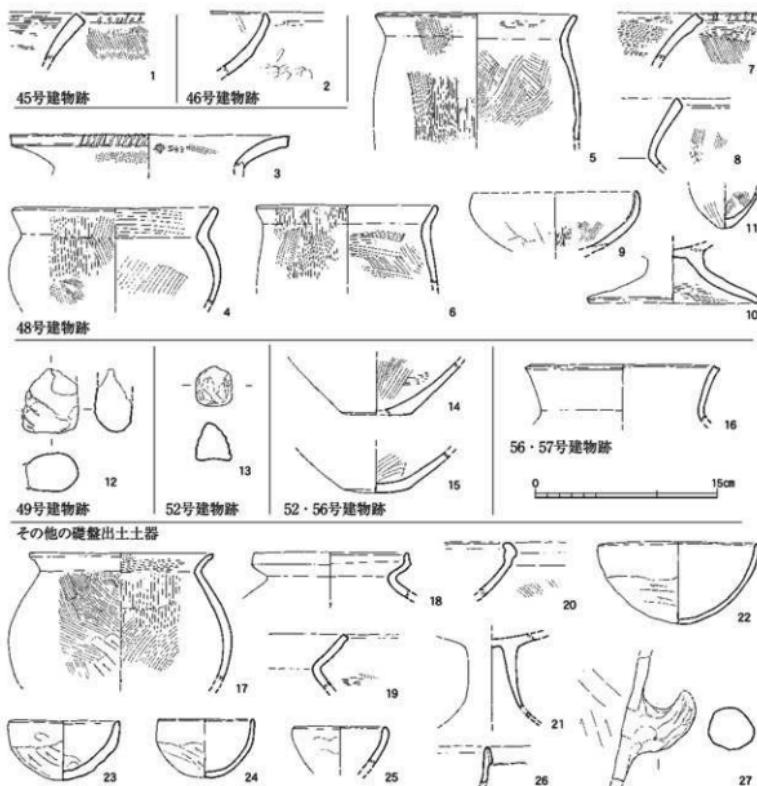
Ⅲ区北側西端部に位置し、 $1 \times 1$ 間の建物である。礎盤107・122・146・156からなり、横木の埋置軸は桁・梁方向と概ね一致するが、横木の形状にはあまり類似性が認められず、これらの組み合わせによるこの建物の確実性には不安がある。52・56・57号建物を切る。梁行2.75m、桁行3.85mを測り、床面積は10.6m<sup>2</sup>程度となる。柱穴の掘形は検出されず、礎盤の残存状態は良好ではないが、その形状から平面形は隅丸方形に近いと考えられる。礎盤間でわずかに東方向へ低くなる傾向が見られる。図示できる土器は出土していない。

#### 54号掘立柱建物跡（第45図）

Ⅲ区北側西端部に位置し、 $2 \times 1$ 間の建物である。礎盤104・111・134・144・150・155からなり、横木の形状の類似性や埋置軸の共通性があまり認められず、梁・桁それぞれで柱間距離のばらつきが大きく、これらの組み合わせによるこの建物の確実性には不安がある。52号建物を切り、51号建物に切られる。梁行2.75m、桁行4.2mを測り、床面積は11.6m<sup>2</sup>程度となる。柱穴の掘形は検出されず、礎盤の形状から平面形は隅丸方形に近いと考えられる。礎盤間でわずかに東方向へ低くなる傾向が見られる。図示できる土器は出土していない。

#### 55号掘立柱建物跡（第46図）

Ⅲ区北側西端部に位置し、 $1 \times 1$ 間の建物である。礎盤139・140・158・162からなり、横木の大

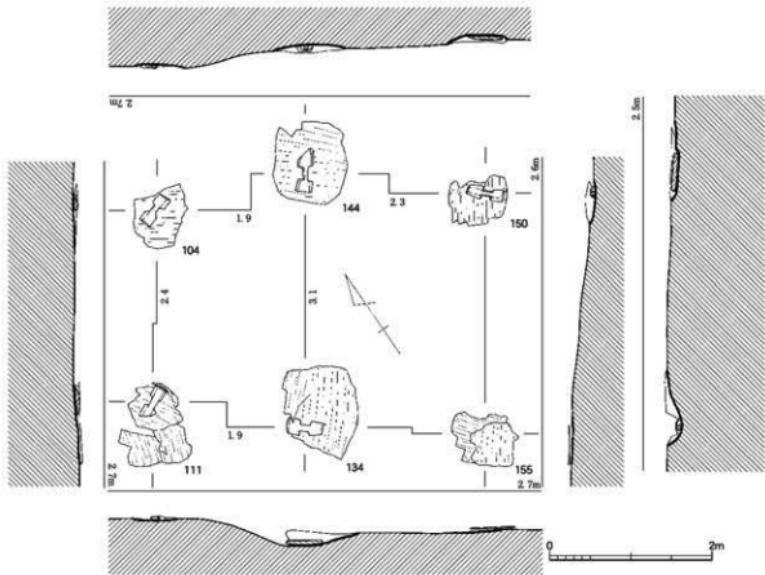


第44図 III区 45・46・48・49・52・56・57号掘立柱建物跡および他の礎盤出土土器実測図 (1/4)

大きさ・形状の類似性は認められ、埋置軸の共通性には欠ける部分があるが、これらの組み合わせによるこの建物の確実性はある程度高いと考える。礎盤158では径10~15cm程度の柱根が残存する。56号建物を切る。梁行2.55m、桁行3.55mを測り、床面積は9.1m<sup>2</sup>程度となる。柱穴の掘形は検出されず、礎盤の形状から平面形は隅九方形に近いと考えられる。礎盤間でわずかに東方向へ低くなる傾向が見られる。図示できる土器は出土していない。

#### 56号掘立柱建物跡（第47図）

III区北側西端部に位置し、2×1間の建物である。礎盤109・115・127・133・151・160からなり、他の礎盤に切られる等して欠損し、横木も欠失するものもあるが、残存する横木にはやや不整形のものが揃う傾向にあり、これらの組み合わせによるこの建物の確実性はある程度高いと考える。

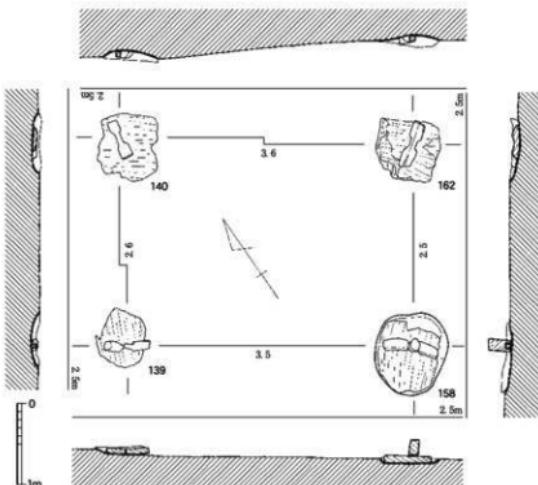


第45図 III区 54号掘立柱建物跡実測図 (1/60)

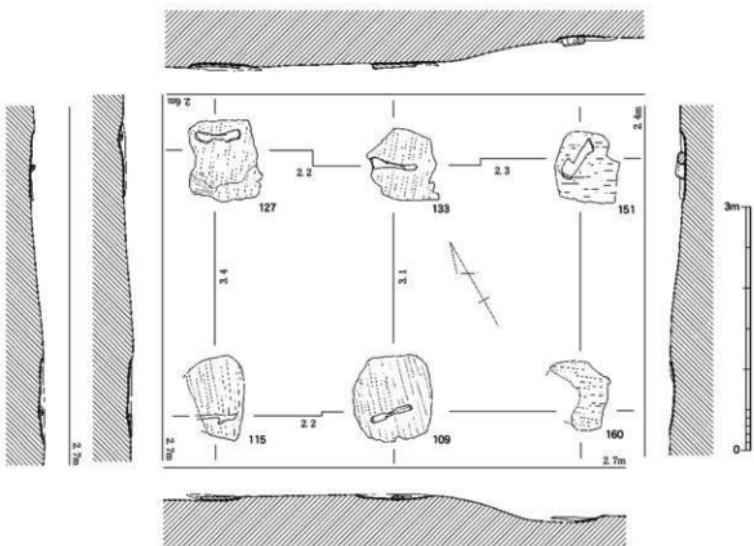
53・55・57号建物に切られる。梁行3.25m、桁行4.5mを測り、床面積は14.6m<sup>2</sup>程度となる。柱穴の掘形は検出されず、礎盤の形状から平面形は隅丸方形に近いと考えられる。礎盤間でわずかに東方向へ低くなる傾向が見られる。

#### 出土土器(第44図14~16)

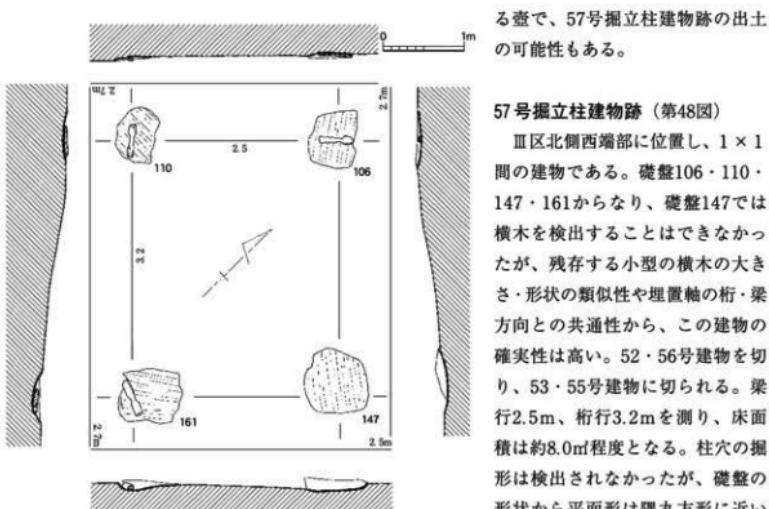
14・15は壺の底部である。14はほぼ平底、15はレンズ状で、とともに56号掘立柱建物跡出土の可能性もある。16は、口縁部がやや外側の上方へ延び



第46図 III区 55号掘立柱建物跡実測図 (1/60)



第47図 III区56号掘立柱建物跡実測図 (1/60)



第48図 III区57号掘立柱建物跡実測図 (1/60)

る壺で、57号掘立柱建物の出土の可能性もある。

#### 57号掘立柱建物跡（第48図）

III区北側西端部に位置し、 $1 \times 1$ 間の建物である。礎盤106・110・147・161からなり、礎盤147では横木を検出することはできなかつたが、残存する小型の横木の大きさ・形状の類似性や埋置軸の桁・梁方向との共通性から、この建物の確実性は高い。52・56号建物を切り、53・55号建物に切られる。梁行2.5m、桁行3.2mを測り、床面積は約8.0m<sup>2</sup>程度となる。柱穴の掘形は検出されなかつたが、礎盤の形状から平面形は隅丸方形に近いと考えられる。礎盤間でわずかに

表2 III区掘立柱建物跡一覧表

遺構名	構造番号	規模	所長	奥長	床面積	P119	P129	—	—	—	—	—	直角	横斜	
1号掘立柱建物跡	7	1×1間	4.0m	3.2m	12.8m <sup>2</sup>								○		
2号掘立柱建物跡	7	1×1間	(3.1)	3.2m	(9.9)m <sup>2</sup>								○		
3号掘立柱建物跡	8	1×1間	(3.1)	2.6m	(8.1)m <sup>2</sup>								○		
4号掘立柱建物跡	8	1×1間	(3.2)	2.3m	(7.4)m <sup>2</sup>								○		
5号掘立柱建物跡	9	1×1間	3.7m	3.2m	11.8m <sup>2</sup>								○		
6号掘立柱建物跡	10	1×1間	3.95m	3.5m	13.8m <sup>2</sup>	土塀31	土塀38						○	南	
7号掘立柱建物跡	11	2×1間	4.55m	3.3m	15.0m <sup>2</sup>								○	南東	
8号掘立柱建物跡	11	1×1間	3.5m	2.5m	8.8m <sup>2</sup>								○		
9号掘立柱建物跡	12	2×1間	4.55m	3.93m	17.7m <sup>2</sup>	土塀47							○	南東	
10号掘立柱建物跡	13	2×1間	4.2m	3.1m	13.0m <sup>2</sup>								○	南東	
11号掘立柱建物跡	14	2×1間	4.5m	3.85m	17.3m <sup>2</sup>	P130	—						○		
12号掘立柱建物跡	15	2×1間	4.3m	3.87m	16.6m <sup>2</sup>	選塀7	選塀15	選塀17	P81	P89	—		○		
13号掘立柱建物跡	16	1×1間	3.15m	2.45m	7.7m <sup>2</sup>	P77	P79	P87	P92				○	南西	
14号掘立柱建物跡	16	1×1間	3.1m	2.7m	8.4m <sup>2</sup>	P78	P80	P94	P97				△		
15号掘立柱建物跡	17	1×1間	(3.3)	(3.1)	(10.2)m <sup>2</sup>	P94	P95	P71	—				△		
16号掘立柱建物跡	18	2×1間	4.6m	3.5m	16.1m <sup>2</sup>	P37	P42	P45	P67	P177-1			○	南	
17号掘立柱建物跡	19	2×1間	4.25m	3.35m	14.2m <sup>2</sup>	P56	P66	P62	P65	P66	P177-2		○	南	
18号掘立柱建物跡	19	1×1間	3.4m	(2.8)m	(9.9)m <sup>2</sup>	P40	P68	—					○		
19号掘立柱建物跡	21	1×1間	3.85m	1.8m	7.1m <sup>2</sup>	中央壁2	中央壁3	中央壁3	中央壁7	中央壁10			○		
20号掘立柱建物跡	21	1×1間	4.8m	1.5m	7.4m <sup>2</sup>	中央壁5	中央壁7	中央壁15	—				△		
21号掘立柱建物跡	22	1×1間	4.0m	1.5m	6.0m <sup>2</sup>	中央壁6	中央壁12	—					○		
22号掘立柱建物跡	23	1×1間	(3.1)	(3.1)m	(9.6)m <sup>2</sup>	東壁壁10	東壁壁12	東壁壁14	東壁壁15	—			△		
23号掘立柱建物跡	23	1×1間	3.3m	2.8m	9.2m <sup>2</sup>	東壁壁10	東壁壁13	東壁壁14	東壁壁17	東壁壁20			○	北東	
24号掘立柱建物跡	24	1×1間	4.6m	3.5m	17.1m <sup>2</sup>	東壁壁2	—	—	—	—			○		
25号掘立柱建物跡	24	1×1間	2.8m	1.6m	4.5m <sup>2</sup>	東壁壁2	東壁壁5	—	—	—			○		
26号掘立柱建物跡	25	2×1間	5.0m	3.3m	16.5m <sup>2</sup>	選塀3	選塀11	選塀16	選塀18	選塀19	—		○	北東	
27号掘立柱建物跡	26	2×1間	3.8m	3.4m	12.9m <sup>2</sup>	選塀7	選塀14	選塀15	—	—			○	北東	
28号掘立柱建物跡	26	2×1間	4.45m	2.75m	12.2m <sup>2</sup>	選塀2	選塀6	選塀8	選塀12	選塀13			○	北東	
29号掘立柱建物跡	27	1×1間	4.5m	3.4m	15.3m <sup>2</sup>	選塀21	選塀23	選塀24	選塀26	選塀28			○	西北	
30号掘立柱建物跡	27	2×1間	4.3m	3.35m	14.6m <sup>2</sup>	選塀26	選塀27	選塀28	選塀29	選塀270	選塀278		○	西北	
31号掘立柱建物跡	28	1×1間	3.9m	3.6m	14.0m <sup>2</sup>	選塀14	選塀15	選塀16	選塀17	選塀18	—		○	南	
32号掘立柱建物跡	28	1×1間	3.5m	3.0m	10.8m <sup>2</sup>	選塀165	選塀169	選塀180	選塀183-1	—			○	南	
33号掘立柱建物跡	29	1×1間	3.35m	2.05m	6.9m <sup>2</sup>	選塀167	選塀163-2	選塀190	選塀199	—			○	南	
34号掘立柱建物跡	29	1×1間	(3.0)	3.2m	(12.5)m <sup>2</sup>	選塀168	選塀178	選塀188-191	選塀210	—			△	南	
35号掘立柱建物跡	30	2×1間	4.6m	3.93m	16.2m <sup>2</sup>	選塀169	選塀174	選塀194	選塀215	選塀220	選塀223		○	南	
36号掘立柱建物跡	31	1×1間	3.9m	2.8m	11.3m <sup>2</sup>	選塀172	選塀221	選塀229	—				○	南東	
37号掘立柱建物跡	31	1×1間	2.7m	2.4m	6.5m <sup>2</sup>	選塀178	選塀186	選塀193	選塀217	—			○	南東	
38号掘立柱建物跡	32	2×1間	5.2m	3.7m	19.2m <sup>2</sup>	選塀192	選塀193	選塀201	選塀226	選塀235	選塀238		○	東	
39号掘立柱建物跡	33	1×1間	2.8m	2.0m	5.6m <sup>2</sup>	選塀209	選塀225	選塀242	選塀243	—			△	北東	
40号掘立柱建物跡	34	2×1間	4.8m	2.8m	13.4m <sup>2</sup>	選塀243	選塀250	選塀252	選塀257	選塀259	選塀261		○		
41号掘立柱建物跡	35	2×1間	4.5m	3.6m	16.2m <sup>2</sup>	選塀206	選塀211	選塀246	選塀256	選塀285	—		○		
42号掘立柱建物跡	36	2×1間	4.8m	3.45m	16.6m <sup>2</sup>	選塀197	選塀208	選塀290	選塀291	選塀293-294			○	北東	
43号掘立柱建物跡	37	1×1間	2.9m	2.8m	8.1m <sup>2</sup>	選塀203	選塀227	選塀276	選塀289	—			○	北	
44号掘立柱建物跡	37	2×1間	4.3m	3.15m	13.3m <sup>2</sup>	選塀272	選塀277	選塀281	選塀282	選塀287-1	—		○	北	
45号掘立柱建物跡	38	1×1間	3.8m	3.0m	11.4m <sup>2</sup>	選塀260	選塀266	選塀268	—				○	北	
46号掘立柱建物跡	38	1×1間	3.8m	3.6m	13.0m <sup>2</sup>	選塀214	選塀275	選塀279	選塀282-2	—			○	北	
47号掘立柱建物跡	39	1×1間	3.0m	2.3m	6.9m <sup>2</sup>	選塀112	選塀113	選塀143	—				○		
48号掘立柱建物跡	39	17	1×1間	(3.6)	(2.1)m	(7.6)m <sup>2</sup>	選塀102	選塀118	—					○	
49号掘立柱建物跡	39	27	1×1間	3.2m	—	m <sup>2</sup>	選塀119	選塀120	選塀121	—			○		
50号掘立柱建物跡	40	2×1間	3.5m	2.8m	9.8m <sup>2</sup>	選塀131	選塀135	選塀137	選塀141	選塀157	選塀177		△	東	
51号掘立柱建物跡	41	1×1間	3.95m	3.0m	11.9m <sup>2</sup>	選塀103	選塀138	選塀159	選塀163	—			△	南	
52号掘立柱建物跡	42	2×1間	(4.7)m	(3.2)m	(19.0)m <sup>2</sup>	選塀192	選塀193	選塀198	選塀199	選塀164	—		○	東	
53号掘立柱建物跡	43	1×1間	3.8m	2.75m	10.6m <sup>2</sup>	選塀107	選塀122	選塀146	選塀156	—			△	東	
54号掘立柱建物跡	45	2×1間	4.2m	2.75m	11.6m <sup>2</sup>	選塀104	選塀114	選塀134	選塀144	選塀150	選塀155		○	東	
55号掘立柱建物跡	46	1×1間	3.55m	2.95m	9.1m <sup>2</sup>	選塀138	選塀140	選塀158	—				○		
56号掘立柱建物跡	47	2×1間	4.5m	3.25m	14.6m <sup>2</sup>	選塀109	選塀115	選塀127	選塀133	選塀151	選塀160		○	東	
57号掘立柱建物跡	48	1×1間	3.2m	2.5m	8.0m <sup>2</sup>	選塀106	選塀110	選塀147	選塀161	—			○	東	

東方向へ低くなる傾向が見られる。

## 出土土器（第44図16）

16は、口縁部がやや外側の上方へ延びる壺で、55号掘立柱建物跡の出土の可能性もある。

## その他の礎盤出土の土器（図版40、第44図17～27）

III区の礎盤について、他の複数の礎盤との組み合わせが確認できず、掘立柱建物跡として認識することができなかつたものから出土した土器について以下で触れる。

17は非常に短い口縁部が外反する壺である。18は口縁部が中途で上方へ屈曲する壺の口頭部で、

瀬戸内系と考えられる。19は布留系壺の口頸部である。20は口縁端部が上方へ屈曲するとともに、肥厚する高杯である。21は高杯の脚部および杯部の一部である。22は素口縁の鉢である。23~25は、いずれも素口縁の小型の鉢である。26は鉢の口縁部と考えられ、素口縁で外面の端部付近は2cm程度の幅で肥厚する。27は牛角状の把手が付く土器器の胴部である。

### (3) 土坑

Ⅲ区では遺構の検出を行う中で、土坑については86号までの遺構番号を付与して確認を行っていった。ただ、南側への拡張前のⅢb区南端部で検出した31・36・47号土坑は、掘削の結果礎盤を伴う柱穴と判明し、拡張した範囲で検出された他の柱穴と組み合って掘立柱建物跡を構成すると確認したため、欠番として扱った。

北側のⅢa区内で検出した土坑は10基と分布は希薄であり、その範囲は東半のみで、特に北東隅付近に集中する。Ⅲb区では土坑はほぼ全域に亘って分布する。完形に近いものを含め、多量の出土土器の伴う土坑が複数認められる。

#### 1号土坑（図版7、第49図）

Ⅲ区北東隅で、2号土坑の西側且つ8号土坑の東側に位置する土坑である。平面形は長軸95cm×短軸79cmの楕円形で、深さ34cmである。埋土は上層が暗灰褐色を呈し、下層は地山に近似する淡黄灰褐色のものが主体である。底面よりわずかに上層の一定程度の範囲において樹皮の敷設が認められるため、掘立柱建物跡の柱穴である可能性もある。しかし、横木は確認されず、上層の埋土は、主として地山と区分し難い建物跡の柱穴埋土と異なり、明瞭に検出することができたため、本遺構が柱穴である可能性は低いと考えられる。図示できる土器は出土していない。

#### 2号土坑（図版7、第49図）

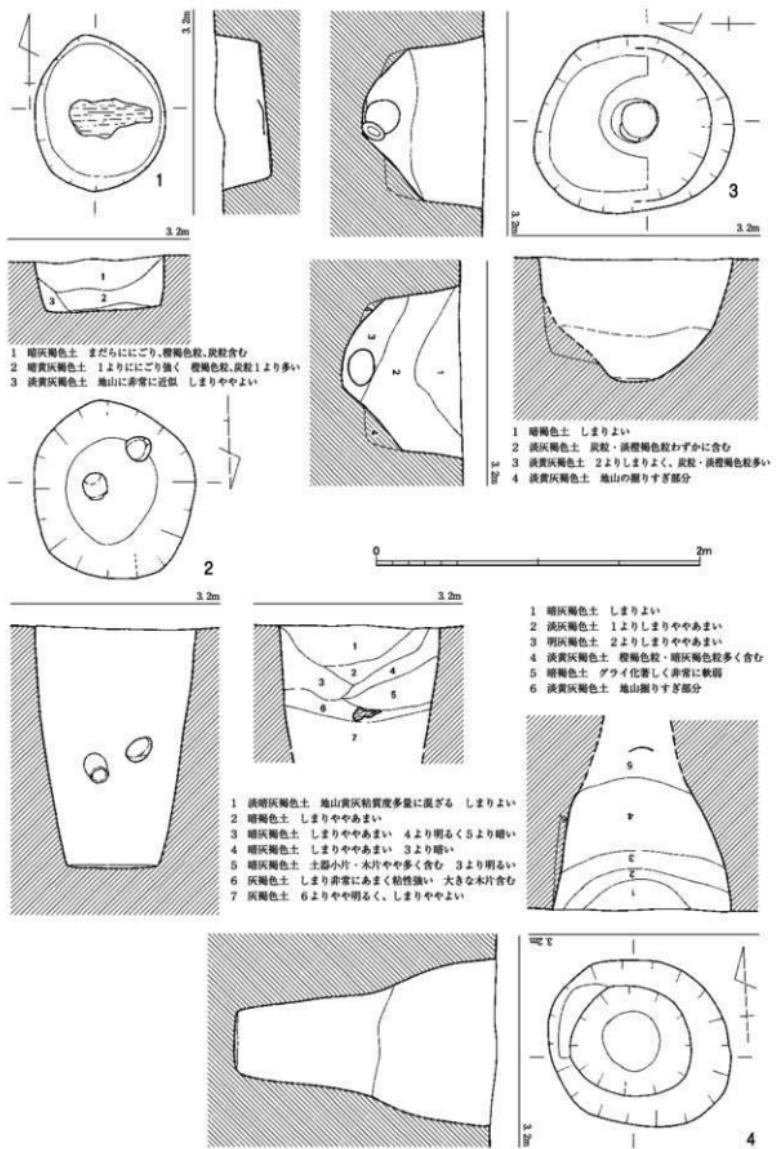
Ⅲ区北東隅で、1号土坑の東側且つ3号土坑の北西側に位置する土坑である。平面形は長軸109cm×短軸98cmの楕円形である。壁の立ち上がりは非常に急な傾斜で、深さ147cmとなる。埋土はレンズ状の堆積を為し、深さ60cm程度までは暗灰褐色土主体で、以下では深さ80cmまで粘性の強い灰褐色土主体であるが、遺構の規模が狭小なため、それより下層では詳細な土層の観察を行うことはできなかった。深さ70~90cm程度の底面まで中位の位置から完形の土器およびやや大きめの礫が出土した。

#### 出土土器（図版40、第50図1）

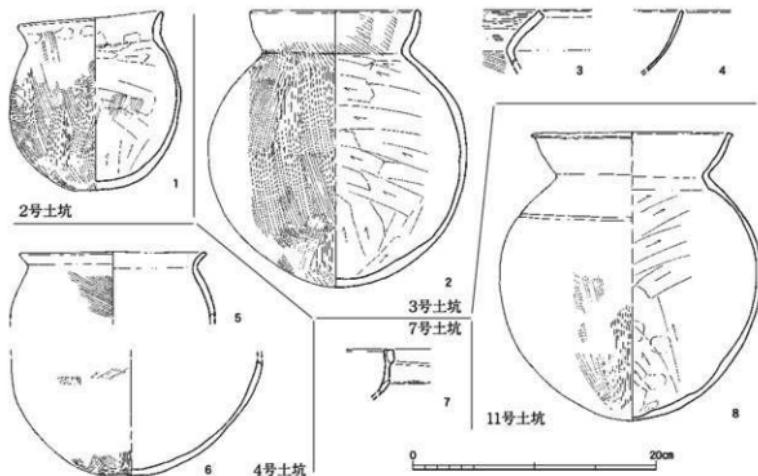
1は土器器の小型壺である。頸基部のくびれは弱く、短い口縁部はわずかに開く。胴部の調整は、外面でハケ、内面でケズリである。

#### 3号土坑（図版7、第49図）

Ⅲ区北東隅で、2号土坑の南東側に位置する土坑である。平面形は径118cm程度のやや不整の円形である。上半部の壁の立ち上がりは急な傾斜であるが、下半部は緩やかな傾斜となって落ち込み、深さ75cmで底面は狭くなっている。ただ、北半の下半部は実際の掘形よりも掘り過ぎてしまった。埋土はレンズ状に堆積する3層からなり、上層はしまりのよい暗褐色土で、最下層は地山に



第49図 III区1~4号土坑実測図 (1/30)



第50図 III区2~4・7・11号土坑出土土器実測図(1/4)

近似する淡黄灰褐色土である。底面直上からは完形の土器が出土した。

#### 出土土器 (図版40、第50図2~4)

2は完形の布留系壺である。口縁部は、内湾気味に上方へ延びる。器表の摩滅がやや目立つが、煤が外面の底部から口縁部にかけて付着していたと見られる。3は在地系壺の口頸部である。4は素口縁の鉢である。

#### 4号土坑 (図版8、第51図)

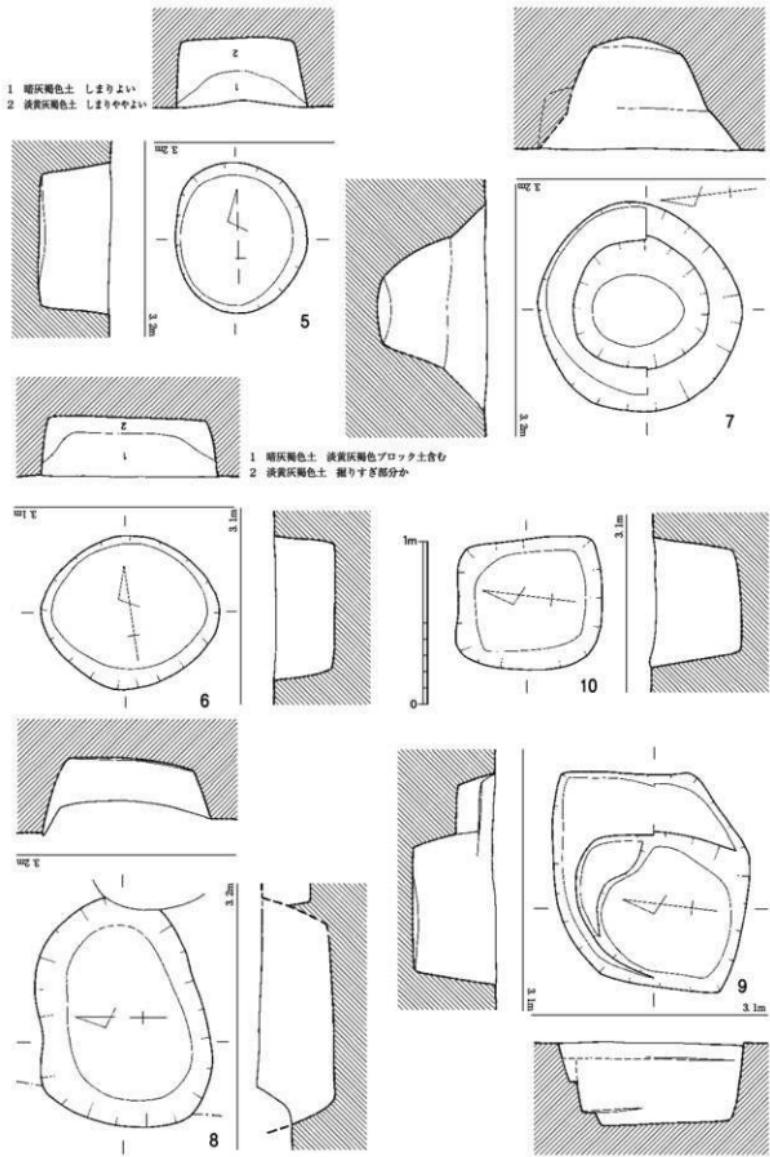
III区北東隅に位置する土坑である。平面形は径111cm程度の円形で、深さは160cmである。壁の立ち上がりは全体的に急で、中位でやや傾斜が変化する。埋土はレンズ状の堆積をなし、深さ35cm程度までの上層は、明るさの相違で分層されるが、灰褐色主体の認識しやすいものである。その直下で厚さ45cm程度の地山と非常に近似した淡黄灰褐色土層が見られ、深さ80cmより下位はグライ化し、内部は狭小であるため105cm程度より下位は詳細な土層の観察を行うことはできなかった。西側の中位では一部掘り過ぎによりテラス状の部分が生じている。

#### 出土土器 (第50図5・6)

5は、短い口縁部がやや外側の上方へ開く短頸壺である。6は壺の胴下半部と考えられ、外面には煤が、内面には炭化物が密に付着する。

#### 5号土坑 (図版8、第51図)

III区北東部に位置する土坑である。平面形は長軸92cm×短軸80cmの楕円形で、深さ45cmである。上層は暗灰褐色土で、下層は淡黄灰褐色土であるが地山との相違が明確ではなく、掘り過ぎ



第51図 III区 5~10号土坑実測図 (1/30)

た部分である可能性がある。図示できる土器は出土していない。

#### 6号土坑（図版8、第51図）

Ⅲ区北側中央部付近に位置する土坑である。平面形は長軸108cm×短軸94cmの楕円形で、深さ45cmである。上層は暗灰褐色土で、下層は淡黄灰褐色土であるが地山との相違が明確ではなく、掘り過ぎた部分である可能性がある。図示できる土器は出土していない。

#### 7号土坑（図版9、第51図）

Ⅲ区北端部付近に位置する土坑である。平面形は径125cm程度の円形に近く、深さは66cmである。上半は壁の傾斜がやや緩やかで、中位から転換して下半の落ち込む傾斜はやや強くなる。埋土は暗灰褐色の1層のみの堆積である。北半の上部は掘り過ぎによってテラス状の部分が生じている。

#### 出土土器（第50図7）

7は土師質土器の口縁部付近で、煤が付着し土鍋と考えられる。口縁部は屈曲して上方へ延び、端部外面は肥厚する。

#### 8号土坑（図版9、第51図）

Ⅲ区北東隅付近に位置する土坑で、東側が1号土坑に切られる先後関係で接する。平面形は長軸140cm×短軸105cmの不整楕円形で、深さ48cmである。埋土は暗褐色主体である。図示できる土器は出土していない。

#### 9号土坑（図版9、第51図）

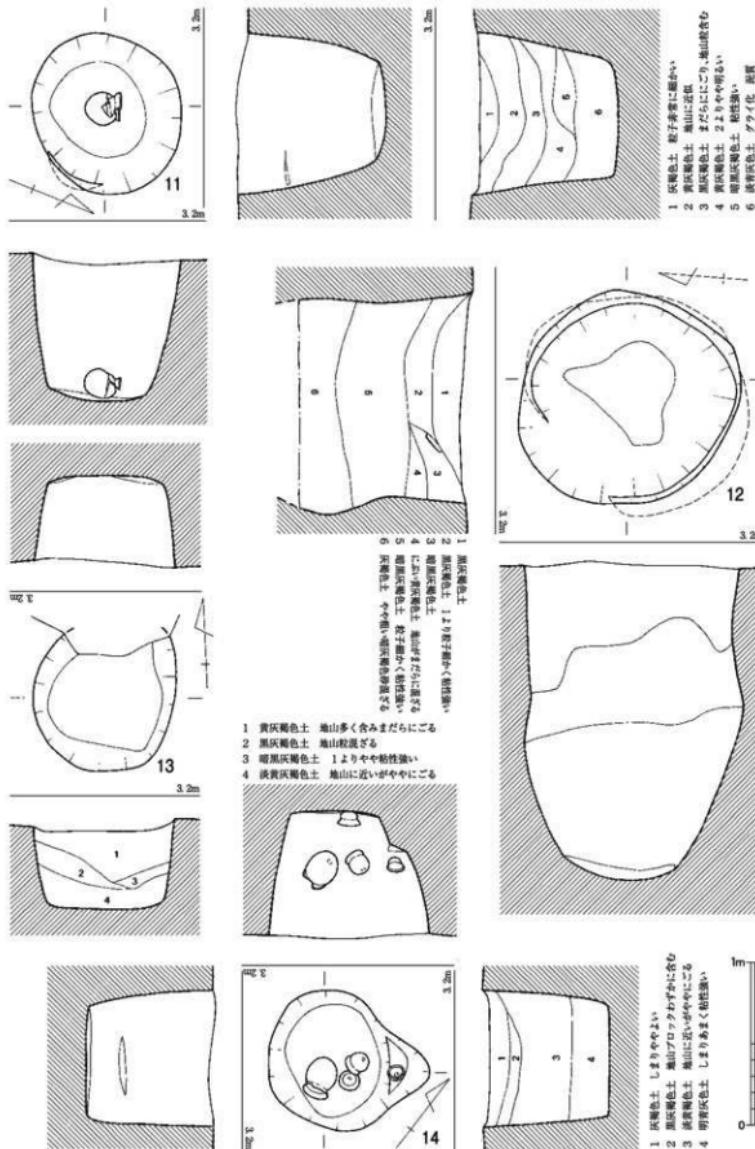
Ⅲ区中央部より北東寄りで、10号土坑の北側に位置する土坑である。長軸137cm×短軸118cmの不整な五角形状の平面形で、深さ50cmである。北側から東側にかけて2段のテラス部が認められるが、上段の北側は半裁時に15cm程度掘り過ぎている。埋土はしまりのよい灰褐色土の1層のみからなる。図示できる土器は出土していない。

#### 10号土坑（図版10、第51図）

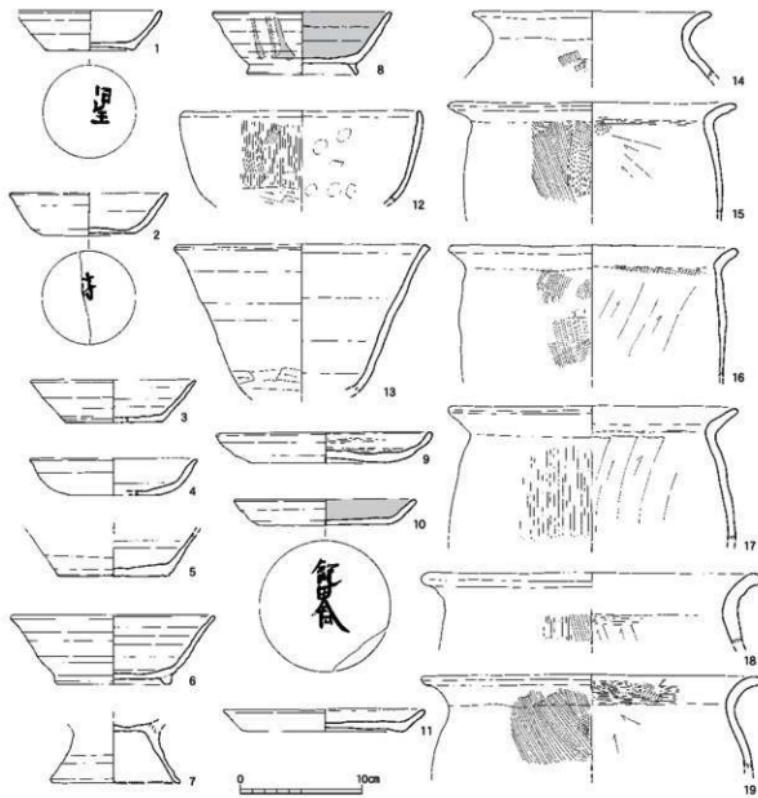
Ⅲ区中央部より北東寄りで、9号土坑の南側に位置する土坑である。長軸89cm×短軸82cmの隅丸方形の平面形で、深さ52cmである。埋土はしまりのよい灰褐色土の1層のみからなる。図示できる土器は出土していない。

#### 11号土坑（図版10、第52図）

Ⅲ区南西部に位置する土坑である。平面形は径90～100cm程度の円形で、深さは90cm程度である。壁の立ち上がりは急で、西側の深さ30cm程度でオーバーハングしてテラス状となる部分が認められる。底面のはば直上から完形に近い変形土器が出土した。埋土は灰褐色土、地山に近似する黄灰褐色土、黒灰褐色土が互層になったレンズ状の堆積で、深さ60cm程度より下位ではグラバ化して青灰色となる。



第52図 III区 11~14号土坑実測図 (1/30)



第53図 III区 12号土坑出土土器実測図 (1/4)

#### 出土土器 (図版40、第50図8)

8は完形の布留系壺である。外面は、肩部に沈線が1条廻り、下半部に煤が付着する。内面はケズリが施され、底部付近には押し出し技法が見られる。

#### 12号土坑 (図版10、第52図)

III区南西部に位置する土坑で、14号土坑の南東側に隣接し、南側が13号土坑を切る先後関係で接する。平面形は径130～135cm程度の円形で、深さは192cmである。壁の立ち上がりは上半が非常に急でオーバーハンプする部分もあり、下半はやや緩やかに落ち込んで底面は非常に狭くなる。埋土は上層が粘性の強い黒灰褐色土主体で、深さ80cm程度より下位では灰褐色土でやや粗い暗灰褐色砂が混ざる。深さ100cm程度より下位では、内部が狭小なため詳細な土層の観察を行うこと

はできなかった。

#### 出土土器（図版41、第53図1～19）

1～8は土師器杯身で、外底部の調整については、1が回転ヘラ切りを行ったままで、他は回転ケズリを施す。1の外底部には墨書が施され、「国玉」と書かれたと見られる。2の外底部には墨書が施され、半分程度消失するが、「符」であると判読できる。底部内面は黒色化しており、墨痕の可能性がある。5の外底部には、高台を削り出すことを意識した見られる回転ケズリによる凹凸が外縁部付近に確認できる。6～8は高台を有するもので、7の高台は他より高い。8の外面上には、墨痕の可能性のある黒色化する部分が見られ、また底部内面は一部平滑となっており、転用観の可能性がある。

9～11は土師器皿で、外底部には回転ケズリの後にナデが施される。10の外底部には「□田倉」（□は胞もしくは筑か）と墨書されたと見られる。内面は黒色化し、墨痕の可能性がある。

12・13は鉢である。12の口縁端部は、わずかに内側へ屈曲する。13は胴部から直線的に延びる素口縁で、外面上の残存する下端部にはケズリが見られる。

14～19は土師器壺の口縁部から胴部上半にかけてで、内面にはケズリを施す。16の外面上には煤が付着する。

#### 13号土坑（図版11、第52図）

Ⅲ区南西部に位置し、北側が12号土坑に切られる先後関係で接する土坑である。切り合いで一部失われているが、平面形は径90cm程度の円形となると見られる。壁の立ち上がりは急な傾斜であり、深さは55cmである。埋土は全体的に地山に近似する黄灰褐色の層が主体に堆積するが、一部黒灰褐色の層も認められる。

#### 出土土器（第図1～3）

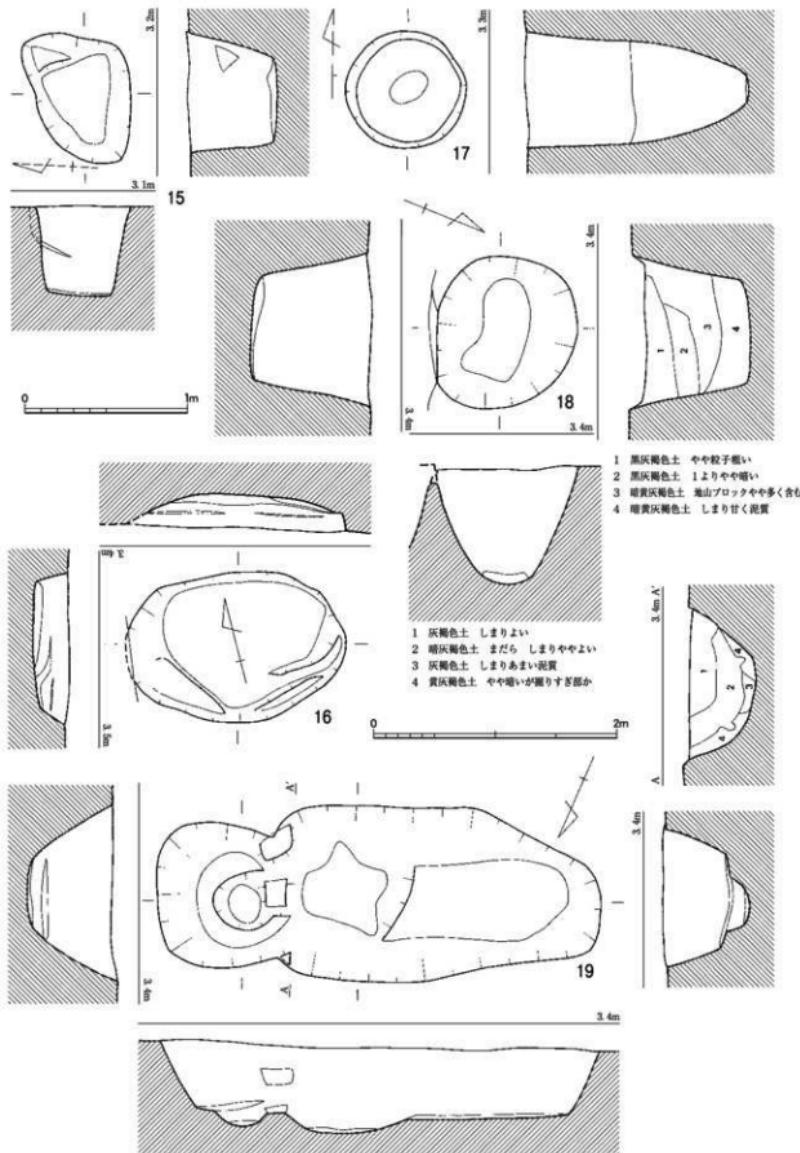
1は、口縁部が外反して開く広口壺で、口唇部にはキザミが施される。2は在地系壺の口頸部で、口唇部にはキザミが施される。3は小型の壺の底部で、狭い平底である。

#### 14号土坑（図版11、第52図）

Ⅲ区南西部に位置し、12号土坑の北西側に隣接する土坑である。平面形は全体的に円形に近いが、一部が外側に張り出しやや不整形となり、長軸100cm×短軸86cmである。深さは78cmで、張り出し部分の下部は55cm程度の深さでテラス状となる。中位から底面直上にかけてほぼ完形の土器が複数出土した。深さ20cmまでの上層は灰褐色土・黒灰褐色土の埋土が堆積するが、それより下位は地山に近似する淡黄灰褐色土が堆積する。深さ55cm程度より下位ではグライ化して明青灰色となるが、元来は直上の地山の近似層と同質であると考えられる。下記の土器は全てこの下層の埋土内からの出土である。

#### 出土土器（図版41、第55図4～7）

4～6は小型丸底壺である。4の外面上には、ケズリが施される。5の口縁部外面には暗文が施され、胴部には焼成後に内面より穿孔が施される。6の外面上には赤色顔料が塗布され、口縁部および胴部上半には密にミガキが施される。胴部内面にはケズリが施される。7は布留系壺で、肩部外面に横位のハケが見られ、底部はわずかな範囲ながら平坦に近い部分がある。



第54図 III区 15～19号土坑実測図 (19のみ1/40、他は1/30)

### 15号土坑（図版11、第54図）

Ⅲ区南西部に位置し、13号土坑の南側に隣接する土坑である。平面形は長軸80cm×短軸67cmの不整形で、深さ53cmである。北東側の15~30cm程度の深さでテラス部分がある。壁の立ち上がりは急な傾斜である。埋土は暗灰褐色土の1層である。図示できる土器は出土していない。

### 16号土坑（図版12、第54図）

Ⅲ区南側に位置する土坑で、23・30号土坑と接しており、30号土坑を切り、23号土坑に切られる先後関係である。平面形は長軸134cm程度×短軸93cmの楕円形で、深さ22cmと浅く、壁の立ち上がりは一様でなく緩やかな部分もあり、テラス部も見られる。埋土は暗灰褐色の1層からなる。図示できる土器は出土していない。

### 17号土坑（図版12、第54図）

Ⅲ区南西部に位置し、26号土坑の東側に隣接する土坑である。平面形は径70cm程度の円形で、深さは135cmである。壁の立ち上がりは、特に上半で急な傾斜であり、下半ではやや緩やかとなって、底面は非常に狭い。深さ70cm程度より下位ではやや砂質混じりの灰褐色土層であり、それより上層は黒灰褐色土主体であるが、一部地山に近似する淡黄灰褐色土の層が見られる。図示できる土器は出土していない。

### 18号土坑（図版12、第54図）

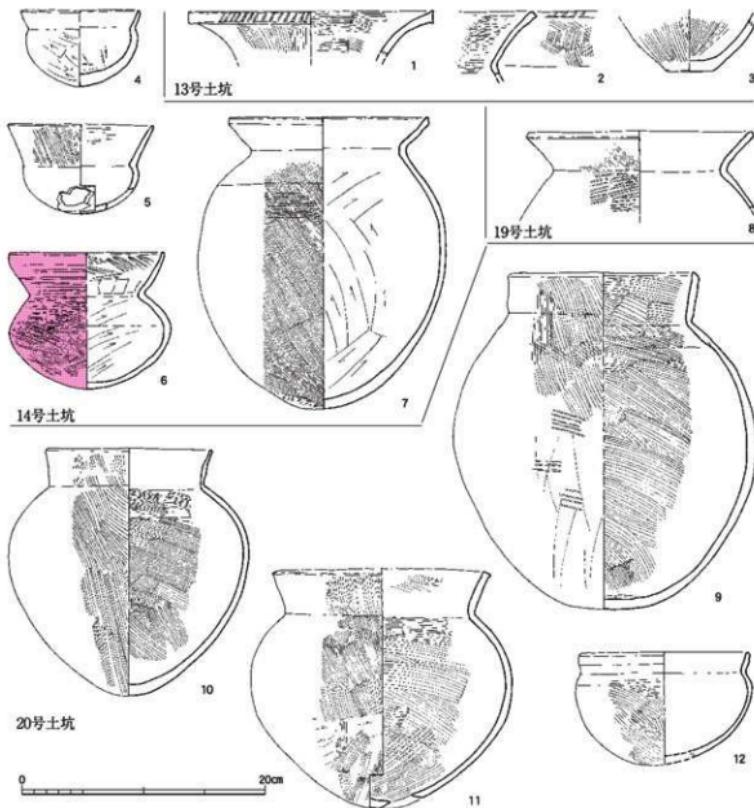
Ⅲ区南西部に位置する土坑で、北側が19号土坑に切られる先後関係で接する。平面形径94cm程度の円形で、深さ73cmである。東西側に比して南北側の壁の立ち上がりは緩やかな傾斜となる。埋土の堆積から西側から埋没した部分が見られる。上層は黒灰褐色土主体で、下層は地山に近似する淡黄灰褐色土からなり、特に最下層は軟弱で泥質である。図示できる土器は出土していない。

### 19号土坑（図版13、第54図）

Ⅲ区南西部に位置する土坑で、南側が18号土坑を切る先後関係で接し、24・25号土坑と隣接する。また、10・15号掘立柱建物跡に属する礎盤も切る。平面形は長軸363cm×短軸146cmの不整形で、東側の円形に近い部分と東西に長い西側部分からなる。これらは底面もテラス部で分割されており、別遺構が切りあつたものもある可能性もある。長軸に沿った土層によって検証を行っていないため確実性に欠けるが、検出時に平面的な切り合いは認められず、底面の深さも大きな相違がないため、両者は掘り返しがあったとしても一連の遺構である可能性が高いと考える。それを補強する材料として、隣接する24号土坑に類似した平面的な特徴がありながら、土層から一つの遺構と確認した点も挙げられる。遺構内はテラス部により起伏が目立つが、掘り過ぎによって本来の形状からやや変更された可能性もある。一部で確認した土層から埋土は灰褐色土主体である。

### 出土土器（第55図8）

8は壺の口縁部から肩部にかけて、胴部の外面はタタキ、内面はナデで調整されており、五様式系と考えられる。



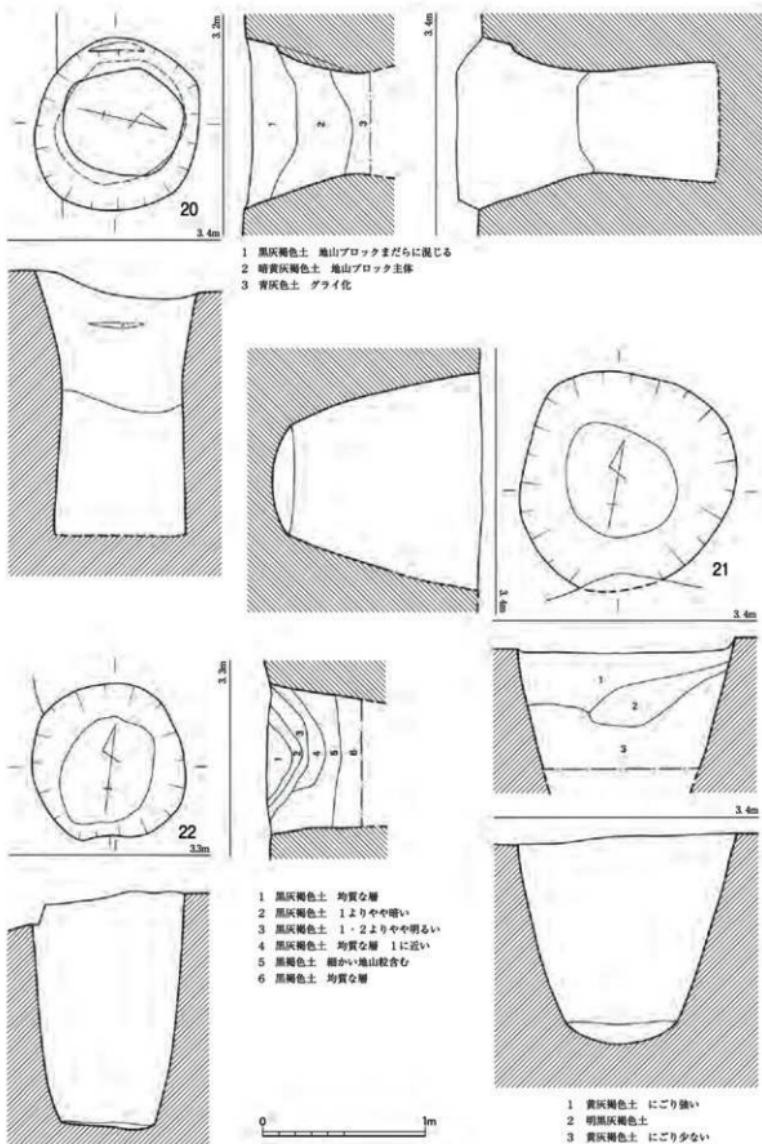
第55図 III区 13・14・19・20号土坑出土土器実測図 (1/4)

20号土坑 (図版13、第56図)

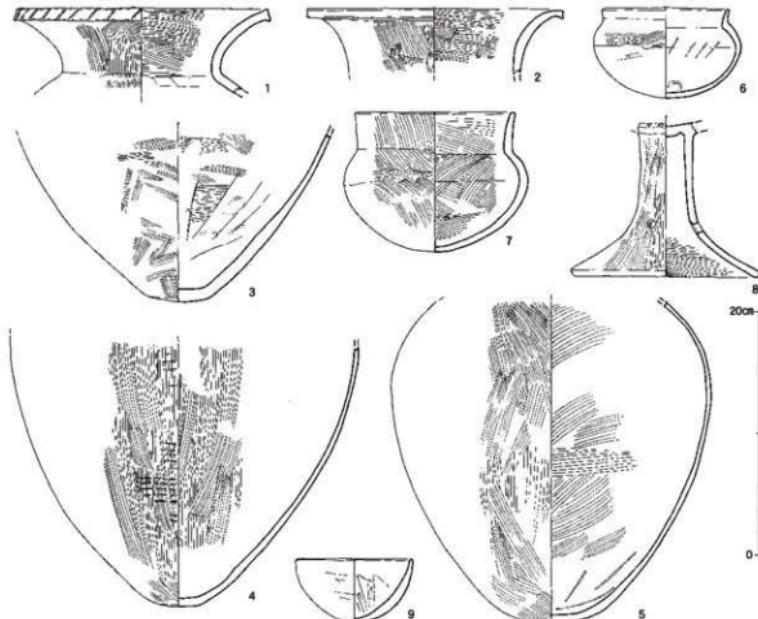
III区南西部に位置する土坑である。平面形は径100cm程度の円形である。壁の立ち上がりは、上半でやや緩やかで、下半では非常に急な傾斜となり、全体的にオーバーハングする。底面は内部が非常に狭小なために明確に確認できなかったが、深さは160cm程度となると考えられ、また堆積土層は深さ75cm程度までしか確認できなかった。埋土の土層からは、レンズ状の堆積が確認できた。深さ30cm程度までは黒灰褐色土で、その下層は深さ65cm程度までは地山に近似する暗黄灰褐色土で、それより下位ではグライ化して青灰色となる。底面近くからは複数の完形に近い土器が出土した。

出土土器 (図版42、第55図 9~12)

9は、口縁部がわずかに外側の上方へ直線的に延びる直口壺で、底部はややレンズ状に近い。10・



第 56 図 III 区 20~22 号土坑実測図 (1/30)



第57図 III区21号土坑出土土器実測図(1/4)

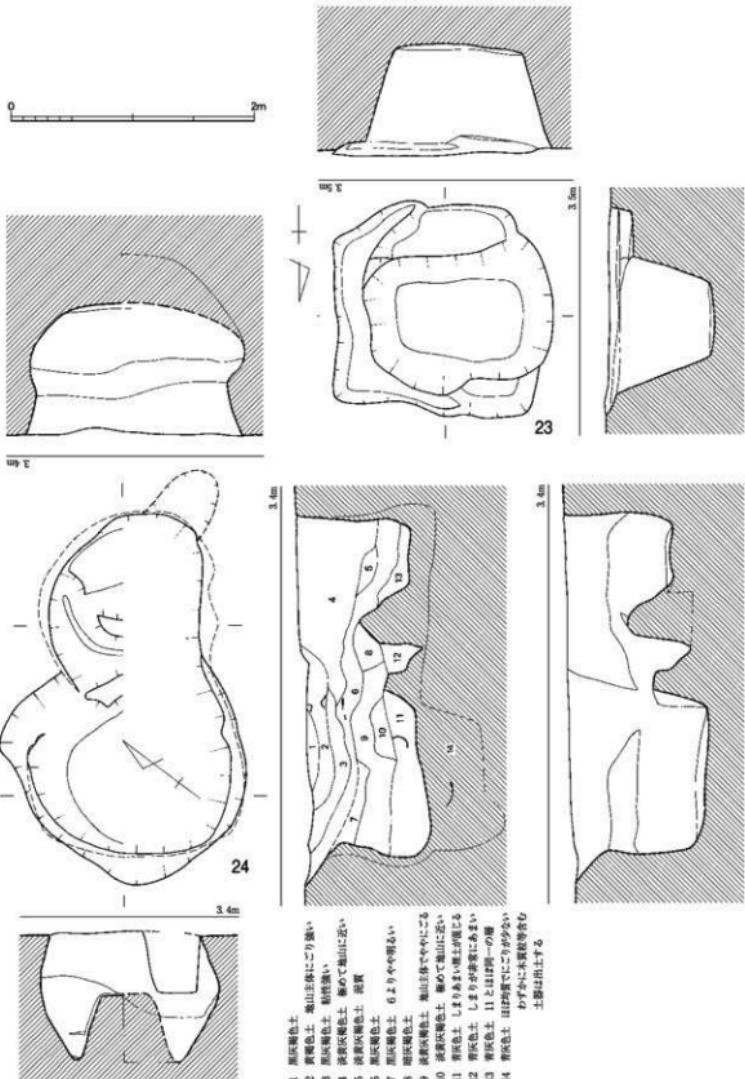
11はともに、短い口縁部がやや外側へ開く壺である。10は、11よりもやや胴部が細身の器形である。11は底部付近に内面より穿孔が施される。12は小型丸底壺で、外面はハケ調整である。

#### 21号土坑（図版13、第56図）

III区南西部に位置する土坑である。平面形は径130cm程度のやや不整な円形で、深さ128cmである。壁の立ち上がりは、非常に急な傾斜というわけではない。深さ80cm程度までしか土層の観察を行っていないが、地山に近似する黄灰褐色土主体で、一部明黒灰褐色土層が見られる。底面よりやや上層で多数の木質とともに完形に近いものを含めた土器が出土した。

#### 出土土器（図版42、第57図1～9）

1・2はともに、口縁部が外反しながら大きく開く広口壺で、1の口唇部にはキザミが施される。3・4はともに壺の胴下半部から底部にかけて、底部は非常に狭いレンズ状となる。5は壺の肩部より底部にかけて、胴部の最大径よりも下位の粗いハケは、それより上位のハケを切る調整の先後関係が認められる。6は、非常に短い口縁部が上方に延びる小型の短頸壺で、胴部は偏球形に近い。7は、口縁部がわずかに外側の上方へ延びる直口壺で、胴部は偏球形に近い。8は高杯の脚部で、外面には密にミガキが施される。穿孔が3箇所に認められ、上端部には杯部と接合するためのキザミが見られる。9は素口縁の小型の鉢である。



第58図 III区 23・24号土坑実測図 (1/40)

## 22号土坑（図版14、第56図）

Ⅲ区南西部に位置し、西側が1号落ち込みに切られる先後関係で接する土坑である。平面形は径95cm程度の円形で、深さ146cmである。壁の立ち上がりは非常に急な傾斜である。内部が狭小なため深さ55cm程度までしか土層の観察を行っていないが、最上層は黒灰褐色土で、その下位は黒褐色土となる。

### 出土土器（第59図1）

1は素口縁の鉢で、口縁部付近はわずかに内傾する。

## 23号土坑（図版14、第58図）

Ⅲ区南西部に位置する土坑で、東側が16号土坑に切られる先後関係で接し、19・24・30号土坑と隣接する。平面形は長軸180cm×短軸175cmの不整な方形であるが、深さ20cm程度までに広い範囲でテラス部分となって、それより下位では内部は非常に狭小となる。最深部で深さ93cmを測る。深さ40cm程度までの最上層は灰褐色土で、それより下位では地山に近似した淡黄灰褐色土であるが、しまりのよい上層と軟弱で泥質の下層に分割される。

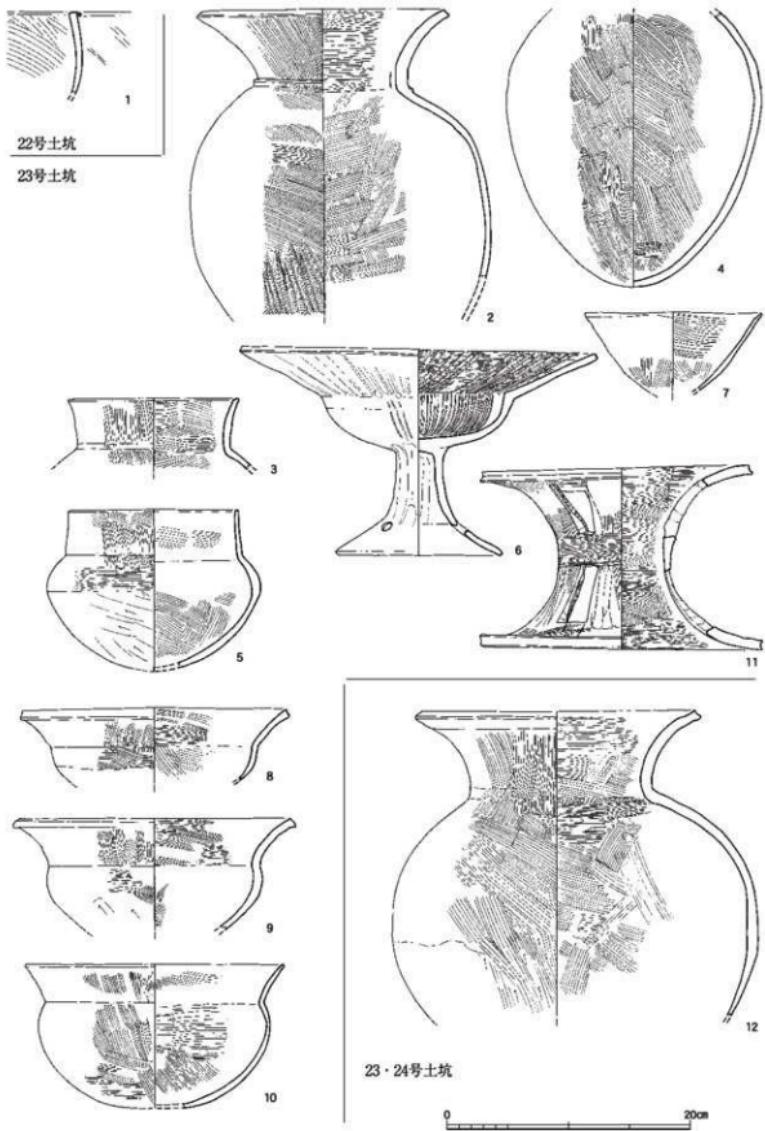
### 出土土器（図版43、第59図2~12）

2は、口縁部が外反しながら開く広口壺で、頸基部には断面三角形の低い突帯が廻る。3は、口縁部がやや外側の上方へ延びる壺である。4は壺の肩部から底部にかけて、下半に見られる粗いハケは上半に残存するハケを切る。5は、口縁部が直上へ直線的に延びるやや小型の直口壺で、胴部は偏球形に近い形状で、外面下半にケズリが施される。6は高杯で、杯部の下半は内湾しながら立ち上がり、上半は屈曲してから外側へ直線的に延びて、口縁部へと至る。内外面ともに暗文が施される。脚部には3箇所に穿孔が見られる。7は胴部から口縁部へと直線的に延びる素口縁の鉢である。8~10は鉢で、下半は内湾しながら立ち上がり、屈曲部から上部は外反しながら開き、口縁部へと至る。11は鼓状の器形の器台で、上下半で対応した3箇所ずつの方形の透孔が見られる。中位の最もくびれる部分には、横位のハケ状の平行文および沈線が廻る。

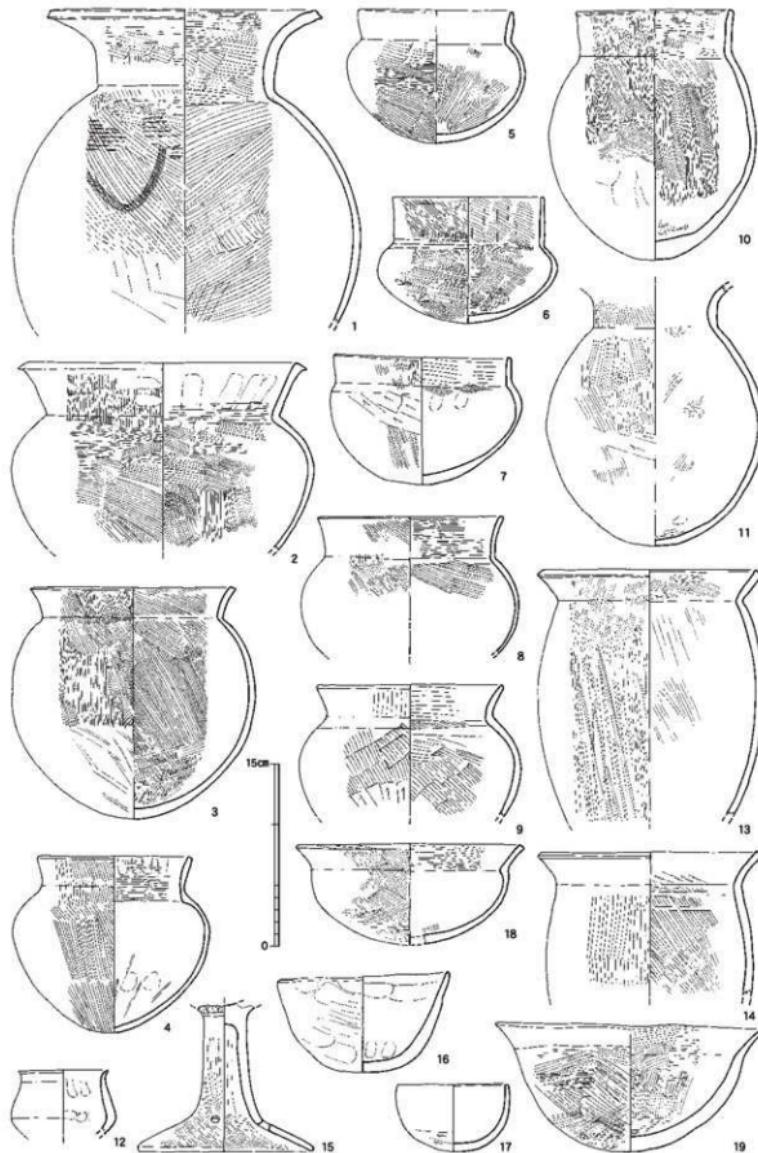
12は、口縁部が外反して開く広口壺で、23・24号土坑双方で出土して接合したものである。

## 24号土坑（図版14、第58図）

Ⅲ区南西部に位置する長軸316cm×短軸203cmの大型の土坑である。東側が27号土坑に切られる先後関係で接し、19・24・30号土坑と隣接する。二つの不整円形が重なる瓢箪状の平面形であるが、当初南西側部分のみを不正円形として検出していたが、半裁しての掘削段階で地山に非常に近似する埋土が北東側へも広がっていることが判明し、土層の堆積状況から複数の遺構の切り合いではなく単一の遺構と判断できた。埋土は地山に近似する淡黄灰褐色土と黒灰褐色土が互層となって堆積し、深さ80cm程度より下位ではグライ化して青灰色となる。壁面および底面の判別が困難であったので、半裁のため先行して掘削した南東側を実際よりもやや大きく掘り広げて確認することとした。その結果グライ化した土中でもにごりの多寡で分かれる部分があり、壁面の連続して下降する部分が認められなかっただけで、そこで底面と判断した。しかし、その下位からも土器が出土するため、分層を認識できず遺構がより下位へ連続しているか、土器が部分的に沈み込んだ等の可能性が考えられる。先述の底面とした部分は非常に起伏が激しく、非常に不整な



第59図 III区 22~24号土坑出土土器実測図 (1/4)



第60図 III区 24号土坑出土土器実測図 (1/4)

様相を呈す。深さは50～70cm程度でテラス部分があり、先述の底面まで50～110cm程度である。壁の立ち上がりは急な部分が多く、広い範囲でオーバーハングする。

#### 出土土器（図版43・44、第59図12、第60図1～19）

第59図12は、口縁部が外反しながら開く広口壺で、23・24号土坑双方で出土して接合したものである。

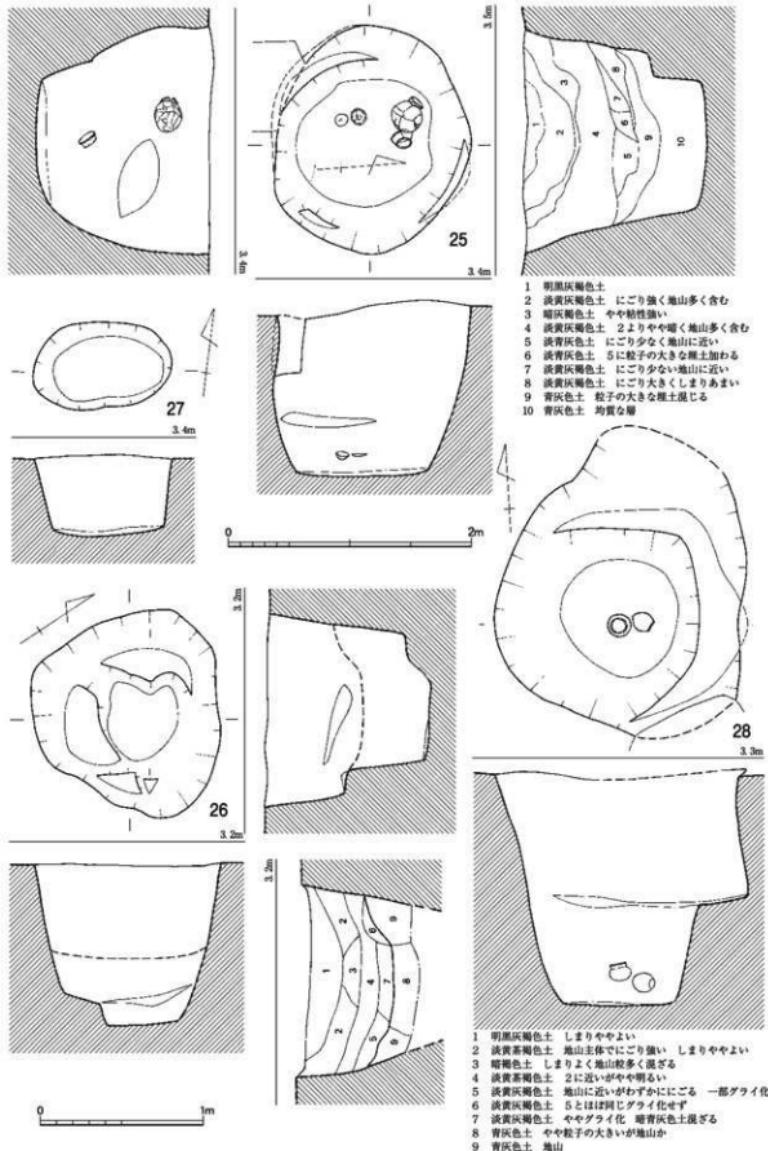
第60図の出土土器は以下で説明する。1は、口縁部が外反しながら開く広口壺である。胴部上半には、小型のハケ原体で施したようなU字状の文様が見られる。2は、口縁部がやや外側の上方へ直線的に延びる壺で、胴部は偏球形に近いと考えられる。3は、短い口縁部がわずかに外側へ開く短頸壺で、頸基部はあまりくびれない。胴部は球形に近い器形である。4は、口縁部がわずかに外側の上方へのびる短頸壺で、胴部はやや強く張り、重心は胴部のやや上位にあり、肩部の張る器形である。5～7は、口縁部がほぼ直上へ延びる直口壺で、胴部は偏球形に近い器形である。8・9は、口縁部が開き、胴部が偏球形に近い壺である。10・11はやや長胴の壺で、10は直口壺で、11の口縁部は外反して開く。12は、非常に短い口縁部が屈曲して開く小型の短頸壺である。重心が低く下膨れの器形である。13・14は在地系甕の口縁部から胴部にかけてである。13の外面調整において、下位の粗いハケが上位のハケを切る先後関係が認められる。また、13の外面には煤が付着する。15は高杯の脚部で、3箇所に穿孔が見られる。上端部には杯部との接合のためのキザミが残存する。16は素口縁の鉢で、器表は粗く仕上げられる。17は素口縁の鉢である。18・19は、屈曲した口縁部が外側へ延びる鉢である。

#### 25号土坑（図版15、第61図）

Ⅲ区南東部に位置する土坑で、平面形は長軸187cm×短軸160cmの楕円形で、一部他の遺構と切り合うが、先後関係は確認できなかった。壁の立ち上がりは全体的に急な傾斜となっており、オーバーハングする部分も多く、テラス状となる部分も認められる。底面までは深さ143cmである。土器は上層で完形に近いものが出土し、底面から15cm程度上位でも出土が見られる。埋土は上層では明黒灰褐色土・暗灰褐色土の層が堆積するが、地山に近似する淡黄灰褐色土が主体である。深さ70cm程度から下位ではグライ化して青灰色を呈し、にごりの度合いで埋土と判別したが、最下層は地山とほとんど区分し難いものであった。

#### 出土土器（図版44、第62図1～13）

1は、口縁部が外反して大きく開く広口壺で、口唇部にキザミが施される。頸基部はやや強くくびれ、断面三角形の低い突帯が廻る。また、肩部には平行文、胴部上半には波状文が廻る。2・3は壺の口頸部で、口縁部はやや外側の上方へ延びる。2の口唇部にはキザミが施される。4は短い口縁部がやや外反して開く壺で、頸基部はやや強くくびれ、肩部のやや張る器形である。5は壺の口縁部と考えたが、高杯や器台等の可能性もある。口唇部には波状文が見られ、外面には暗文が残存する。6は複合口縁壺の口縁部で、上部の外面には波状文が見られる。7は高杯の杯部で、下半はやや内湾気味に緩やかに立ち上がるが、上半は強く外反して立ち上がる。内外面ともに細かい暗文が見られる。8～10は素口縁の鉢で、8は尖底気味である。11は、胴部がやや張り非常に短い口縁部が屈曲して上方を向く鉢で、内外面ともに細かい暗文が見られる。12は鉢の脚部である。13は支脚の上部で、受部では一部が嘴状に突出し、中央部に孔が開く。



第61図 III区 25～28号土坑実測図 (25・28は1/40、他は1/30)

## 26号土坑（図版15、第61図）

Ⅲ区南東部に位置し、12・14号土坑の北東側に隣接する土坑である。平面形は径115～130cm程度の不整円形である。壁の立ち上がりはやや急な傾斜であり、複数のテラス状となる部分があるが、底面の判別が困難な中で掘削したため不整な形状となり、実態を反映しているとは言えない。埋土については、最上層で明黒灰褐色土が認められるが、あとは深さ60cm程度までほとんどが地山に近似する淡黄灰褐色土がややにごるものからなる。それより下位ではグライ化して青灰色となるが、ややにごりが認められたため掘削した。しかし、明瞭な底面が確認できなかたため青灰色土部分は掘り過ぎと考えられ、深さ98cmまで掘削したが、実際は60cm程度と想定される。

## 出土土器（図版15、第62図14～16）

14は、口縁部が外反して強く開く広口壺の口頸部で、口唇部にはキザミが施される。15は、頸基部は太く、短い口縁部が外側の上方へ延びる壺である。16は、胴部が扁平で強く張り、口縁部が屈曲して外側へ延びる鉢である。

## 27号土坑（図版16、第61図）

Ⅲ区南東部に位置し、西半が先行する先後関係で24号土坑と接する土坑である。16・30号土坑の南側に隣接する位置でもある。平面形は長軸84cm×短軸53cmのやや不整な楕円形で、深さ50cmである。埋土は灰褐色土の1層からなる。図示できる土器は、出土していない。

## 28号土坑（図版16、第61図）

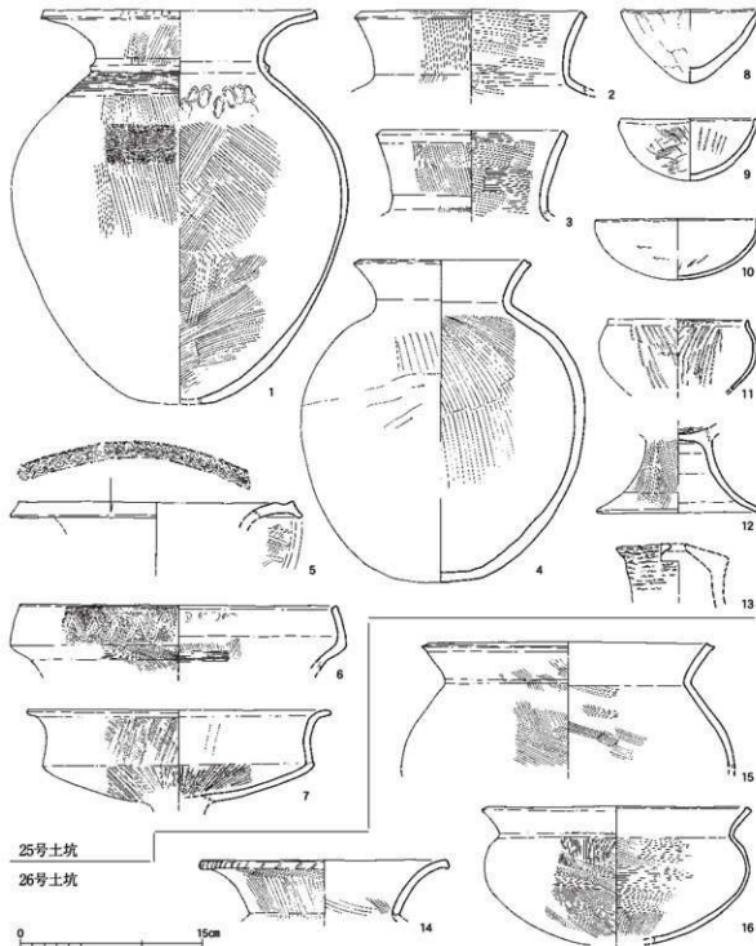
Ⅲ区南東部に位置する土坑で、9号建物に属する柱穴2基に切られ、46号土坑の南側に近接する。Ⅲb区の南側への拡張前の北半のみ調査区内にあった時点では検出範囲が限られていたため、9号建物北東端の柱穴との切り合いを認識しておらず、同時に掘削を行ってしまった。よって、柱穴の掘形は捉えることはできず、結果的に礎盤だけを検出し、柱穴に切られることを認識した。その後、調査区の拡張に伴って土坑全体を検出し、もう1基の柱穴に切られることからも、9号建物との先後関係を改めて確認した。平面形は長軸250cm程度、短軸200cm程度の大型の不整楕円形で、埋土は地山に近似する淡黄灰褐色土主体で、下層はグライ化して青灰色となり、地山との境界が非常に不明瞭であった。深さ110cm程度において東半側で広くテラス状となる部分が認められ、底面までは深さ195cmである。底面よりもやや上位において完形に近い土器が出土する。

## 出土土器（図版45、第63図1～6）

1はやや長胴の壺で、口縁部はわずかに開き、頸基部はあまりくびれず、なで肩の器形である。底部は狭いレンズ状で、平底に近い。2・3は直口壺で、胴部は偏球形に近い。2は3よりも短頸である。4は小型で短頸の直口壺で、頸基部はほとんどくびれない。胴部は偏球形に近い。5はやや小型の壺で、頸部より下位である。内外面ともに下半の細かいハケが上半のハケを切る調整の先後関係が認められる。6は壺の肩部より下位で、外面の下半には、ケズリとその後のナデによりハケ調整は残存していない。

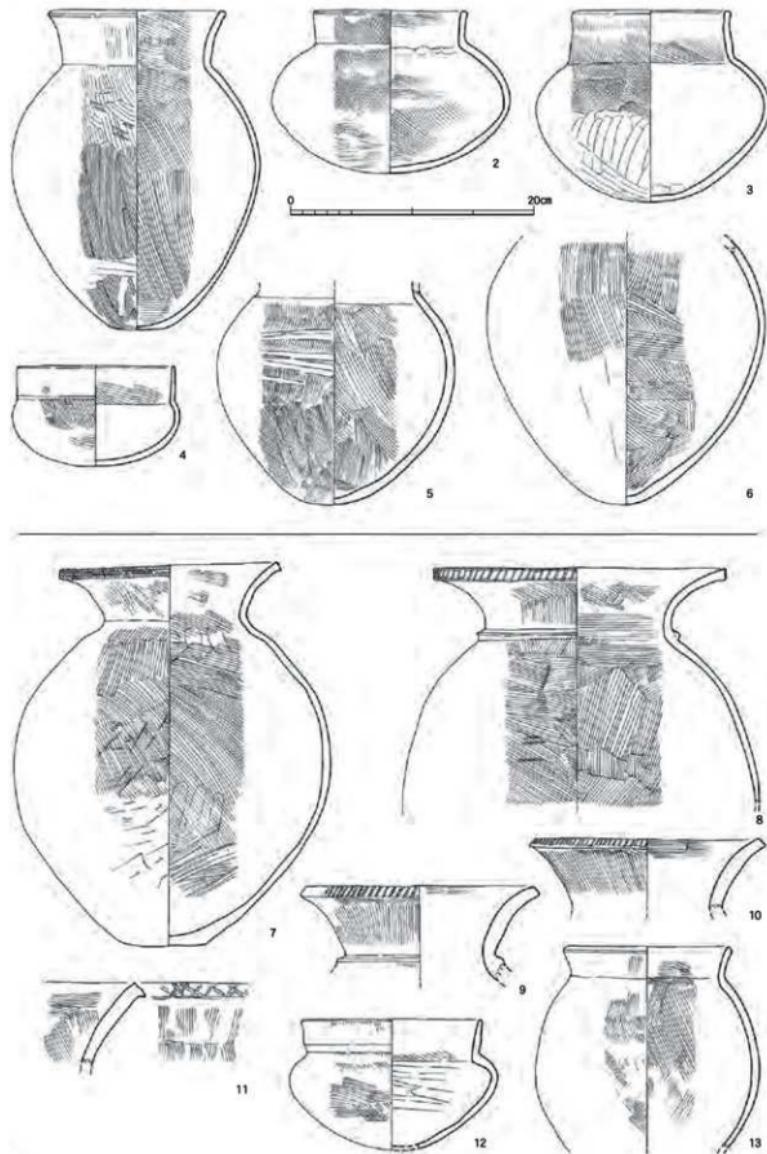
## 29号土坑（図版16・17、第65図）

Ⅲ区南側の中央部に位置する土坑で、1号溝と切り合う。Ⅲb区の南側への拡張前には南端部は

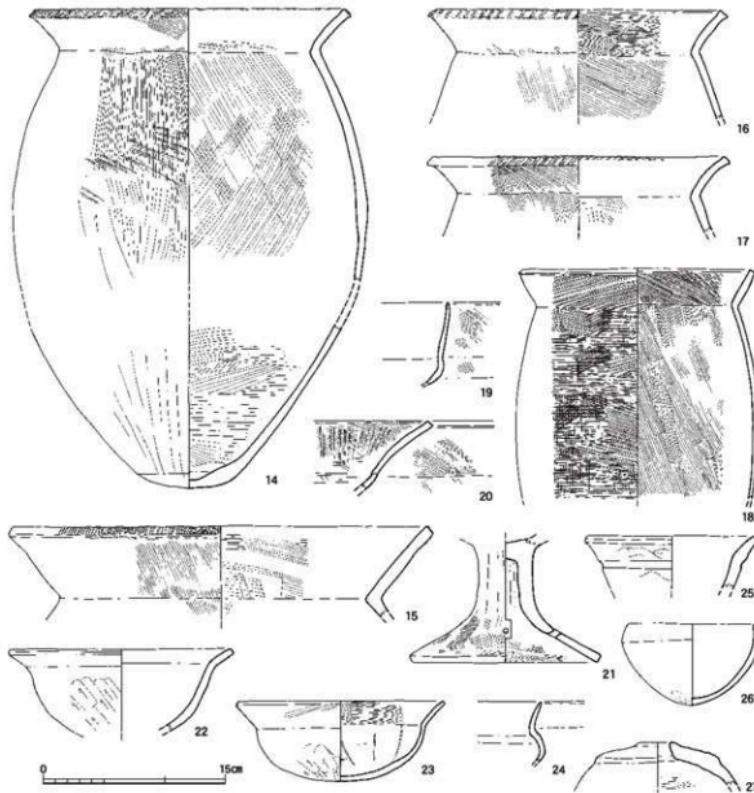


第62図 III区 25・26号土坑出土土器実測図(1/4)

調査区外にあり、1号溝の連続性と丁度重なる位置関係であったため、当初溝と別造溝の切り合う土坑として検出されていなかった。1号溝の一部として掘削していたところ、周辺よりも深く掘り下がる部分があることから土坑と認識し、掘削の際の土層の観察から1号溝に切られる先後関係にあることが確認された。調査区の拡張に伴って全体が調査区内に含まれても、掘り過ぎ等により南側の形状は明確に把握することはできなかったが、平面形は径160cm程度の不整円形であつ



第63図 III区 28·29号土坑出土土器実測図 (1/4)

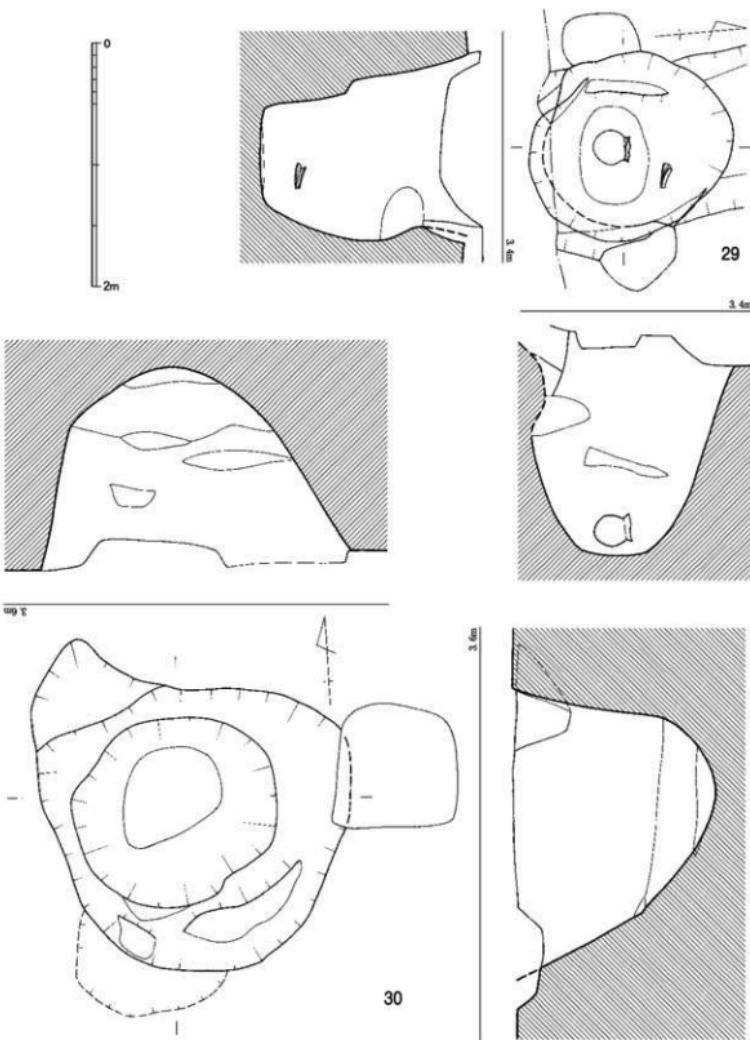


第64図 III区29号土坑出土土器実測図(1/4)

たと考えられる。壁の立ち上がりは北側でやや緩やかで、南側は急な傾斜でオーバーハンプする。一部テラス状となる部分がある。中位から完形に近い土器が集中的に出土しており、底面からわずかに上位でも完形に近い土器が1点出土した。

#### 出土土器（図版45、第63・64図7～27）

7は、口縁部が外反して開く広口壺である。底部は平底で、口唇部にはキザミが密に施される。8は、口縁部が外反して開く広口壺で、口唇部にはキザミが施され、頸基部には低い断面三角形の突帯が廻る。9・10は、ともに口縁部が外反して開く広口壺で、口唇部にはキザミが施され、頸基部は細めである。9の頸基部には断面台形の突帯が廻る。11は大型の壺の口縁部である。口唇部には「×」状にキザミが施される。12は小型で短頸の直口壺で、頸基部はあまりくびれず、肩部がやや張る器形である。13は、口縁部がわずかに開くやや小型の短頸壺である。14～18は在



第65図 III区 29・30号土坑実測図 (1/40)

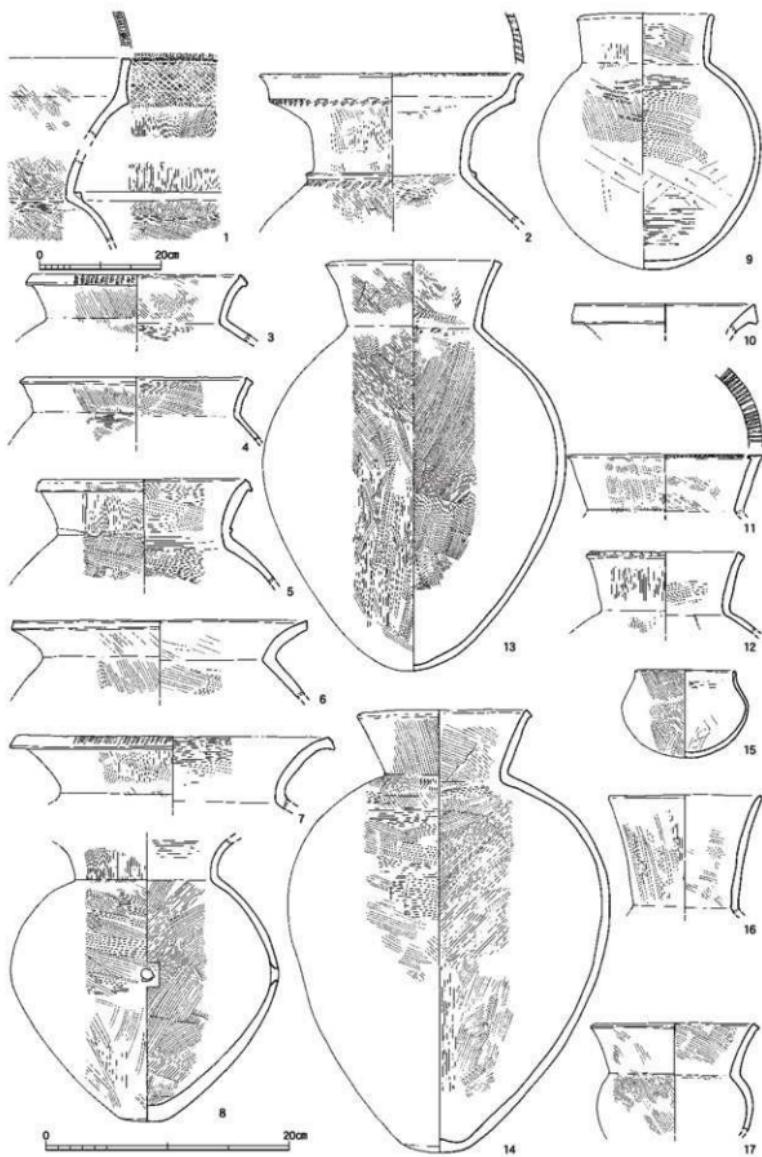
地系壺の口縁部で、18以外は口唇部にキザミが施される。14は上下の二つの部位に分かれている。18の外面には密にタタキが見られる。19は高杯の杯部で、口縁部が直線的に上方へ延び、下部はわずかに丸みをもつ。20は高杯の杯部で、屈曲部が残存し、そこから上位は外反して開く。内面には暗文が残存する。21は高杯の脚部である。22は、口縁部が屈曲して外側へ延びる鉢で、外面にはケズリが認められる。23は、口縁部が屈曲して外反気味に開く鉢で、体部の浅い器形である。24は小型の鉢で、頸基部がわずかにくびれ、口縁部はわずかに外反して開く。25は器壁のやや厚い鉢で、口縁部はやや外側へ屈曲する。26は素口縁の鉢で、口縁部はわずかに内湾し、尖底気味である。27は支脚の受部と考えられ、中央には孔が開く。

### 30号土坑（図版17、第65図）

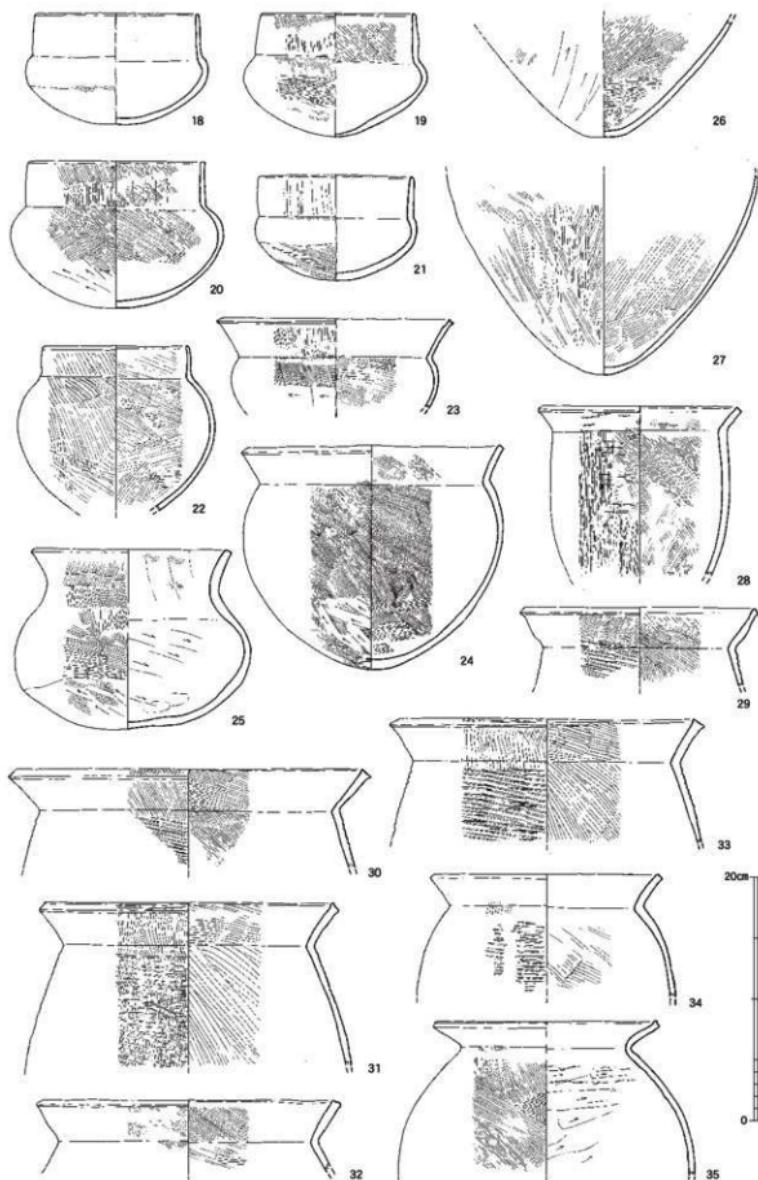
Ⅲ区南側の中央部付近に位置する土坑で、南端が16号土坑に切られる先後関係で接し、10号掘立柱建物跡に属する柱穴を切る。平面形は長軸270cm×短軸260cmの不整な円形に近い大型のもので、壁の立ち上がりは部分により相違があり、上部で外側へ広がって緩やかな傾斜となる部分や、深さ120cm程度の位置で全体的に傾斜が緩やかになる部分が認められる。また、南側でテラス状となる部分も複数見られる。底面までは深さ190cmである。埋土はレンズ状の堆積をなし、最上層のわずかな明黒灰褐色土や底面近くのグライ化した層の他は、地山に近似する淡黄灰褐色土が主体で堆積し、にごりやしまりの度合いで3層程度に分割される。中層から床面近くにかけて完形やそれに近い土器が多数出土した。

### 出土土器（図版45～47、第66～68図1～49）

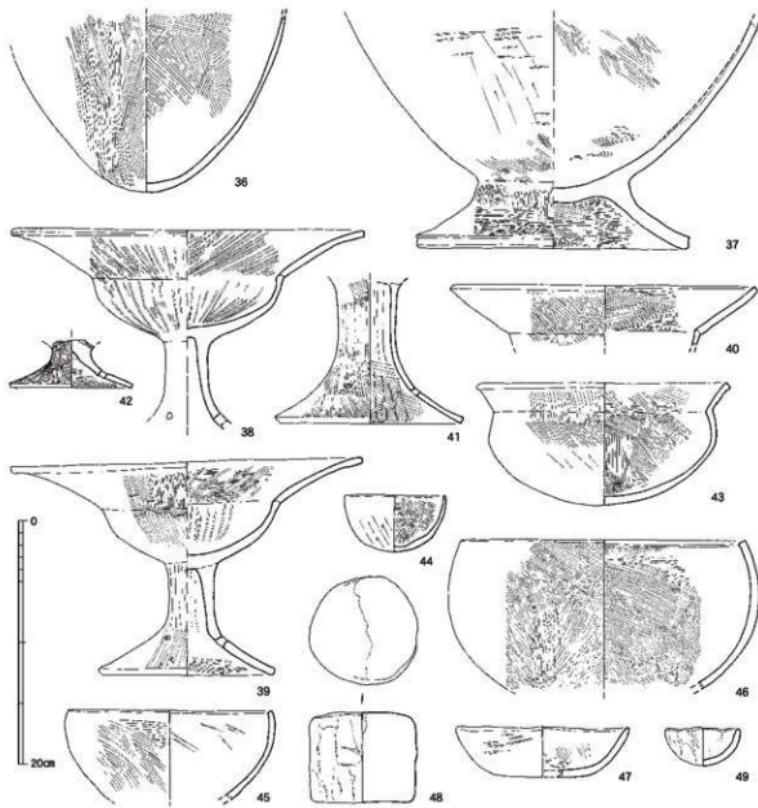
1は大型の壺の口縁部で、上下に分かれれる。上下の口縁部の接合部と口唇部にはキザミが施され、上部の口縁の外面には格子状にキザミが施される。2は複合口縁壺で、上下口縁の接合部と口唇部にはキザミが施される。頸基部に断面三角形の低い突帯が廻り、その直下にもキザミが施される。3～5は、口縁部がやや外側の上方へ延びる壺で、頸基部は太めである。3の口唇部にはキザミが施される。6・7は、頸基部が太く、口縁部が外反して開く壺で、7の口唇部にはキザミが施される。8は、頸基部がやや強くくびれ、口縁部が外反して開く壺である。胴部の最大径付近に外面より焼成後の穿孔が施される。底部は、平底に近いレンズ状である。9は、口縁部が上方へ延びる壺で、胴部は球形をやや縱長にした器形である。10は壺の口縁部で、端部はやや広い面を成す。11～14は、口縁部がやや外側の上方へ延び、頸基部がやや強くくびれる壺である。11・12の口唇部にはキザミが施される。13・14は完形で、13は丸底であるが、14の底部はレンズ状である。15は小型の壺で、頸部で緩やかに屈曲して口縁部が立ち上がる。16は長頸壺の口頸部で外面には縦位の暗文が残存する。17は小型の壺で、口縁部がやや外反気味に開く。18～22は、口縁部が直上へ延びる直口壺である。18～21の胴部は偏球形に近く、22の胴部は球形に近い器形と考えられる。23・24は、口縁部がやや外側の上方へ外反気味に延びる短頸壺である。ともに胴部の張りはさほど強くなく、24の底部はやや尖底気味の丸底である。25は、短い口縁部がやや開く壺である。胴部の張りがやや強く、頸基部は緩やかにくびれる。底部は平底に近い。26・27は壺の胴部から底部にかけてである。28～33は在地系壺の口縁部から胴部にかけてで、いずれも口唇部にキザミを有さない。28・32以外は、胴部外面に密にタタキが施される。28・29は小型である。34は、肩部がやや張る壺で、胴部の外面にはタタキが残存し、内面にはハケが施される。五様式系



第66図 III区 30号土坑出土土器実測図①(のみ1/8、他は1/4)

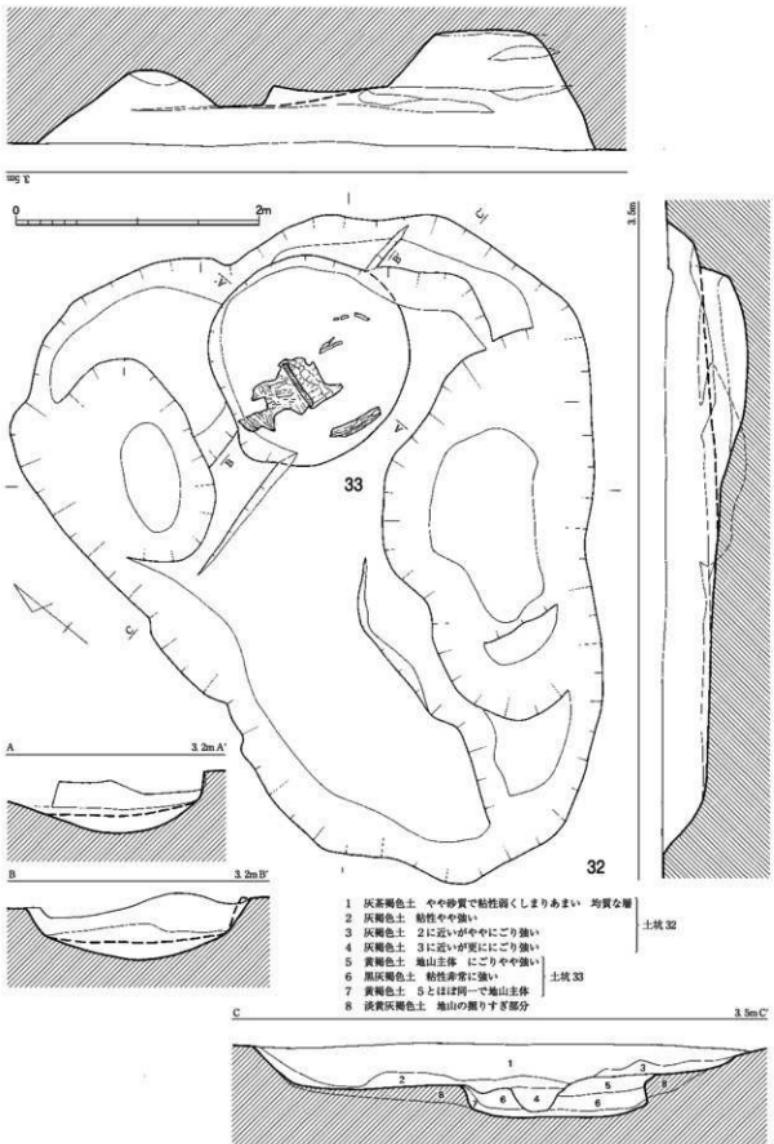


第67図 III区 30号土坑出土土器実測図② (1/4)



第68図 III区30号土坑出土土器実測図③(1/4)

甕の可能性がある。35は布留系甕の口縁部から胴部にかけて、胴部内面はケズリが施され、口縁端部はわずかに上方へつまみ上げられる。36・37は甕の底部から胴部にかけて、37は脚部を有する大型のものである。38~40は高杯で、いずれも杯部には暗文が施され、杯部下半は内湾しながら立ち上がり、杯部上半は屈曲して大きく開く。なお、38・39の杯部上半は外反気味であるが、40は直線的に延びる。38・39の脚部の穿孔は3箇所である。41・42は高杯の脚部で、42は非常に低脚である。据部はともにハケ調整が見られ、42の上部にはミガキが施される。穿孔はともに3箇所である。43は、口縁部が屈曲して開く広口の鉢である。44は素口縁の小型の鉢である。45は素口縁の鉢で、口縁端部はわずかに内傾する。46はやや大形の素口縁の鉢で、口縁部はやや内傾気味で、外面では下位の粗いハケが上位のハケを切る。47は平底で素口縁の鉢である。48は円柱状の支脚である。49は鉢状の器形の手づくねによるものである。



第69図 III区 32・33号土坑実測図 (1/40)

### 31号土坑

Ⅲ区南側の中央部付近に位置し、Ⅲb区の南側拡張前は単独の土坑として検出したが、掘削の結果礫盤が伴い、また調査区拡張後に検出された他の柱穴とともに組み合って6号掘立柱建物跡を構成することが認められたため欠番とする。

### 32号土坑（図版18、第69図）

Ⅲ区南側の南東部に位置する土坑で、上層を完全に消失させる形で33号土坑を切る。平面形は長軸520cm程度×短軸475cmを測る非常に大型の不整形である。底面は全体的に掘り過ぎた部分が多く、正確に捉えられていない点や、テラス状の部分があるなど起伏が伴う点があるが、30～40cm程度となる範囲が広いと考えられる。その中で特に深くなる部分が2ヶ所あり、その最深部で100cm程度の深さである。壁の立ち上がりは全体的にやや緩やかである。埋土は底面上に薄く灰褐色土層が堆積し、それより上位では灰茶褐色土の1層からなり、広い範囲で一括して埋没した可能性がある。埋土の特徴から下記の出土土器は遺構の時期を反映していないと見られる。

#### 出土土器（第70図1～3）

1は、口縁部がやや外側の上方へ外反気味にのびる壺である。2は小型の短頸壺で、胴部はあまり張らず、頸基部のくびれはわずかである。非常に短い口縁部が直上へ延びる。3は在地系壺の口縁部から胴部にかけて、外面には密にタタキが施される。

### 33号土坑（図版18、第69図）

Ⅲ区南東部に位置する土坑で、32号土坑の下層から検出され、上層は完全に失われている。本遺構が明瞭に検出される前に32号土坑を掘り過ぎてしまったため、南側の掘形は失われてしまつたが、径160cm程度の円形に近い平面形となると考えられる。埋土は粘性の強い黒灰褐色土やにごりの強い黄褐色土からなり、木質物や細かな骨片がわずかに含まれる。深さは35cm程度である。

#### 出土土器（第70図4・5）

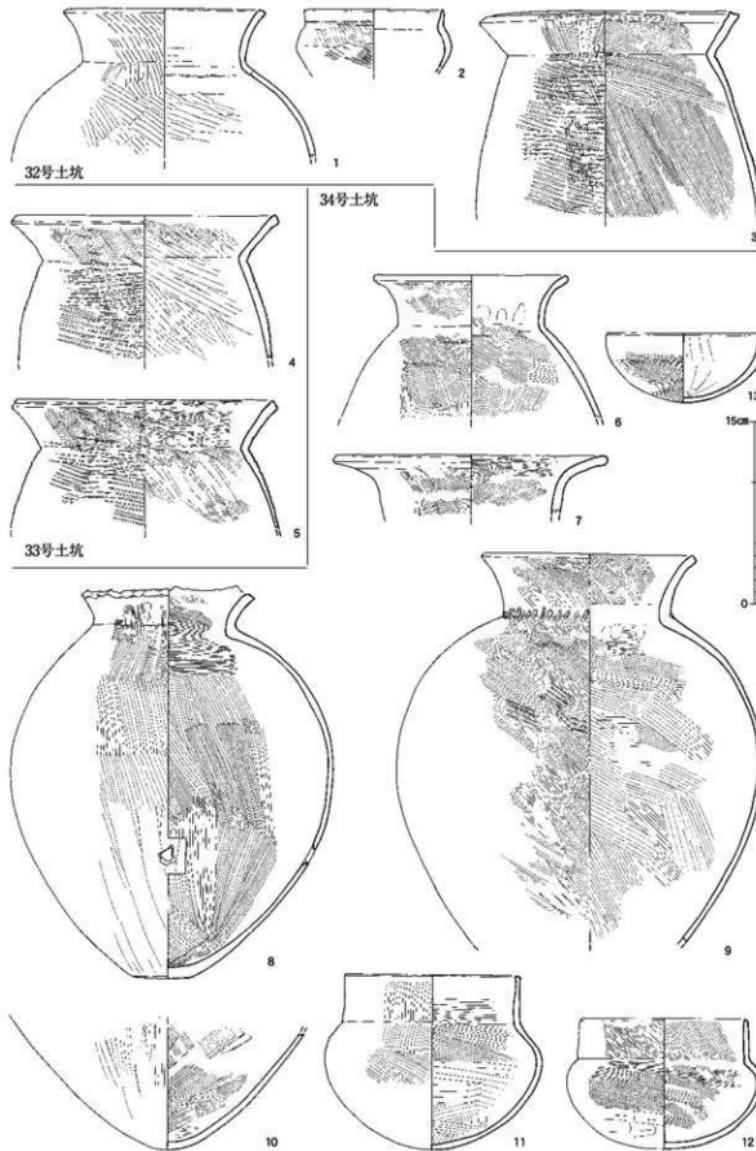
4・5はともに在地系壺の口縁部から胴部にかけて、口縁部は外反気味に開く。外面には密にタタキが施される。

### 34号土坑（図版19、第71図）

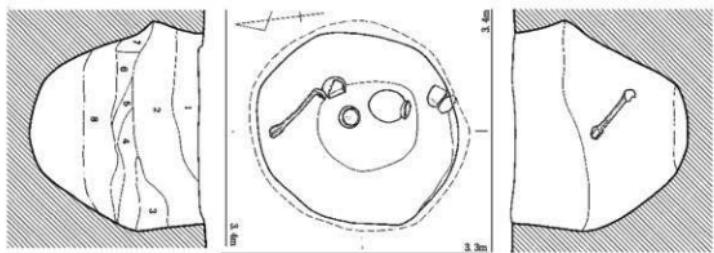
Ⅲ区南東部に位置する土坑で、25号土坑の北東側、38号土坑の南東側、46号土坑の西側に隣接する。平面形は径160cm程度の円形で、深さ143cmである。壁の立ち上がりは、上部では非常に急な傾斜で全体的にオーバーハングし、最も外側へ広がってから下位ではやや緩やかに落ち込むため、底面は狭くなる。ただ、下層の埋土はグライ化して青灰色で地山との区分が明瞭ではなく、壁面と底面の確実性にはやや不安がある。上層の埋土は、暗灰褐色土と地山に近似する淡黄灰褐色土からなる。中位からは完形に近い木器の縦杓子が出土し、底面近くからは完形に近い土器が複数出土した。

#### 出土土器（図版47、第70図6～13）

6は、口縁部が外反しながら開く広口壺の口縁部から胴部にかけて、なで肩の器形である。7は、口縁部が強く外反して開く広口壺の口縁部である。8は、頸基部がやや強くくびれる広口壺

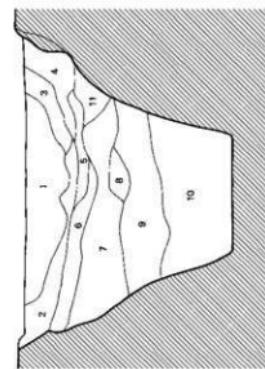
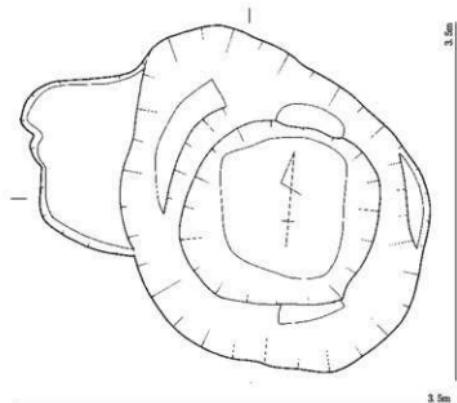
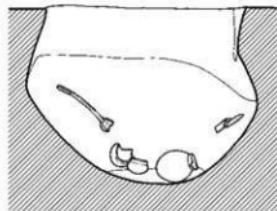


第70図 III区 32~34号土坑出土土器実測図(1/4)

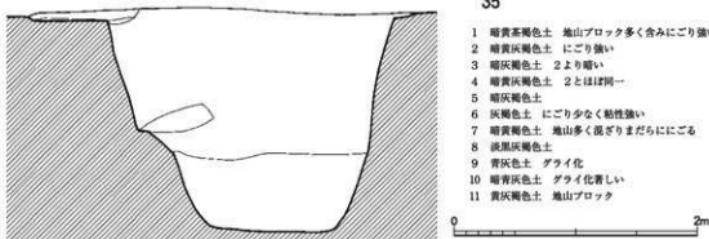


34

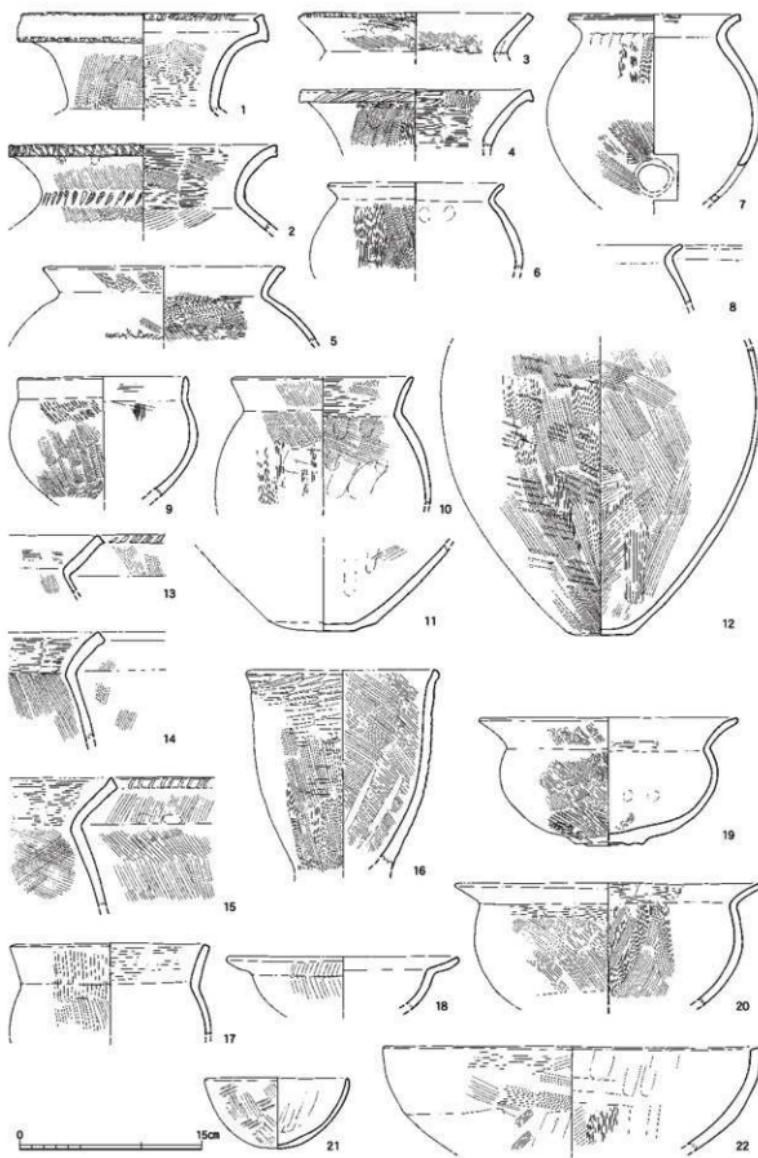
- 1 暗灰褐色土 やまだら
- 2 暗灰褐色土 1よりやや明るい
- 3 淡黄灰褐色土 地山主体の均質な層
- 4 暗灰褐色土 1・2より均質だが地山  
ブロック目立つ
- 5 淡黄灰褐色土 ややまだらの層
- 6 淡黄灰褐色土 地山主体の均質な層
- 7 淡黄褐色土 ややにごりが目立つ
- 8 青灰色土 グライ化



35



第71図 III区 34・35号土坑実測図 (1/40)



第72図 III区35号土坑出土土器実測図(1/4)

で、頸部で全周的に欠損して口縁部が失われており、故意に打ちかかれた可能性が高い。底部は平底に近いが、わずかにレンズ状となる。胴部下位に、焼成後外面より施された穿孔が見られる。9は、口縁部が外反して開く広口壺で、やや強くくびれる頸基部の外面にはキザミが施される。10は壺の底部で、丸底である。11・12は、頸基部が太く、あまりくびれない直口壺である。12の胴部は偏球形に近い。13は素口縁の鉢である。

### 35号土坑（図版19、第71図）

Ⅲ区南東部に位置する土坑で、38号土坑の西側に隣接し、51号土坑を切る。平面形は長軸310cm×短軸244cmの非常に大型の楕円形が主体部分で、西側に付属する広い範囲のテラス部分は深さ数cmから10cm程度と非常に浅く、異なる造構が接したものという可能性もある。壁の立ち上がりは全体的にさほど急ではなく、下位で傾斜の変化が見られ、テラス状となる部分もある。埋土については、地山に近似する黄灰褐色土でにごる層が主体の中に灰褐色土等の層も含まれ、80cm程度より下位ではグライ化して青灰色となる。

### 出土土器（図版47、第72図1～22）

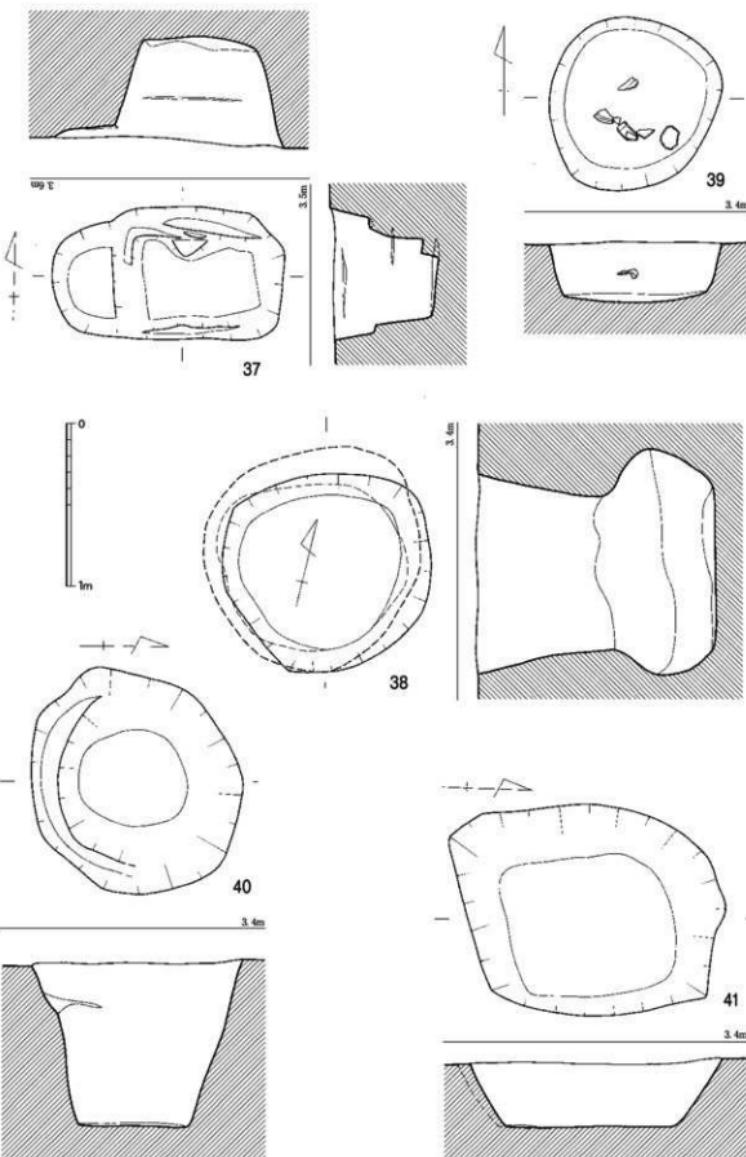
1は複合口縁壺の口縁部である。上下口縁接合部の外面と口唇部にキザミが施される。2～4は、口縁が外反して開く広口壺である。いずれも口唇部にキザミが施される。2の口唇部のキザミは、「×」状で、頸基部にもキザミが廻る。4の口唇部のキザミは、タタキのように粗く、大きく斜行する。5は、短い口縁部が開く壺で、頸基部は太い。6は、頸基部が太く、あまりくびれない短頸壺である。7は、短い口縁部が開く壺で、胴下半部に焼成後穿孔の痕跡が残る。8は、短い口縁部が開く壺で、非常になじ肩の器形である。9は、頸基部がほとんどくびれず太く、やや小型の直口壺である。10は、頸基部がわずかにくびれない壺で、なじ肩の器形となる。11は壺の底部で、レンズ状である。12は壺の底部から胴部にかけて、狭い不安定な平底である。13～15は在地系壺の口縁部から肩部にかけてである。13・15は、口唇部にキザミが施される。16は、口縁部は屈曲せず、口縁端部付近がわずかに外傾する壺である。口縁部付近に粗いタタキが密に残存する。底部は欠失するが、脚部を有する可能性がある。17は、頸基部の屈曲が非常に緩やかなやや小型の在地系壺である。18は、口縁部が屈曲して大きく開く鉢である。19は、口縁部が屈曲し、外反しながら開く鉢で、胴部はやや張る。底部は、やや突出気味で粗雑なつくりである。20は、短い口縁部が屈曲して開く鉢である。21は小型の素口縁の鉢である。22は大型の素口縁の鉢である。

### 36号土坑

Ⅲ区南側の中央部付近に位置し、Ⅲb区の南側拡張前は単独の土坑として検出したが、掘削の結果礎盤が伴い、また調査区拡張後に検出された他の柱穴とともに組み合って6号掘立柱建物跡を構成することが認められたため欠番とする。

### 37号土坑（図版20、第73図）

Ⅲ区南側中央部付近に位置する土坑で、73号土坑の北側に隣接し、1号溝を切る。平面形は長軸142cm×短軸80cmの隅丸長方形で深さ67cmである。壁の立ち上がりはある程度急な部分が多く、テラス状の部分が多数見られる。埋土は上層が灰茶褐色の砂質土で、下層は粘性の強い暗灰



第73図 III区 37～41号土坑実測図 (1/30)

褐色土である。木質物や礫が内部から検出されている。

#### 出土土器（第74図1）

1はやや大型の陶器の壺で、鉄軸が施される。内外面ともに格子状のタタキが残存する。

#### 38号土坑（図版20、第73図）

Ⅲ区南側中央部付近に位置し、34号土坑の北西側、43号土坑の南西側に隣接する。平面形は径120cm程度の円形で、深さ146cmである。壁の立ち上がりは、深さ80cm程度までの上層でやや急な傾斜であるが、そこから下位では急激にオーバーハングして外側へ広がり、検出面での平面形よりも広がる部分もある。最も広がる部分からやや狭まりながら40cm程度下位まで落ち込んで底面となる。埋土は深さ60cm程度の上層では地山に近似する淡黄灰褐色土主体で、その下位で黒灰褐色土となるが、内部が狭小なため80cm程度までしか観察を行うことができなかった。底面よりやや上位でほぼ完形の土器が多数出土した。

#### 出土土器（図版47、第74図2～8）

2は、頸基部がやや強くくびれ、口縁部が外反して開く広口壺である。頸基部には非常に低い突帯が廻る。3は壺の底部から胴部にかけて丸底である。底部の器壁はやや厚い。4・5は、口縁部が外反して開く広口壺である。6は、頸基部があまりくびれず太い直口壺である。7は高杯の杯下半部で内湾して立ち上がる。屈曲して開く杯上半部は、接合部より失われており、上端部は擬口縁状となる。内面には暗文が密に施される。

#### 39号土坑（図版20、第73図）

Ⅲ区南東部に位置し、41号土坑の南側に隣接する土坑である。平面形は径105cm程度の円形で、深さ35cmである。壁の立ち上がりはやや急な傾斜である。埋土は淡灰茶褐色の1層からなる。出土土器はすべて床面からある程度上位から出土し、破片のみである。

#### 出土土器（第74図9・10）

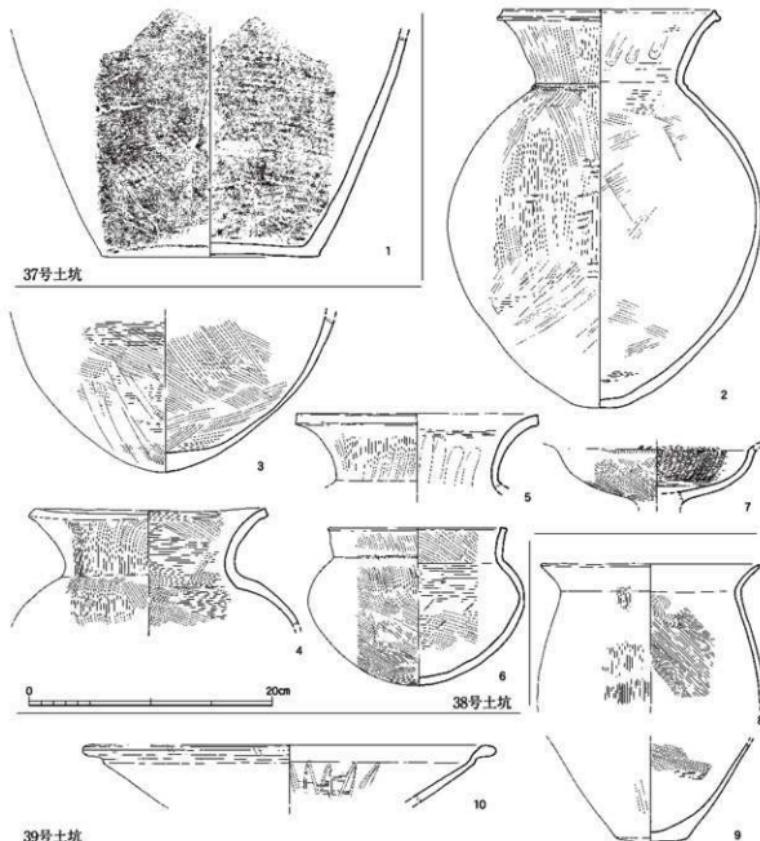
9は壺の底部で、レンズ状である。10は高杯の口縁部で、端部は肥厚して外側真横へと延びる。内面には暗文が施される。

#### 40号土坑（図版21、第73図）

Ⅲ区南東部に位置する土坑である。平面形は径135～140cm程度の円形で、深さ110cmである。壁の立ち上がりはやや急な傾斜で、南側では深さ20～30cmの位置でテラス状となる。そのテラス部分の東側は掘り過ぎにより途切れる。埋土はレンズ状に堆積し、上層は黒褐色土、暗灰褐色土、黒灰褐色土からなり、下層は地山に近似するにごった淡黄灰褐色土である。この下層にあたり、底面よりやや上位の位置から完形に近い土器が複数出土した。

#### 出土土器（図版48、第75図1～11）

1は完形の広口壺で、頸基部がやや強くくびれるため肩部が張り、口縁部は強く外反して開く。2は完形の広口壺で、口縁部が強く外反して開き、口唇部にはキザミが施される。3は、口縁部が強く外反して開く広口壺の口縁部である。4は壺の頸基部より下位で、頸基部は細く、強くくびれると見られる。5・6は、頸基部があまりくびれず、短い口縁部がわずかに外側の上方へ延びる小

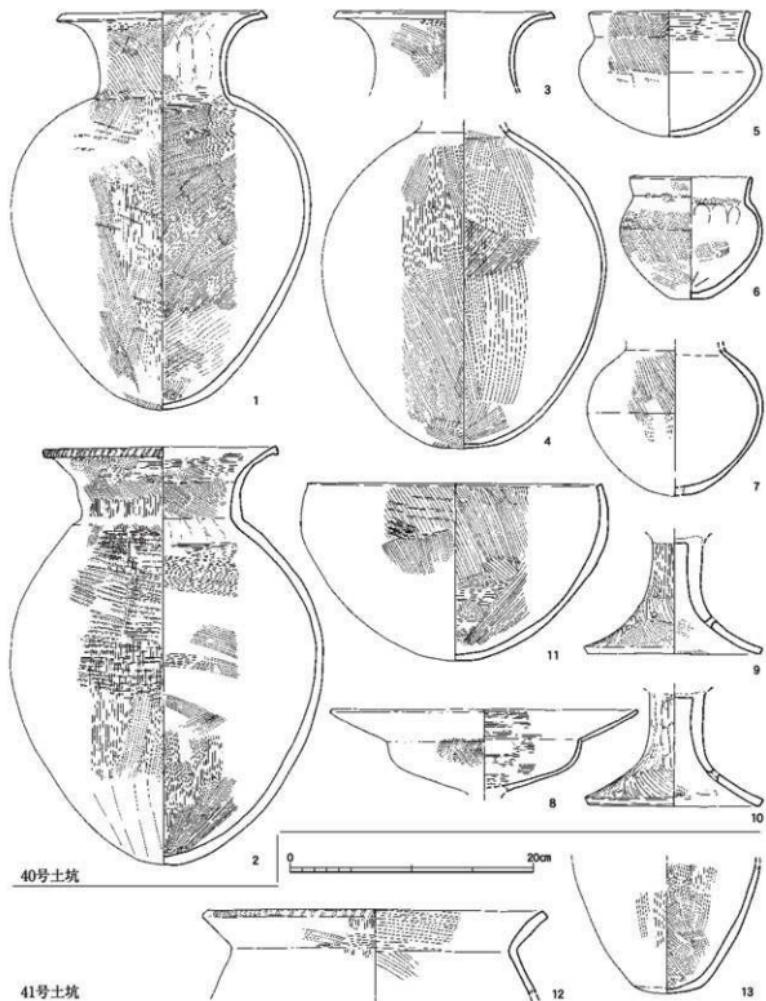


第74図 III区37~39号土坑出土土器実測図(1/4)

型の直口壺である。5の胴部は偏球形に近い器形で、6の底部は狭い平底である。7は小型の壺で、胴部は球形に近く、頸基部はやや強くくびれる。8は高杯の杯部で、下半は内湾して立ち上がり、上半は屈曲してから外側上方へ直線的に延びる。9・10は高杯の脚部で、ともに3箇所に孔が施され、上部には密にミガキが施される。11は素口縁の鉢で、口縁部付近はわずかに内傾する。

#### 41号土坑（図版21、第73図）

III区南東部に位置し、39号土坑の北側に隣接する土坑である。平面形は長軸170cm×短軸130cmの隅丸不整長方形で、深さ42cmである。壁の立ち上がりはやや緩やかな傾斜の部分が多い。埋土

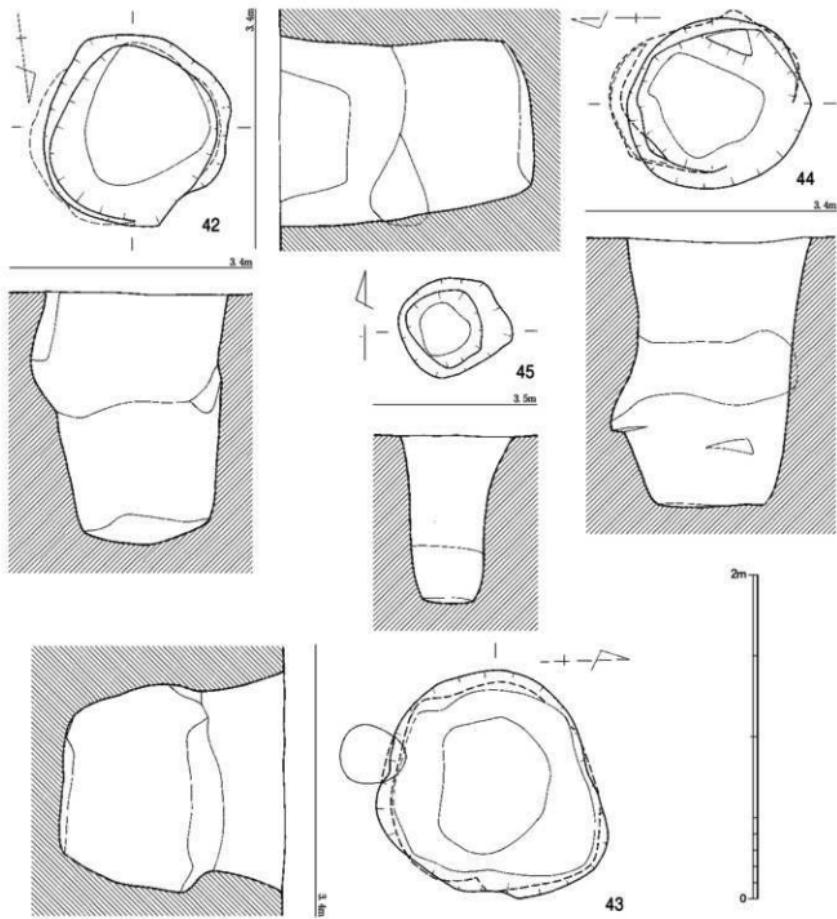


第75図 III区 40・41号土坑出土土器実測図(1/4)

は淡灰茶褐色の1層で、出土土器は破片のみである。

**出土土器 (第75図12・13)**

12は在地系壺の口縁部から肩部にかけてで、口唇部にはキザミが施される。13は壺の胴下部か



第76図 III区 42~45号土坑実測図 (1/30)

ら底部にかけてで、胸部の立ち上がりから細身の器形と想定される。底部はレンズ状である。

#### 42号土坑（図版21、第76図）

III区南東部に位置し、32号土坑の北側、46号土坑の南側に隣接する土坑である。平面形は径115cm程度の円形に近いもので、深さ155cmである。壁の立ち上がりは、非常に急な傾斜をしており、オーバーハングする部分も多く認められる。埋土については、上層では暗灰褐色土が主体で、